昭和５９年度

遺跡現地説明会資料

1．舞子古墳群　東市ヶ坂３号墳

2．山田小学校内遺跡

3．新　方　遺　跡

4．舞子東石ヶ谷遺跡

5．北神第４地点遺跡

6．西神ニュータウン内65地点遺跡

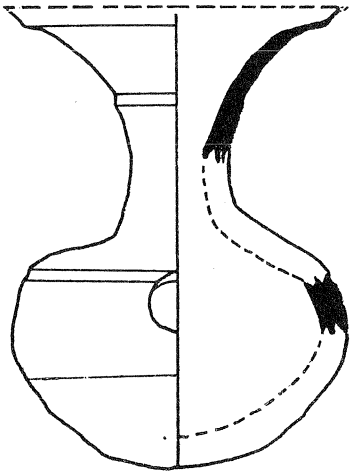
7．郡家遺跡（城ノ前地区第７次調査）

8．史跡　五色塚　・小壺古墳

神戸市教育委員会

東市ケ坂３号墳現地説明会資料

神戸市垂水区舞子坂２丁目７番所在



昭和５９年５月３日

神戸市教育委員会

東市ケ坂３号墳の発掘調査については、
神戸市水道局の協力を得ました。

表紙説明　　東市ケ坂３号墳羨道入口
から出土した須恵器
１／２

1・はじめに

東市ケ坂3号墳は、舞子古墳群の西端に所在する東市ケ坂支群中の古墳です。舞子丘陵上に存在する後期古墳の総称です。かつては100基以上もの古墳があったといわれていますが、今では約20基を残すのみとなりました。

2・調査経過

東市ケ坂3号墳の東半部は民間企業の所有地で、西半部は神戸市有地となっています。S・58年度に東半部が宅地造成されることになり、工事に先立ち発掘調査を実施しました。調査の結果、直径16mの円墳で、横穴式石室を内部主体とする後期古墳であることが判明しました。墳丘はほとんどが削り取られていたため、石室の保存について協議を行なっていたところ、西半部についても神戸市水道施設を計画中であることを知りました。そのため、古墳の規模と性格を明らかにするため調査を実施することになりました。

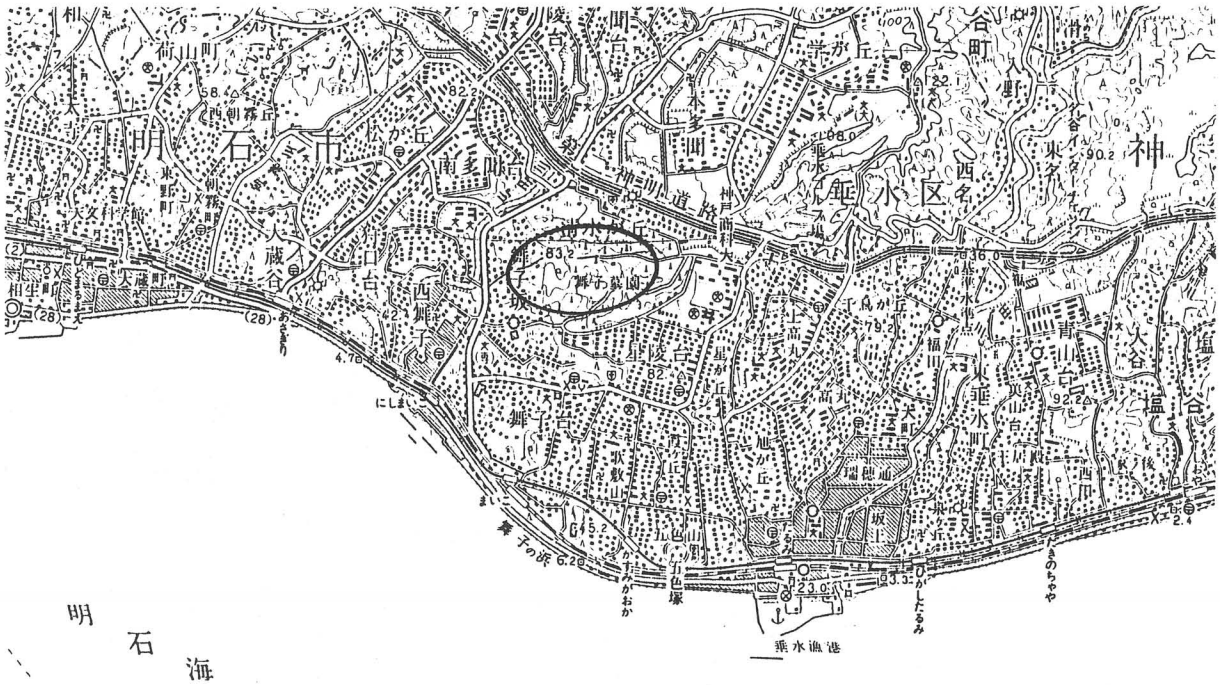
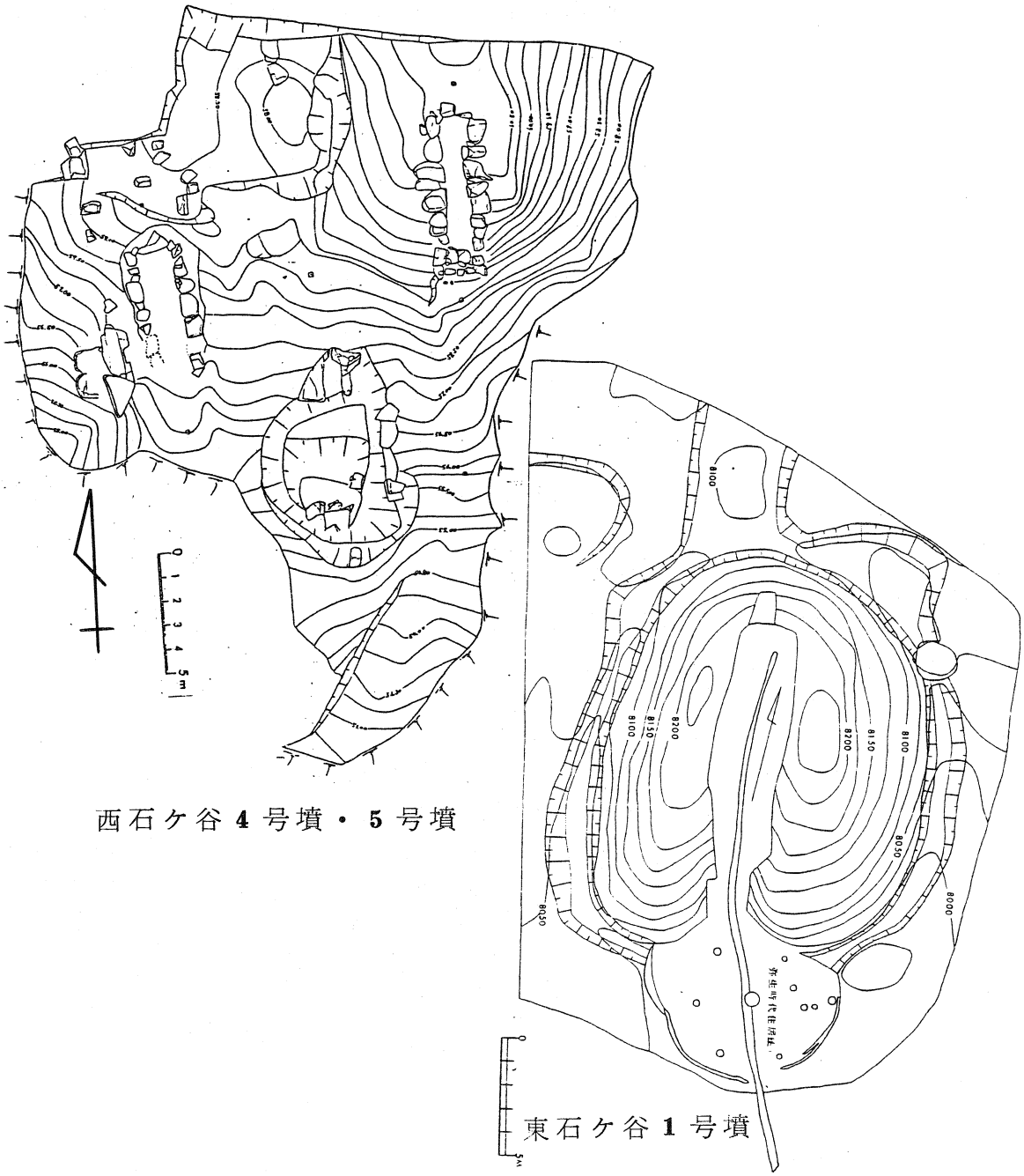


図1 舞子古墳群位置図

1：25000

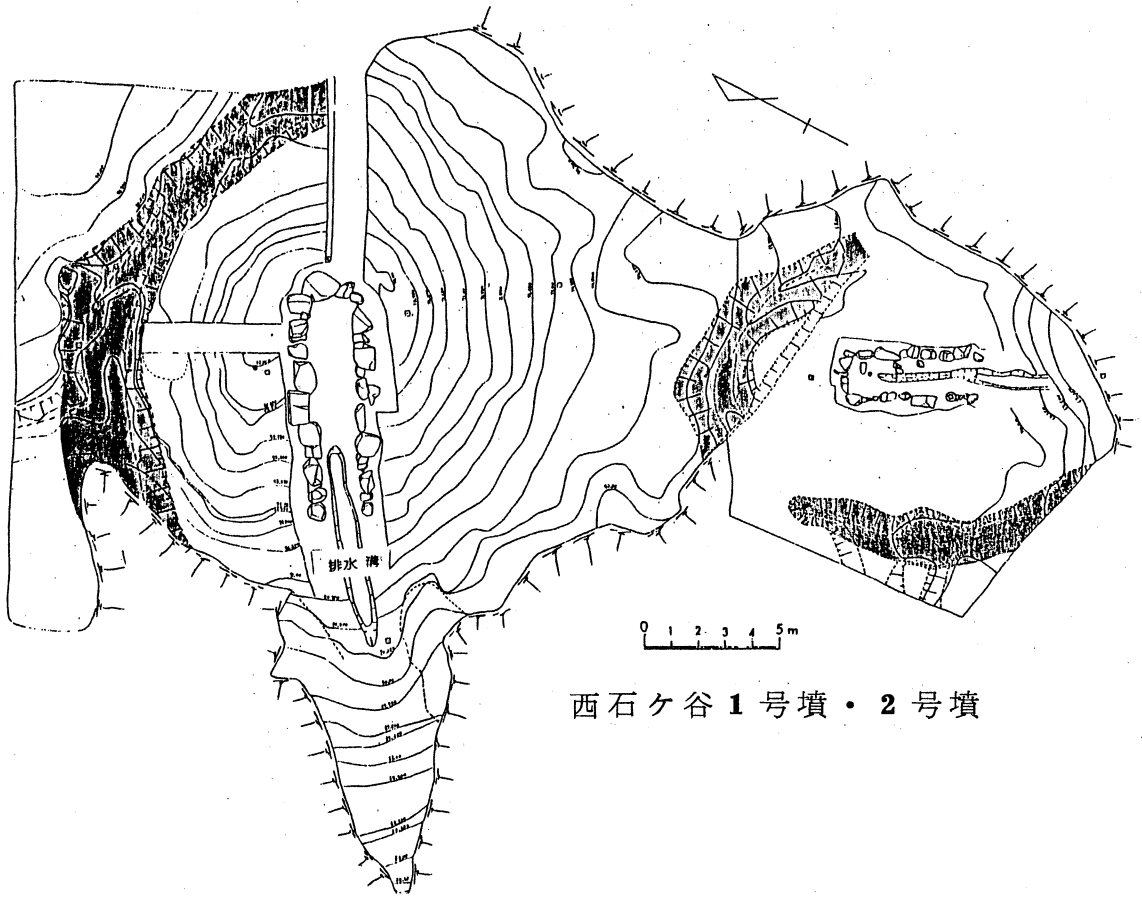
3．これまでの調査

昭和39年度に尼ケ谷支群3基、52年度に東市ケ坂支群2基、55・56年度に西石ケ谷支群6基、57年度に東石ケ谷支群1基を調査しています。その他に舞子丘陵では、弥生土器片・石器等も採集されています。また東石ケ谷1号墳発掘調査時には、弥生時代後期の住居跡が発見されています。



西石ケ谷4号墳・5号墳

東石ケ谷1号墳



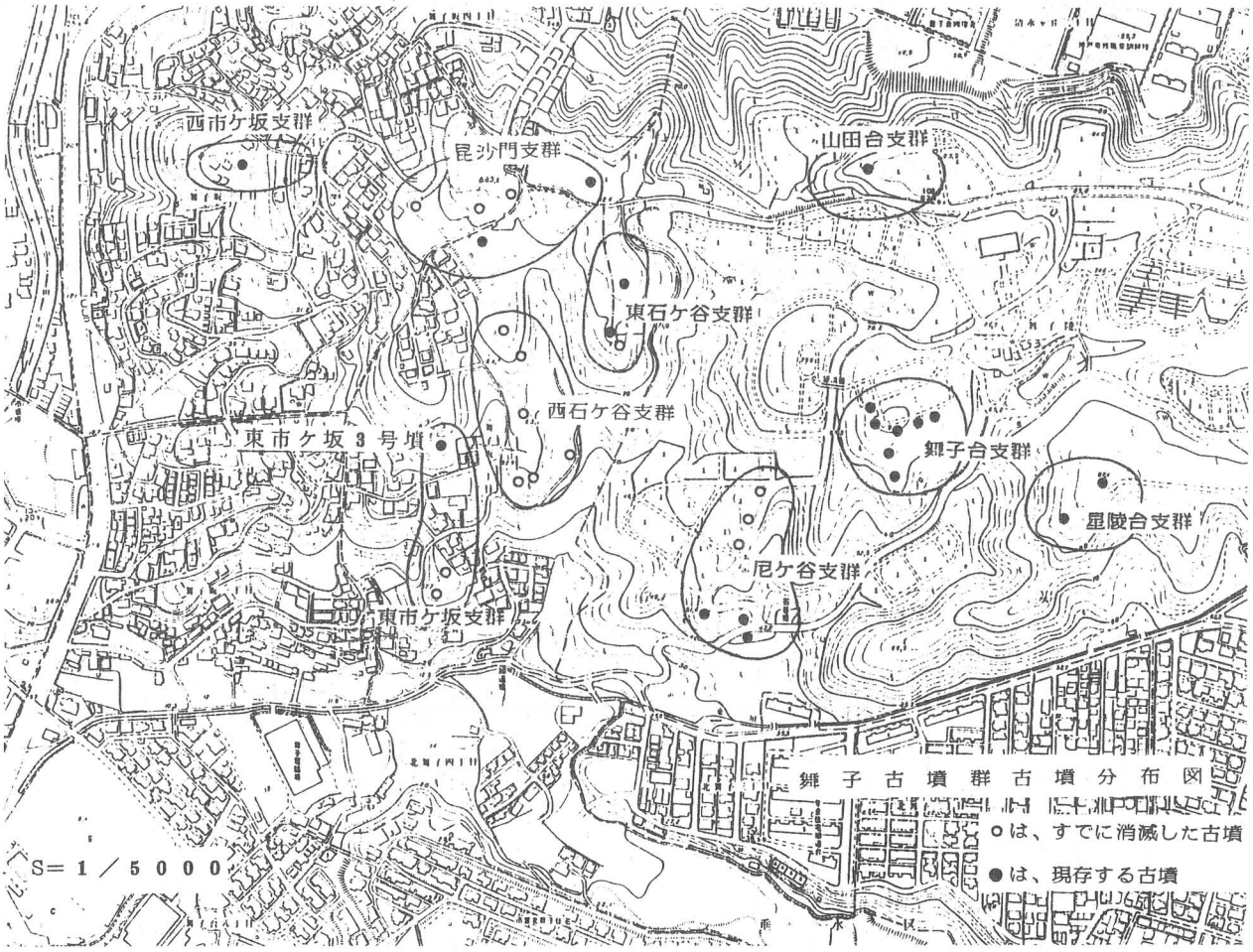
西石ケ谷 1 号墳・2 号墳

	玄室長 (a)	玄室幅	玄室残存高	袖幅	羨道長 (b)	羨道幅	羨道残存高	排水溝長	排水溝幅	排水溝深	a+b	墳形(現存高)	直径	袖	開口方向	墳丘形態と周溝	周溝幅	周溝深	備考
西石ケ谷 1号墳	5.2	1.8	2.05	0.3	3.5	1.5		7.5	0.9	0.26	8.7	円	18	右片袖	N 57°E 南西		2		持ち送り 閉塞石
2号墳	5.0	1.4	0.7	—				6.3	0.7	0.1	5 +α	円	10	無袖	N 26°W 南東		2		
3号墳	3.7	1.3	0.8	0.3	3.2	0.9	0.9	11.5	0.6~1.9 直角に曲がる		6.9	円	12	右片袖	N 16°E 南				
4号墳	3.3	1.6	2.3	0.4	3.7	1.1					7.0	円 (2.25)	13	〃	N 9°W 南		2		石棚? 馬具 閉塞石
5号墳	3.5	1.6	1.1	0.3	2.0 +α	1.3					5.5 +α	円	9	〃	N 2°E 南				馬具 閉塞石 (南
6号墳	4.4	1.1	1.3	0.4	3.4	?	0.7				7.8	円	12	〃	N 5°E 南				
東石ケ谷 1号墳	5.5	1.4	2.0	0.1	3.5 (石有り) 3.0 (石無し)	1.4		22.8	0.4		12.0	円 (1.6)	14~17	〃	N 4°30'E 南		1.4		持ち送り
東市ケ坂 3号墳	4.8	1.9		0.1	2.7	1.8					7.5	円	16	〃	西				持ち送り

これまでに調査した古墳の一覧表

4．古墳の立地

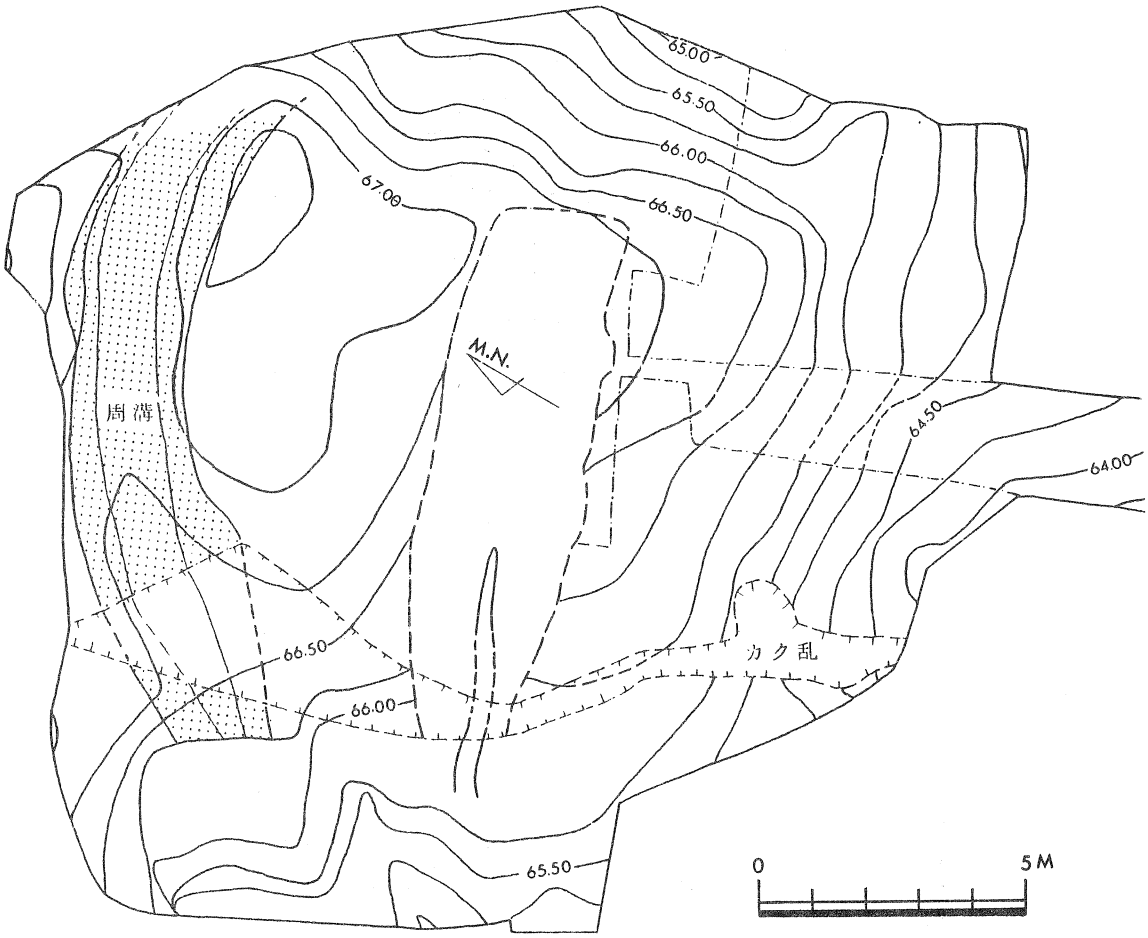
東市ケ坂3号墳は、旧舞子浄水場内南東端にあります。浄水場造成の際に地形はかなり改変されたようですが、古い地図等から復元すると東南へ延びる70m前後の尾根上にあったと思われます。さらに東市ケ坂1・2号墳は、その尾根の先端に存在していました。



5．古墳の形と大きさ

古墳は直径16mの円墳であったと推定されます。しかし、墳丘は後世の造成により相当削平されてしまい、古墳の盛土はほとんど残っていません。

古墳の周囲には溝が掘られており、その溝の幅は約2m、深さ約0.2mです。



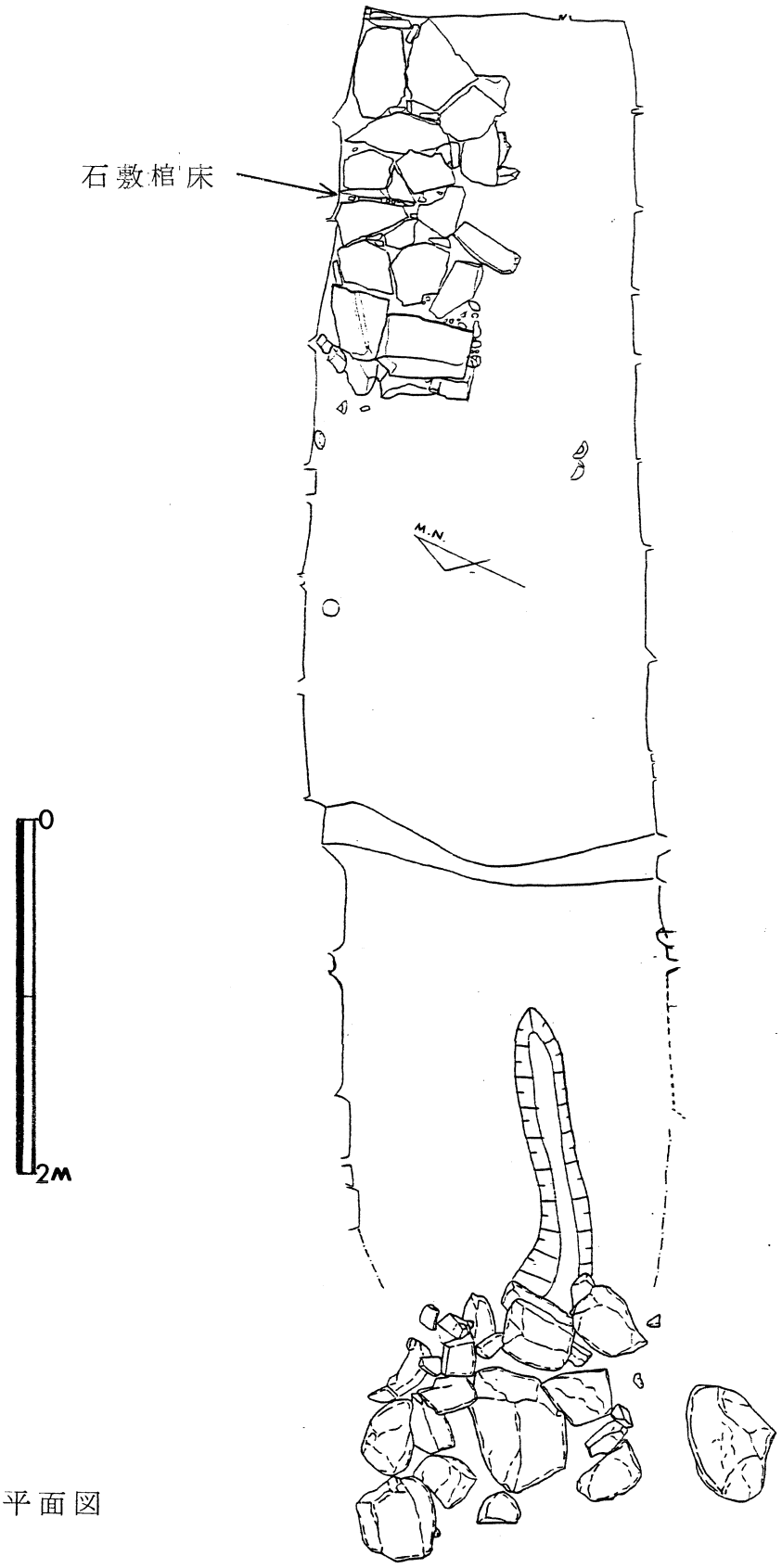
東市ケ坂 3 号墳墳丘実測図

6．石室の形と大きさ

古墳の内部主体は、横穴式石室で、玄室右側に袖にあたる石は縦積みにしています。

石室は、側壁の天井に向かってじょじょにせり出す持ち送りが見られます。現在残っている側壁の高さは床面から約 1 m です。

さらに石室羨道部分から石室外へと排水溝が掘られていました。



石室平面図

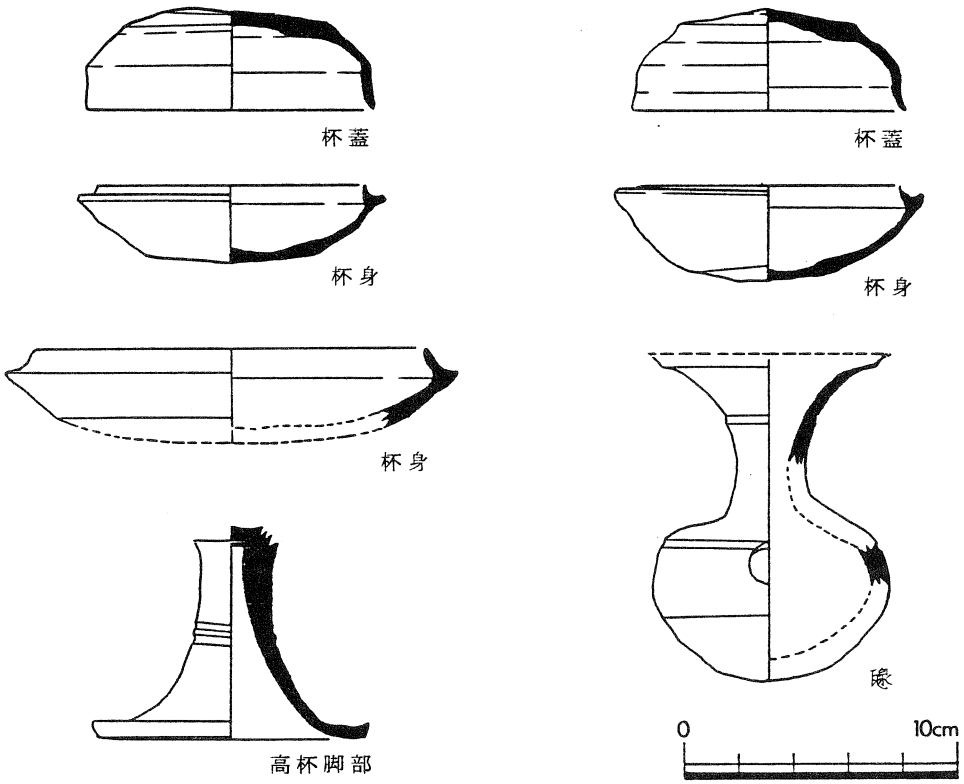
7．石室内部の状態

石室内には天井石や、側壁の崩れ落ちた石材と土砂が流れこんでいました。また側壁や奥壁が後世にこわされ、盗掘を受けたあともありました。

玄室の奥には、玄室床面よりさらに高く、石の面をそろえて棺を置くところ（棺床）をつくっています。

玄室床面は、赤褐色粘質土を地山にはり、玄室床面としています。羨道にはこの粘質土はみられませんでした。

出土遺物は、盗掘を受けたようで原位置をとどめるものはありませんでした。玄室内から須恵器坏蓋1、坏身2、高坏脚部等が出土しましたが、羨道部からは遺物を発見することはできませんでした。



東市ケ坂3号墳出土遺物

8．周溝

また周溝内から金環2・ガラス溶融片4片・須恵器甕が出土しました。溝内に土が堆積した後遺物が棄てられ、さらに溝内に土が堆積したと考えられます。

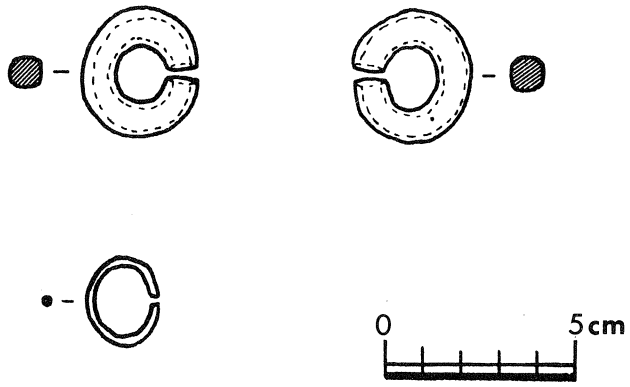
須恵器甕は小破片が散乱して出土していることから、甕を意識的に割り、棄てたと考えられます。

9．まとめにかえて

今回の調査で、東市ケ坂3号墳は直径16mの円墳で、石片袖の横穴式石室であることがわかりました。

さらに現在までに発掘された舞子古墳群内の古墳では、はじめての石敷の棺床をもつ珍しい古墳であることがわかりました。

古墳が築られた年代は出土した遺物や石室の形態等から6世紀後半ごろの古墳であると考えられます。



東市ケ坂3号墳出土遺物

舞子古墳群関連略年表

年代（西暦）		付近の遺跡
200 弥生時代	東石ケ谷遺跡	大歳山遺跡（復元住居）
300	このころ古墳が作り始められる.	ひさご塚 天王山4号墳
400	前方後円墳の時代	五色塚古墳 狩口台きつね塚
500	群集墳の時代 仏教伝わる 今回調査の古墳	舞子古墳群
600 古墳時代		
700	大化改新 遣唐使の初め 火葬の始まり 平城京造営	西神89地点

山田小学校内遺跡

発掘調査現地説明会資料

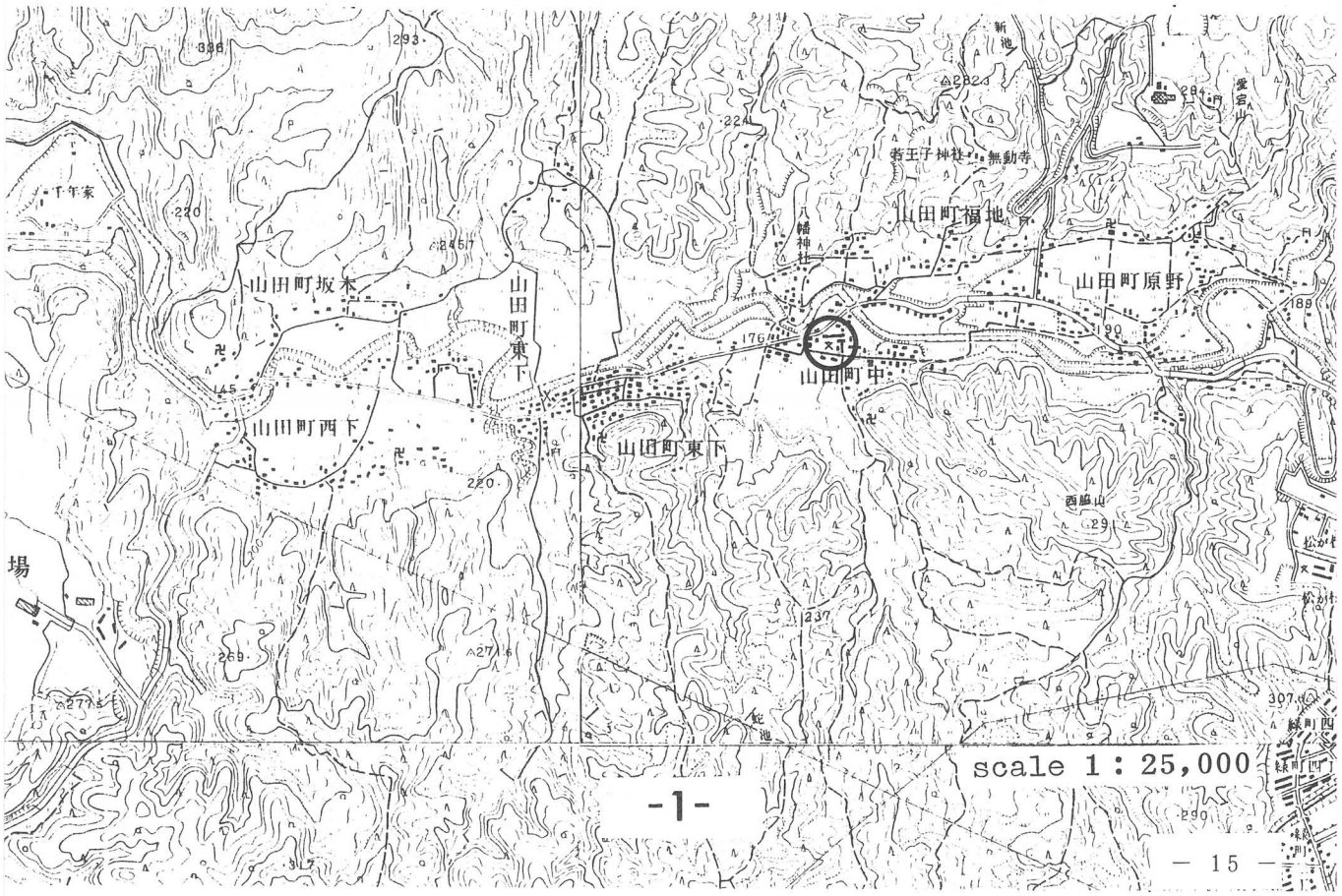
昭和59年5月27日

神戸市教育委員会

1　はじめに

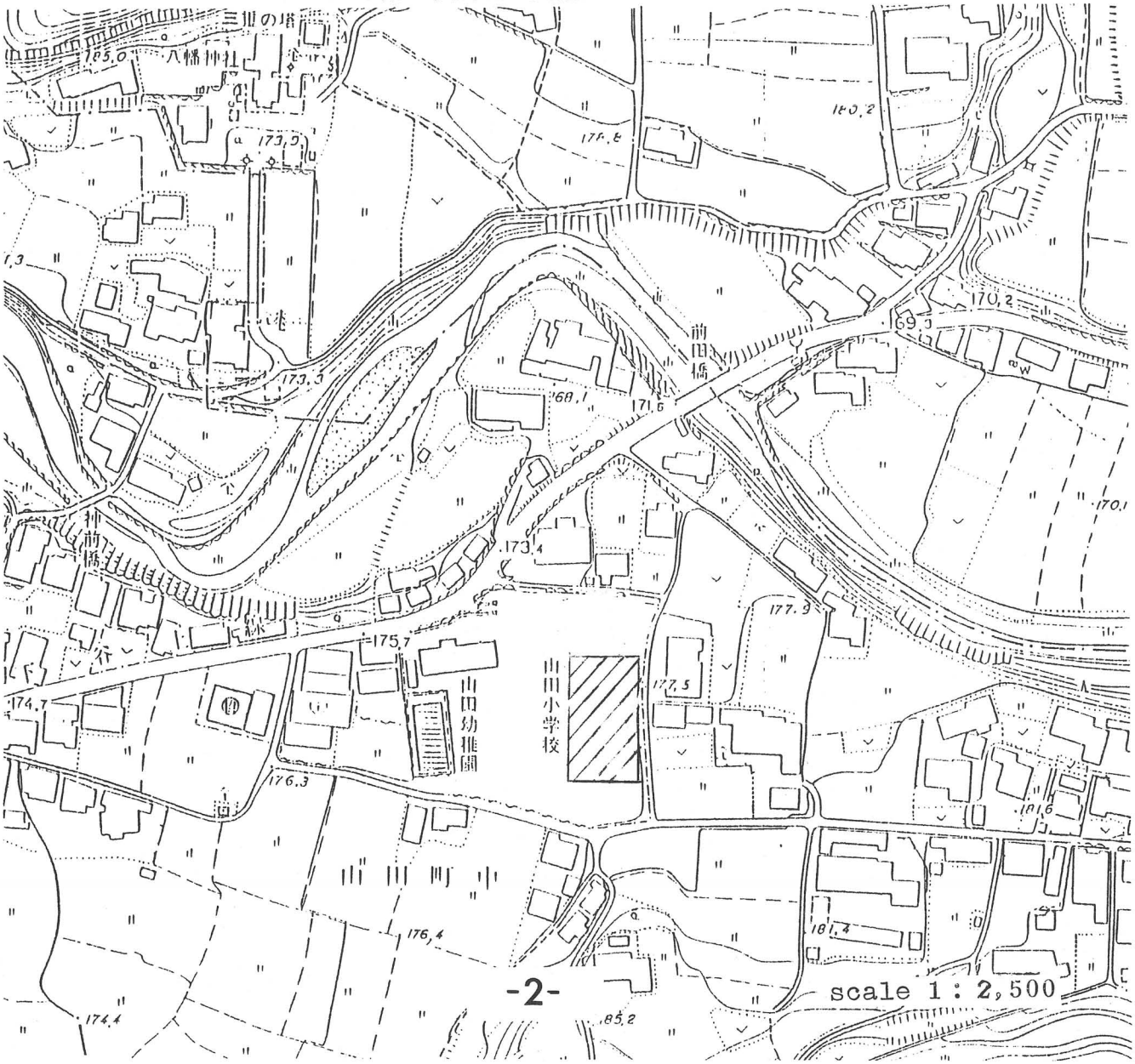
位置と環境　山田小学校内遺跡は神戸市北区山田町中に所在しており，六甲山地と帝釈山地を水源として東から西へと流れる山田川の南河岸段丘上に立地しています．

山田川の北側には，淡河との境をなす帝釈連山がそびえ，その山麓に平安時代中期・後期の仏像が安置された無動寺や，もと無動寺の鎮守社である室町時代前期の若王子神社があります．調査地の対岸に，室町時代後期の八幡神社三重塔を望むことができます．また山田川の中流域には，日本最古の民家である箱木千年家（室町時代）が残っています．



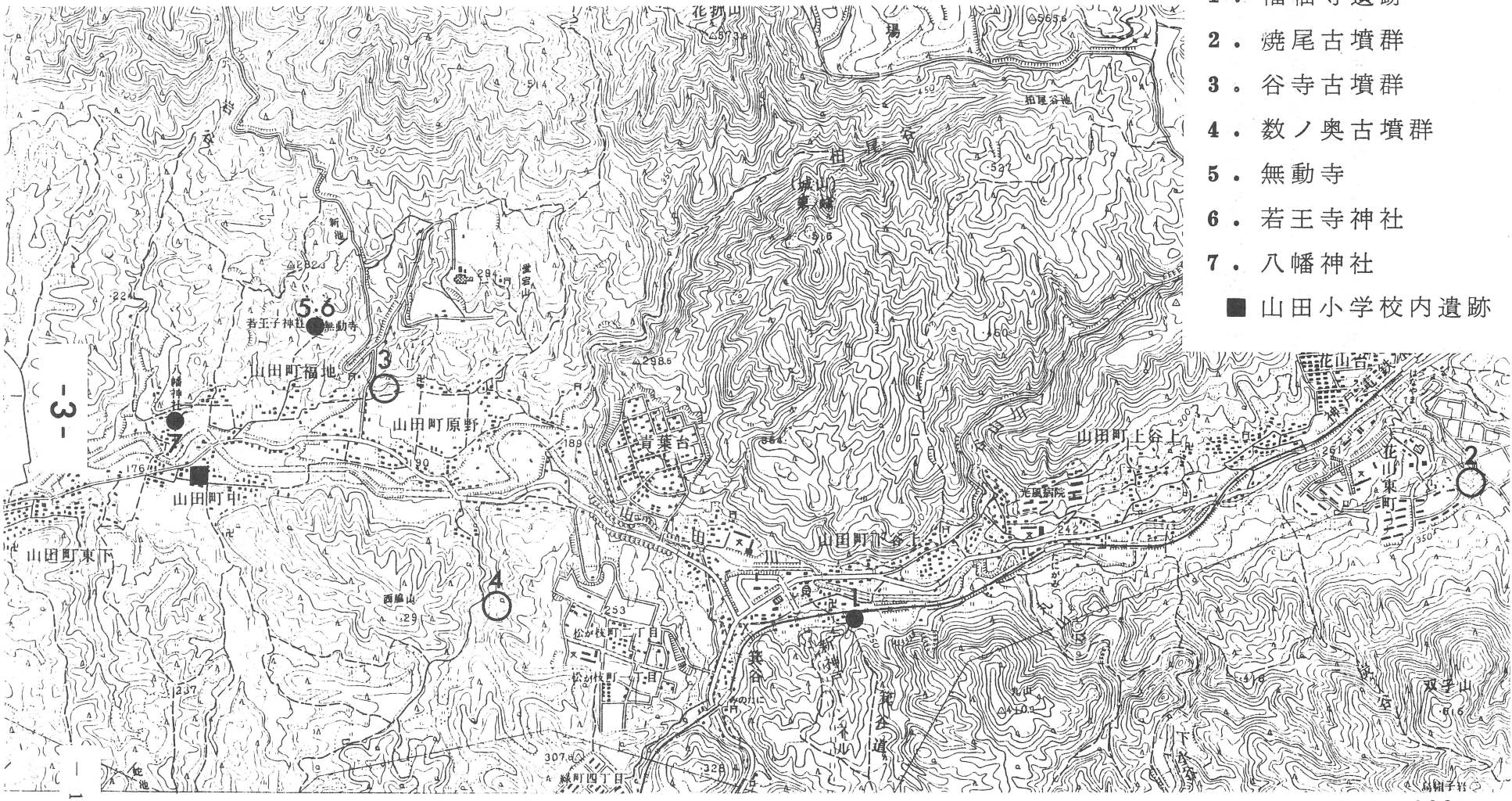
調査経過　　山田小学校の校舎建て替えに伴い，試掘調査を行ったところ，中世の遺物包含層が確認されたため，昭和５８年７月２８日～１０月６日にかけて，約８００㎡について第１次調査を実施しました．

今回は，第１次調査の南側，南北４０ｍ，東西２４ｍの約８７０㎡について昭和５９年４月３日から第２次調査を実施しています．



周辺の遺跡

1．福仙寺遺跡
2．焼尾古墳群
3．谷寺古墳群
4．数ノ奥古墳群
5．無動寺
6．若王寺神社
7．八幡神社
■ 山田小学校内遺跡



scale 1：25,000

2　周辺の遺跡

山田町周辺の遺跡には，今から約１万年前の旧石器時代の終わり頃にさかのぼる下谷上の福仙寺遺跡が知られています．福仙寺遺跡からはサヌカイト製の有舌尖頭器が出土しています．

次の縄文時代には，小部ソバカ坂で遺跡が見つかっています．

しかし，弥生時代の遺跡はほとんど見つかっていません．古墳時代についても，上谷上の焼尾古墳群，原野の谷寺古墳群，下谷上の数ノ奥古墳群などの群集墳を除けば，数量的に少ない地域といえます．

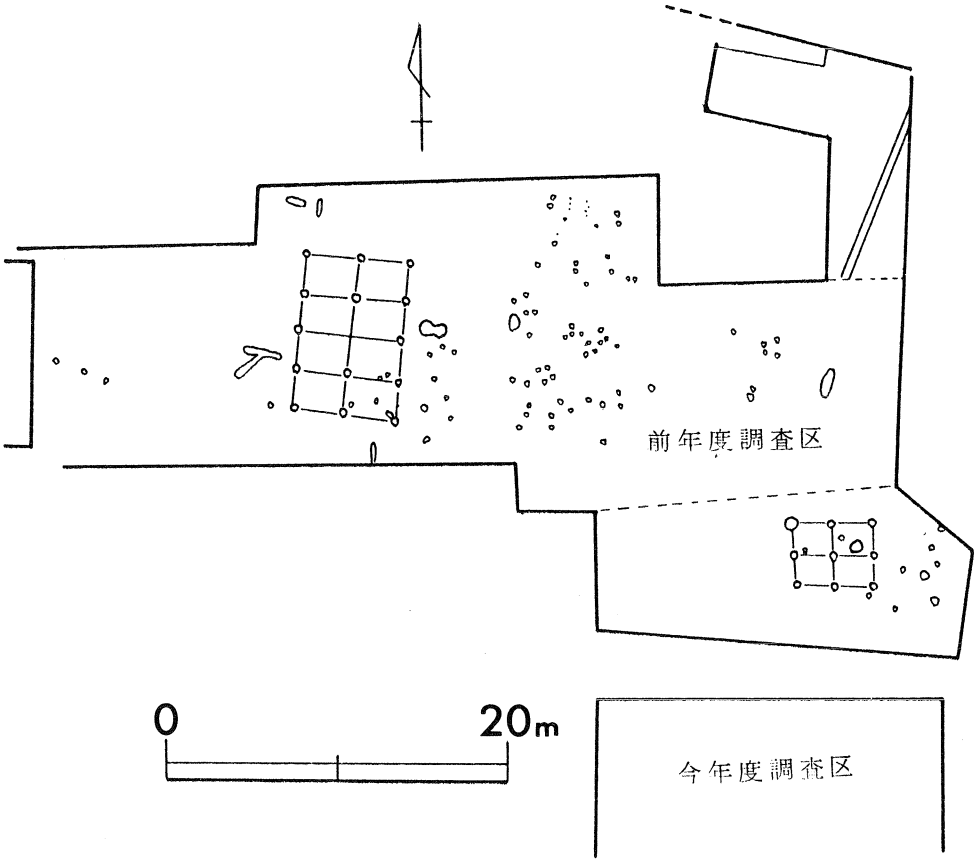
また，奈良時代に属する遺跡もほとんど見つかっていません．

ところが，平安時代に入ると，“山田荘”の名で，文献上にもあらわれるようになり，無動寺の三体仏も，この時期につくられたものです．

鎌倉時代～室町時代にかけて，山田町の遺跡の数は，急激に増加します．山田町福地の若王子神社本殿や山田町中の八幡神社三重塔，山田町衝原の箱木千年家などの建造物をはじめ，山田川の谷筋に沿って，五輪塔や宝篋印塔などの石造物がつくられるようになります．

3　前年度調査の概要

前年度の調査で検出された遺構は，掘立柱建物址２棟・溝１条・焼土壙１か所・石敷遺構１か所です．出土した遺物は土器片が多く，コンテナに２６箱分あります．出土した遺物の時期は，奈良時代の須恵器杯などもありますが，平安時代末期～室町時代初期（１２世紀から１４世紀）のものが中心です．



4　調査の概要

○遺　構　　今回の調査で検出され遺構は，７世紀中頃の竪穴住居址１棟，平安時代末期～鎌倉時代（１２世紀～１３世紀）の掘立柱建物址７棟・土壙墓２基・溝２条・土壙１０か所・石敷遺構１か所です．

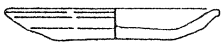
①　７世紀中頃・約１３００年前の遺構

・　竪穴住居址１　南北4.8ｍ，東西4.4ｍを測る方形の竪穴住居址で，調査区の南西隅で検出されました．後世の削平により，上面がかなり削られているため，柱穴・炉址・周壁溝などは確認できませんでした．住居址内の南東隅で，焼土塊が見つかっています．また，須恵器杯身１，土師器甕１などが出土しています．

竪穴住居跡１
出土須恵器
scale １：４

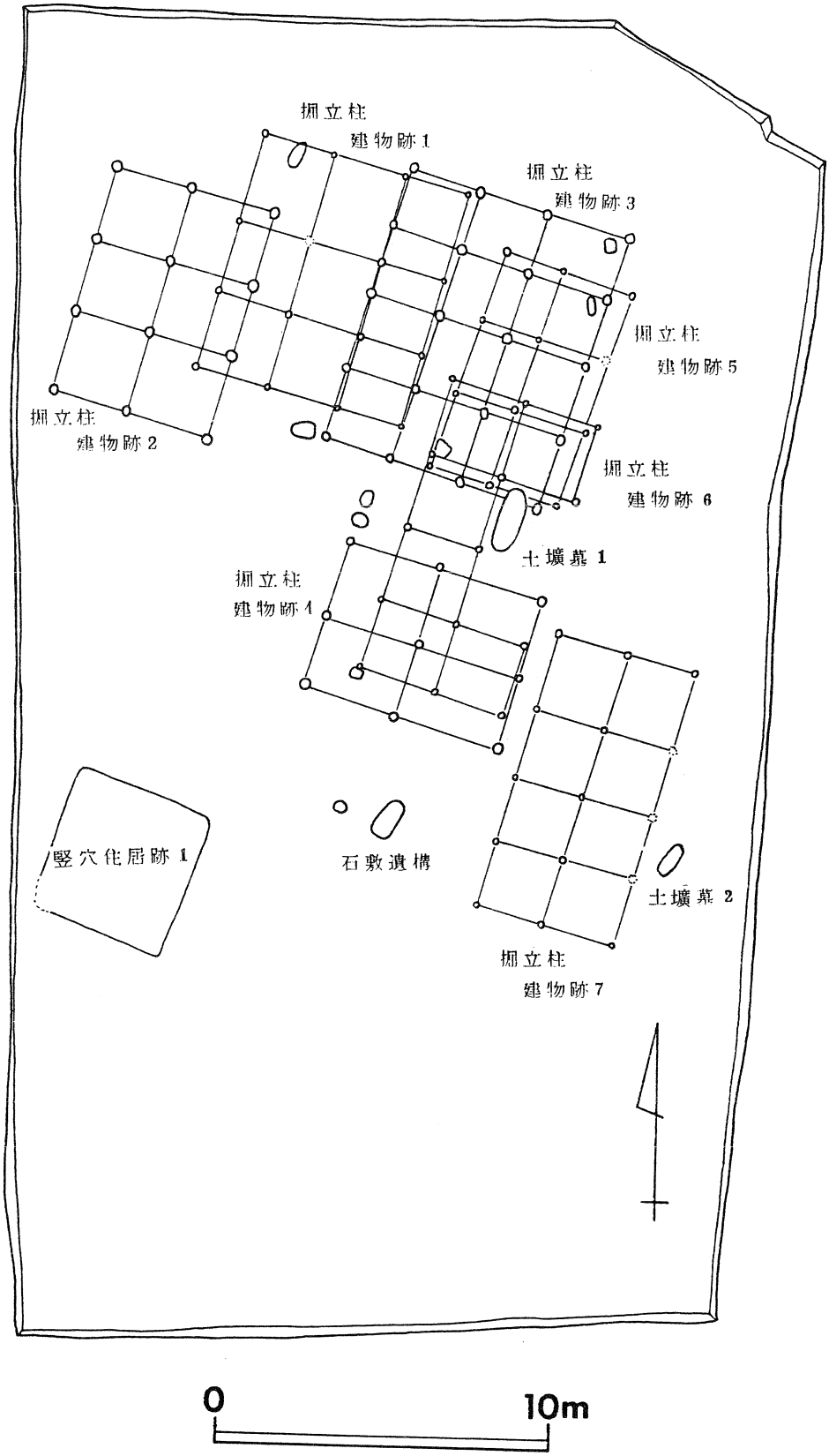
②　平安時代末期～鎌倉時代（１２世紀～１３世紀・約７００～８００年前）の遺構

・　掘立柱建物址１　南北7.2ｍ，東西6.4ｍを測る３間×３間の総柱の建物です．柱穴から土師質羽釜が出土しています．



掘立柱建物跡出土土器
scale １：４

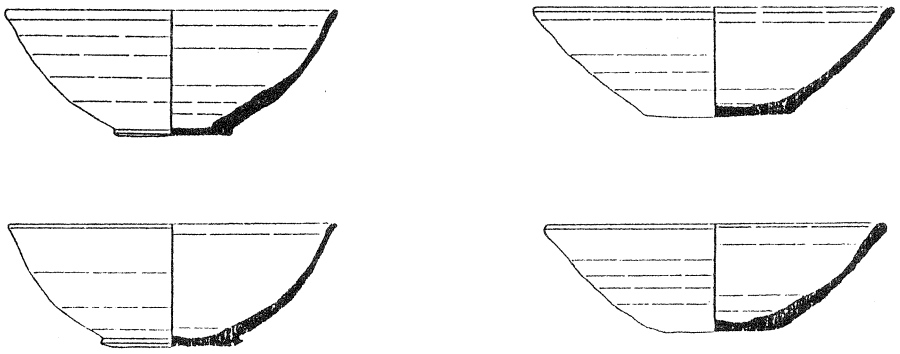
・　掘立柱建物址２　南北6.8ｍ，東西4.8ｍを測る３間×２間の総柱の建物です．柱穴から須恵器椀３，土師器小皿１が出土しています．


掘立柱
建物跡1
掘立柱
建物跡3
掘立柱
建物跡5
掘立柱
建物跡2
掘立柱
建物跡6
土壙墓1
掘立柱
建物跡4
竪穴住居跡1
石敷遺構
土壙墓2
掘立柱
建物跡7
0
10m

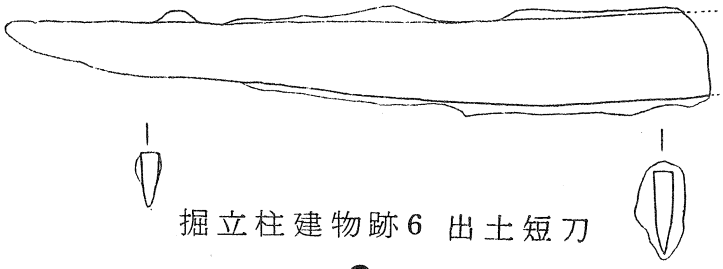
・　掘立柱建物址３　南北８．７６ｍ，東西６．７２ｍを測る４間×３間の総柱の建物です．今回検出した掘立柱建物の中では最も大きなものです．柱穴から土師器小皿１が出土しています．柱穴の重複関係から掘立柱建物址１よりも新しい時期のものであることがわかっています．

・　掘立柱建物址４　南北４．５ｍ，東西６．０ｍを測る２間×２間の総柱の建物です．

・　掘立柱建物址５　南北６．８ｍ，東西３．９ｍを測る３間×２間の総柱の建物です．柱穴から須恵器埦１が出土しています．



掘立柱建物跡出土須恵器　　scale 1：4

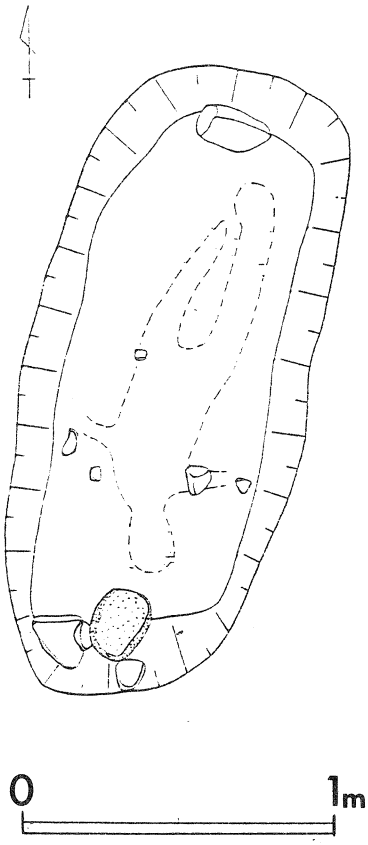


scale 1：2

掘立柱建物跡６ 出土短刀

・　掘立柱建物址６　南北9.36ｍ，東西4.5ｍを測る４間×２間の建物です．東側の２間目と３間目の間に柱穴が検出されないところからコの字形のプランをもつ建物である可能性があります．柱穴から須恵器埦６，同小皿１，土師器小皿２，土師器堝１，短刀（あるいは刀子）１が出土しています．

・　掘立柱建物址７　南北8.4ｍ，東西4.3ｍを測る４間×２間の総柱の建物です．柱穴には土器や石の入ったものがあります．

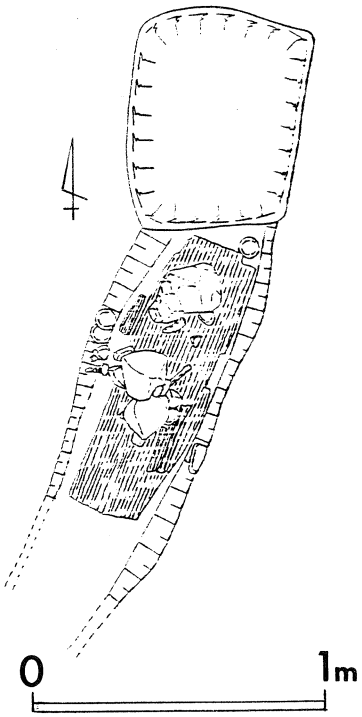


土壙墓１

・　土壙墓１　南北2.1ｍ，東西0.9ｍ，深さ0.3ｍを測る楕円形の遺構です．土壙墓の南端から，歯が検出されており，南向きに頭を向けて埋葬されていたことがわかります．また，頭の南側に人頭大の礫を置いています．埋土から白磁碗１，土師器小皿２，鉄塊１などが出土しています．

土壙墓２　南北1.7ｍ以上，東西0.5ｍ，深さ0.1ｍ以上を測る長方形の遺構です．墓壙内には，頭蓋骨や足の骨などの人骨がかなり良好

な状態で残っていました．人骨は，幅0.3 m，長さ1.0 m以上の底板の上に頭を北向きにして埋葬されており，胸のあたりに上からこぶし大よりやや大きめの礫が2つ置かれていました．また底板の西側には側板の一部も検出されているため，この人骨は木棺に納められていた可能性があります．頭蓋骨の北東から土師器小皿1，墓壙の西端から土師器小皿2，足もとのあたりから須恵器埦の破片1などが出土しています．

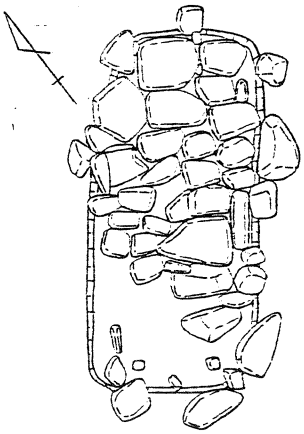


土壙墓 2

・ 溝1　掘立柱建物址4の西側で検出された東西方向に流れる溝で，全長3.2 m，幅0.3 m～0.4 m，深さ0.1 mです．

・ 溝2　掘立柱建物址1の南側で検出された東西方向に流れる溝で，全長4.8 m，幅0.4 m～0.8 m，深さ0.1 mです．

・ 土壙1～10　長径0.5 m～1.0 m，短径0.4 m～0.9 m，深さ0.1 m～0.3 mを測る楕円形の土壙です．土壙7から土師質羽釜1，土壙9から土師器小皿5が出土した他は，いずれも土器の小片が出土したにすぎませんでした．



0　石敷遺構　1m

・　石敷遺構1　南北1.4 m，東西0.7 m，深さ0.1 mを測る楕円形の遺構です．地面を掘り凹めた土壙の底に，一辺が0.1 m～0.2 mのやや角ばった花崗岩質の板石を敷きつめていました．石材の一部には，火を受けた痕跡がありました．出土した遺物はいずれも小片で，この遺根の性格については現在のところ不明です．

○遺　物

竪穴住居址1から出土した須恵器・土師器を除くと，ほとんどの遺物が，平安時代末期～鎌倉時代にかけてのものです．最も多いのは須恵器で椀・皿・鉢・甕などがあります．その他に土師器の皿・堝・甕をはじめ，白磁碗などの磁器や短刀などの鉄器もあります．

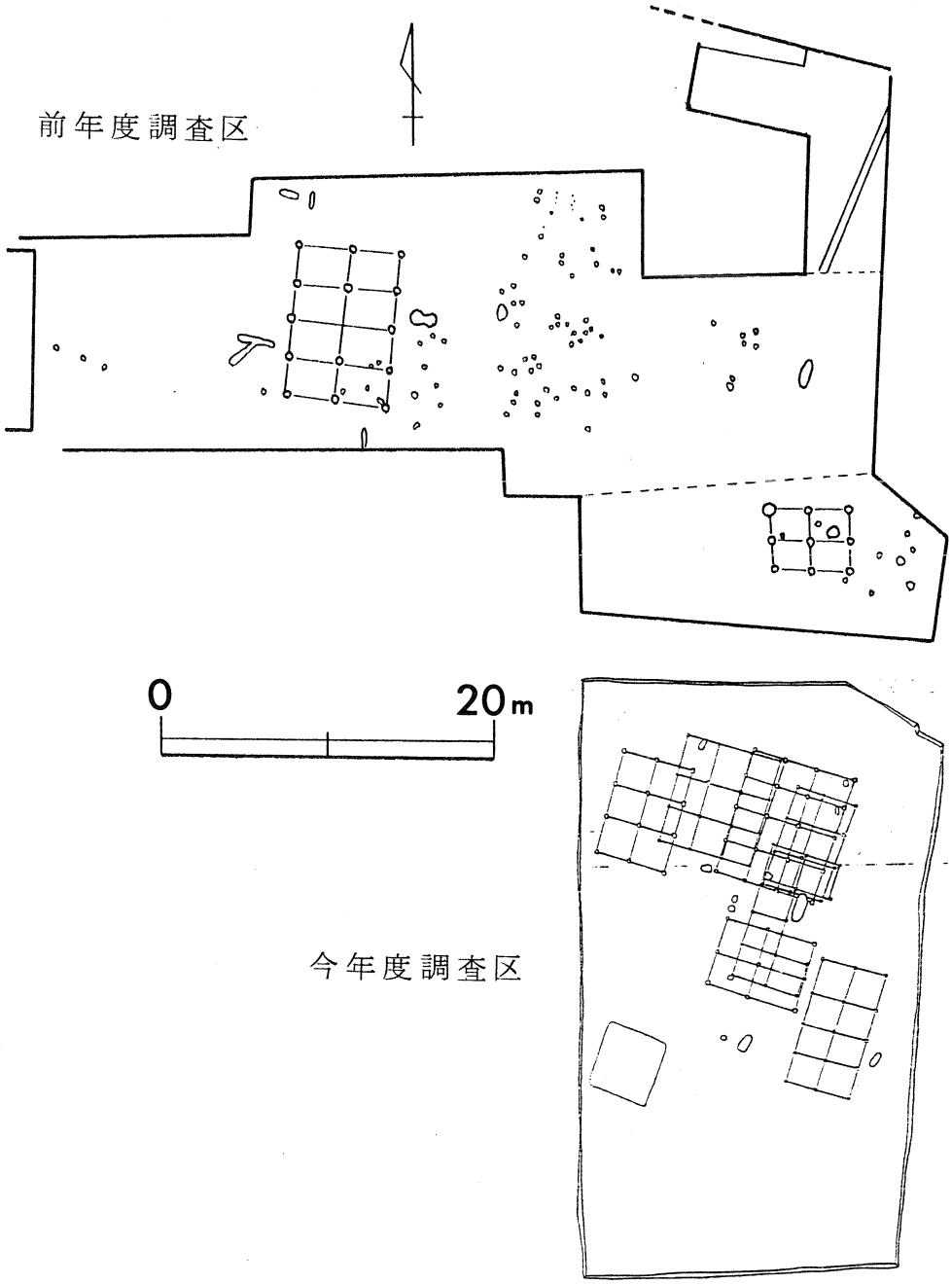
5　ま　と　め

これまで余り発掘調査の進んでいなかった山田地区において，前年度に引き続き，中世の建物址が発見されたことは，この地における中世の生活を考えるうえにおいて非常に意義深いことと言えるでしょう．

北を帝釈山地，南を六甲山地という二つの自然の要害に囲まれたこの地域は，古くから西国街道の裏

街道として，淡河道とともに東西を結ぶ交通上の要所でもありました．

今後の調査によって，この地域における歴史がしだいに明らかにされていくことでしょう．

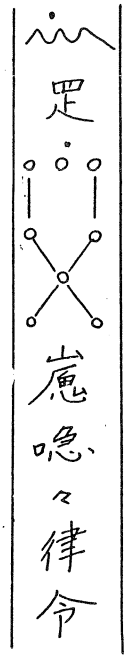


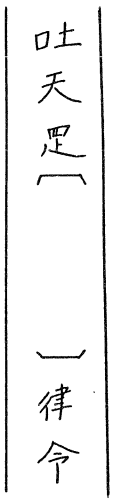
山田小学校内遺跡調査区配置図

神　戸　市　西　区　玉　津　町

新　方　遺　跡

現　地　説　明　会　資　料





昭和59年6月10日

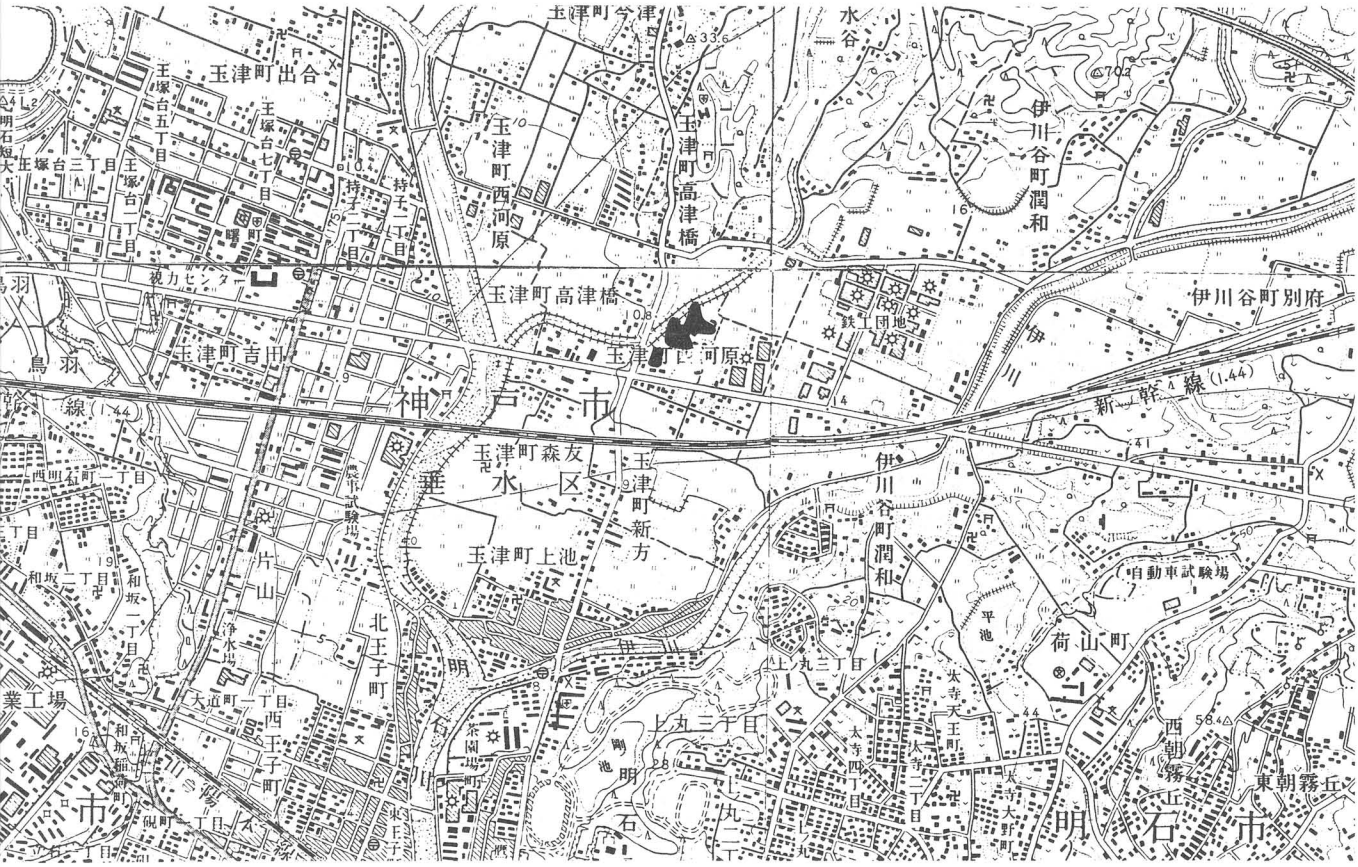
神戸市教育委員会

1　はじめに

今回の調査は，昭和５９年５月１日から開始し，約1,４００㎡を対象に実施しています．

現在までの調査では，鎌倉時代の遺構が存在する面と，古墳時代の遺構が存在する面が確認され，下層には，弥生時代の遺構が存在する２面の層を確認しています．

このたびの見学会では，鎌倉時代の遺構と古墳時代の遺構を見学していただきます．検出された遺構は，鎌倉時代の建物址，井戸，溝，土壙と古墳時代の竪穴住居址です．



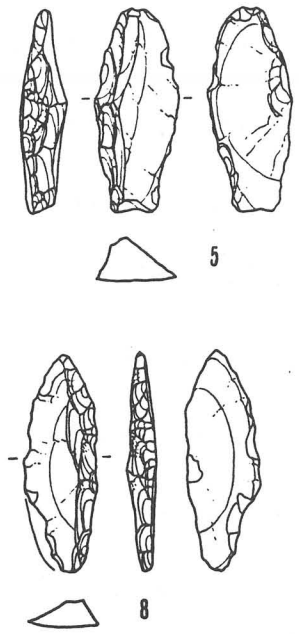
調査地位置図

2. 周辺の地形と環境

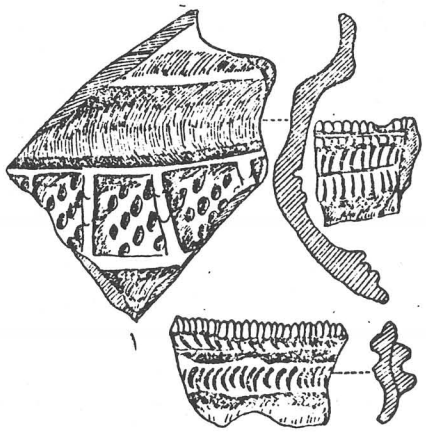
明石平野は，その中央部を流れる明石川，その支流である伊川・枦谷川などによって形成された沖積地です．明石川は北区山田町藍那付近に源を発し，右岸には印南台地と呼ばれる高位段丘面があり，平野町黒田・常本地区には発達した低位段丘面があります．玉津町居住・田中，伊川谷町別府・池上付近では扇状地状の地形を呈し，このあたりから沖積地が明石海峡に向かって広がっています．

この明石平野に人類の痕跡が始めて残されるのは，明石市西八木で発見された明石原人と呼ばれる人類で，今から約２０万年前の旧石器時代のことです．また，今から約２万年前の後期旧石器時代に使用されていたナイフ型石器と呼ばれる石器が神戸市内各地で発見されていますが，生活の痕跡を示すような遺跡は発見されていません．

縄文時代の遺跡としては，垂水区内では前期末の大歳山遺跡，中期の舞子浜遺跡，後期の元住吉山遺跡などがあります．元住吉山遺跡では後期の後半の土器が炉址と共



池上南遺跡出土
ナイフ形石器



大歳山遺跡出土
縄文土器

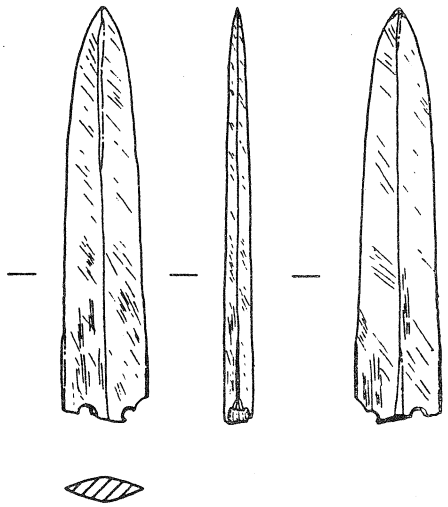
明石平野の主要遺跡

1、新方遺跡
2、吉田南遺跡
3、池上ロノ池遺跡
4、今津鎌田遺跡
5、居住遺跡
6、田中遺跡
7、池上北遺跡
8、青谷遺跡
9、北別府遺跡
10、南別府遺跡
11、加古寺東山遺跡
12、大歳山遺跡
13、出合遺跡
14、西神62地点
15、王塚古墳
16、天王山古墳群
17、瓢塚古墳
18、中村古墳群
19、印路古墳群
20、舞子　古墳群
21、投上銅鐸出土地

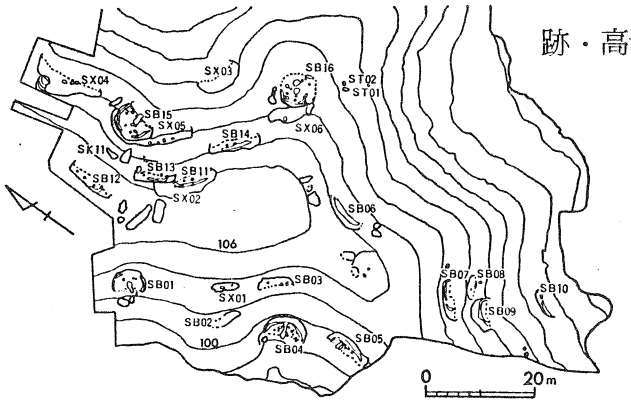
3

に発見されています．

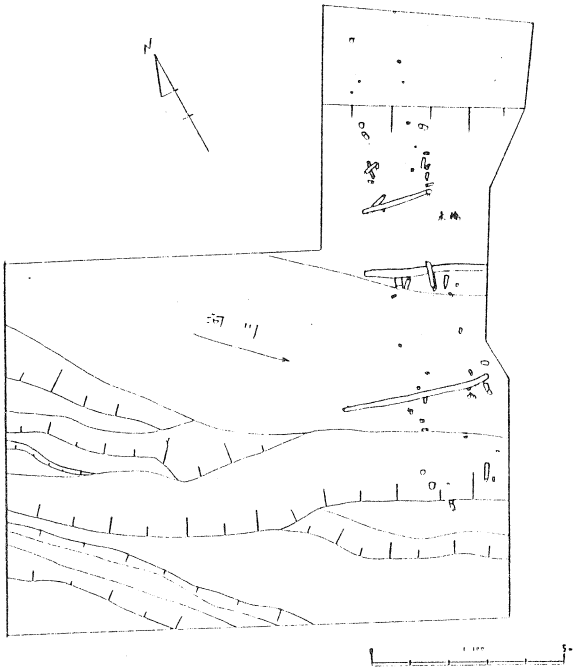
弥生時代に入ると，明石平野には数多くの遺跡が出現してきます．玉津町吉田遺跡は，近畿地方でも最も古い時期の遺跡の一つで，早くから明石平野において稲作を主とする農耕が定着したことが知られます．弥生時代前期の遺跡としては，この他，新方・片山・今津・居住・常本遺跡などがあり，前期の段階で平野の全域に農耕を営む集落が広がったと思われます．中期に入ると遺跡数は増加し，青谷などの丘陵上にも集落が出現します．このような丘陵上の集落は中期の後半に明石川・伊川・枦谷川の中流域にも数多く出現します．西神５０地点・如意寺裏山・頭高山遺跡などが代表的な遺跡です．後期の遺跡としては吉田南遺跡・高津橋岡遺跡などが代表的なものです．



頭高山遺跡
磨製石剣



遺構全体図



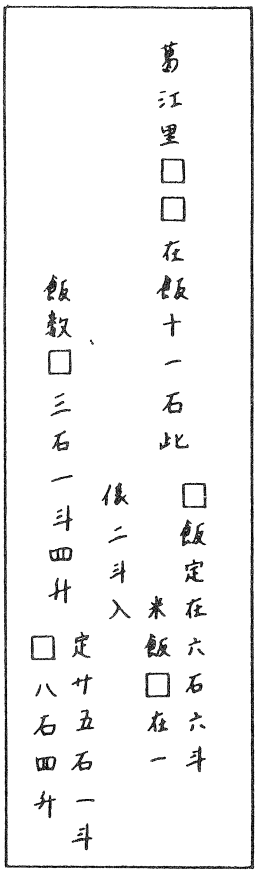
吉田南遺跡第8次
調査遺構図

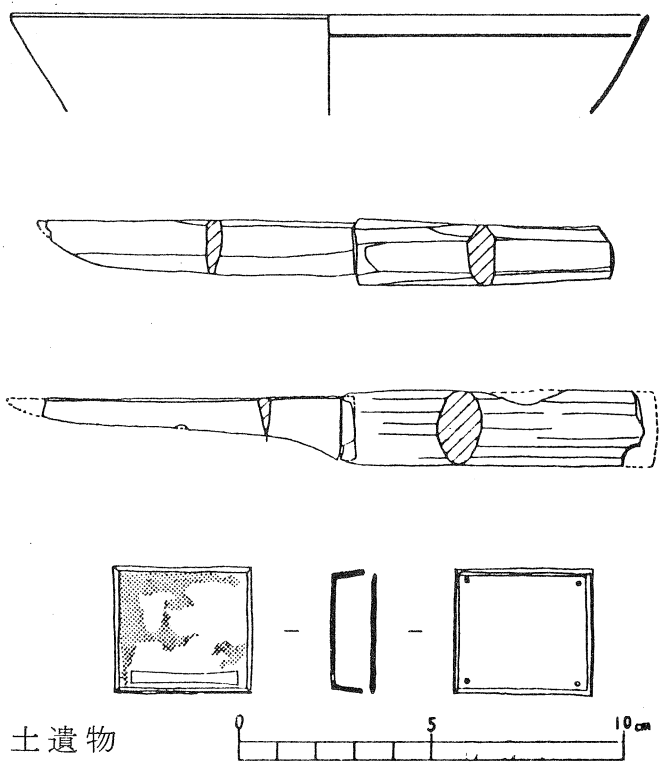
古墳時代の遺跡としては，先の吉田南遺跡や池上，口ノ池遺跡などから集落址が発見されています．

また，古墳では天王山4号墳が4世紀の中頃に出現し，瓢塚（ひさごづか）・王塚などの前方後円墳が造られるようになります．

6世紀代には西神ニュータウン内や平野町印路・平野町中村などで小形の円墳が群をなす，「群集墳」が形成されています．

歴史時代の遺跡は明石平野各所にあり，奈良・平安時代の郡衙（ぐんが）と考えられる吉田南・出合遺跡などがあります．



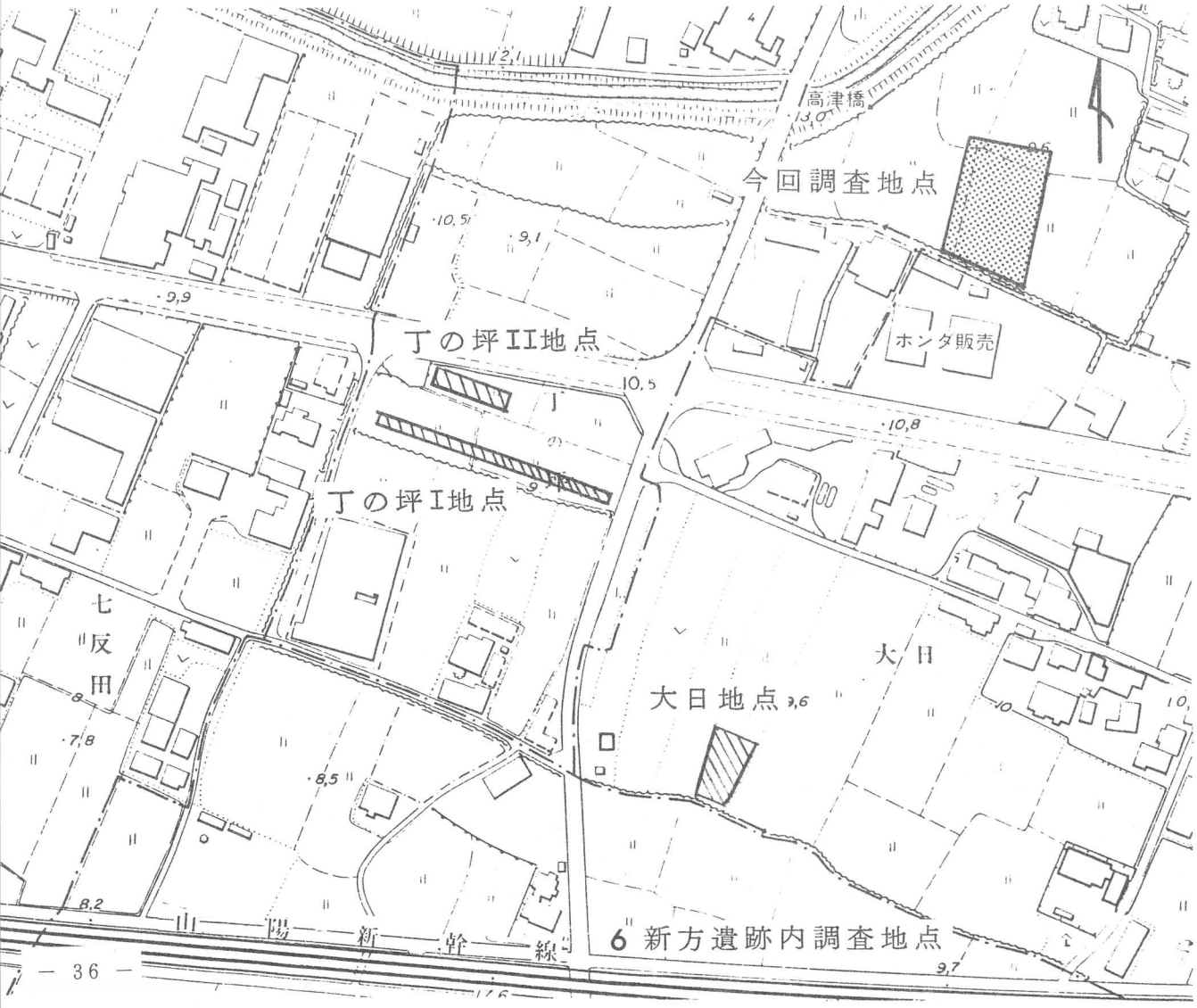


吉田南遺跡出土遺物

3　今までに実施した新方遺跡の発掘調査

新方遺跡は，昭和４５年度に兵庫県教育委員会が，山陽新幹線建設工事に先立って行った分布調査・確認調査で発見された遺跡です．この際の調査で弥生時代中期から鎌倉時代までの土器が多量に出土し注目されました．

その後，範囲確認調査や，宅地造成工事，工場建設工事に伴う小規模な発掘調査を実施してきました．

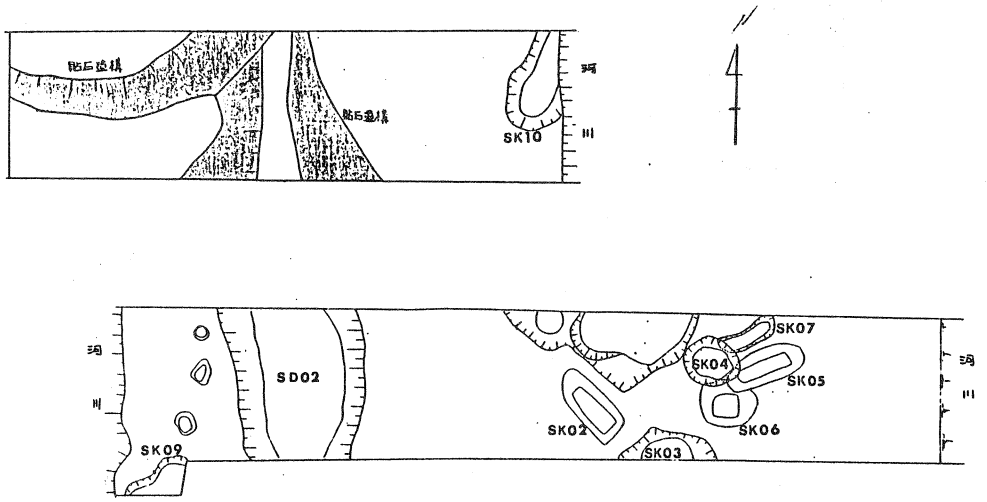


これらの調査結果から新方遺跡は範囲が広く，年代も弥生時代から鎌倉時代までの長い期間続いた複合遺跡であることがわかってきました．

新方丁の坪Ⅰ地点

昭和５５年に調査を実施した新方遺跡丁の坪Ⅰ地点では，５面の遺構面が存在し，弥生時代から鎌倉時代までの遺構が発見されました．このとき発見された貼石のある周溝墓は，現在も類例のない弥生時代中期の墓です．また，大量の土器が周溝中から出土し，畿内でもあまり例のない高さ９０cmの大きな壺が発見されています．

昭和５７年には，新方遺跡大日地点，新方遺跡丁の坪Ⅱ地点の調査を実施しました．



丁の坪Ⅰ地点　中期中頃　遺構図

7

新方大日地点

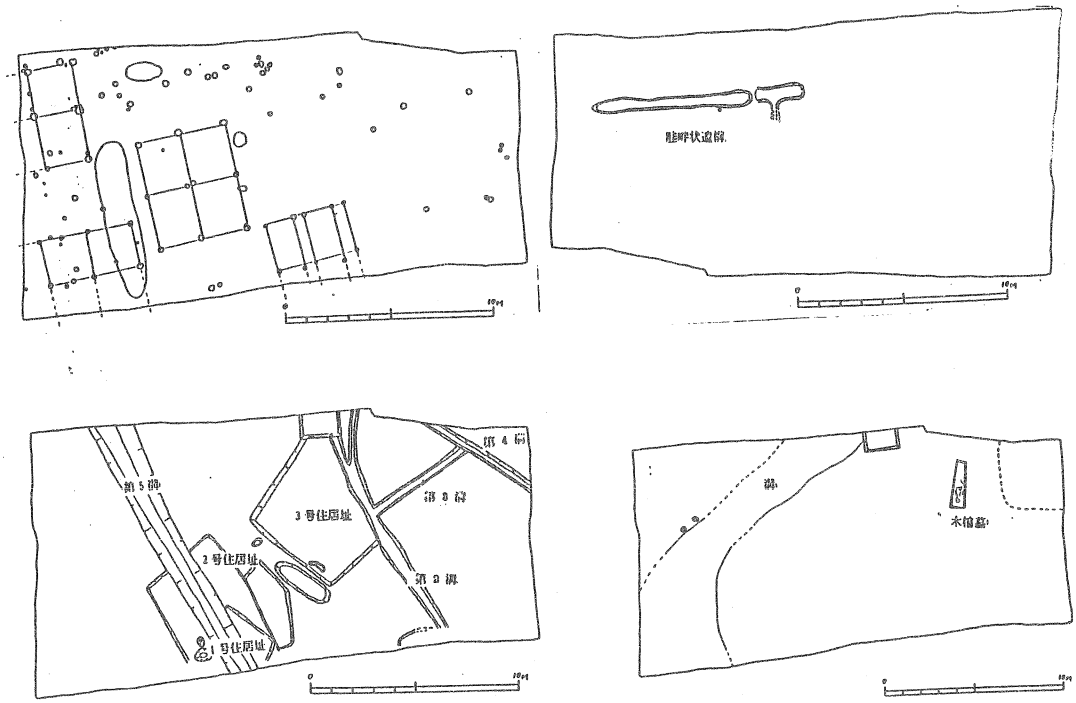
大日地点では，4面の遺構面が存在し，弥生時代から鎌倉時代までの遺構が検出されました．

検出された遺構の中でも，古墳時代後期の玉造り工房址は，畿内でも数少なく重要な発見でした．

また弥生時代中期の木棺墓からは，人骨が発見されました．

第1遺構面

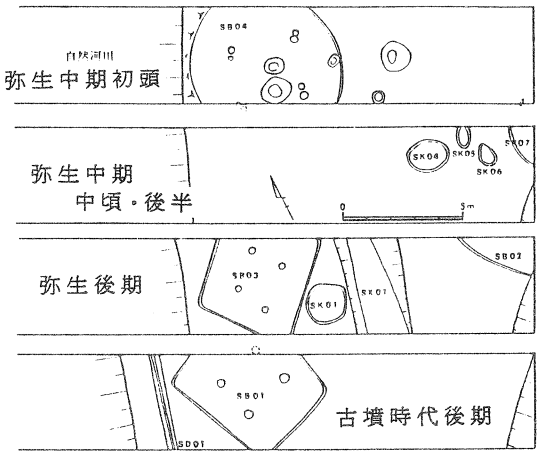
第2遺構面



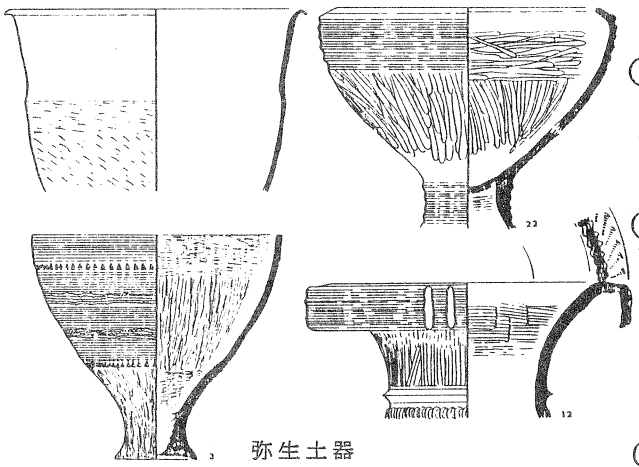
第3遺構面

大日地点遺構図

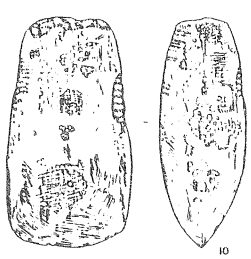
新方丁の坪Ⅱ地点



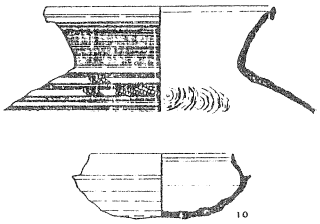
時期別遺構配置図



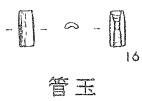
弥生土器



石斧

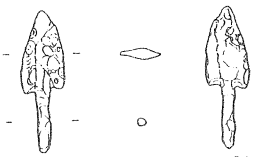


須恵器



管玉

玉未製品



銅鏃

丁の坪Ⅱ地点では，4面の遺構面が存在し，弥生時代からの古墳時代までの遺構が検出されました．この地点では，弥生時代中期の玉の未製品が多量に出土し，新方遺跡での玉造りが弥生時代から始められていたことを証明しました．

また弥生時代中期の銅鏃も出土しました．

以上のように

① 新方遺跡は，弥生時代から鎌倉時代まで続く大規模な複合遺跡であること

② 弥生時代中期のころには，明石川流域では中心的な集落であったと考えられること

③ 弥生時代から古墳時代までの玉造り工房址が発見され，新方遺跡が当時の社会の中で重要な位置を持っていたと考えられること

4　調査概要

A　遺　構

遺構の分布は南東部に多く，東と北は少ないという傾向が見られます。

特に柱穴は南半部には密集して発見されていますが，北半部には，ほとんど存在していません。

掘立柱建物 1

調査区のほぼ中央付近で発見された東西4間（9.3 m）×南北3間（8.4 m）の建物です。

掘立柱建物 2

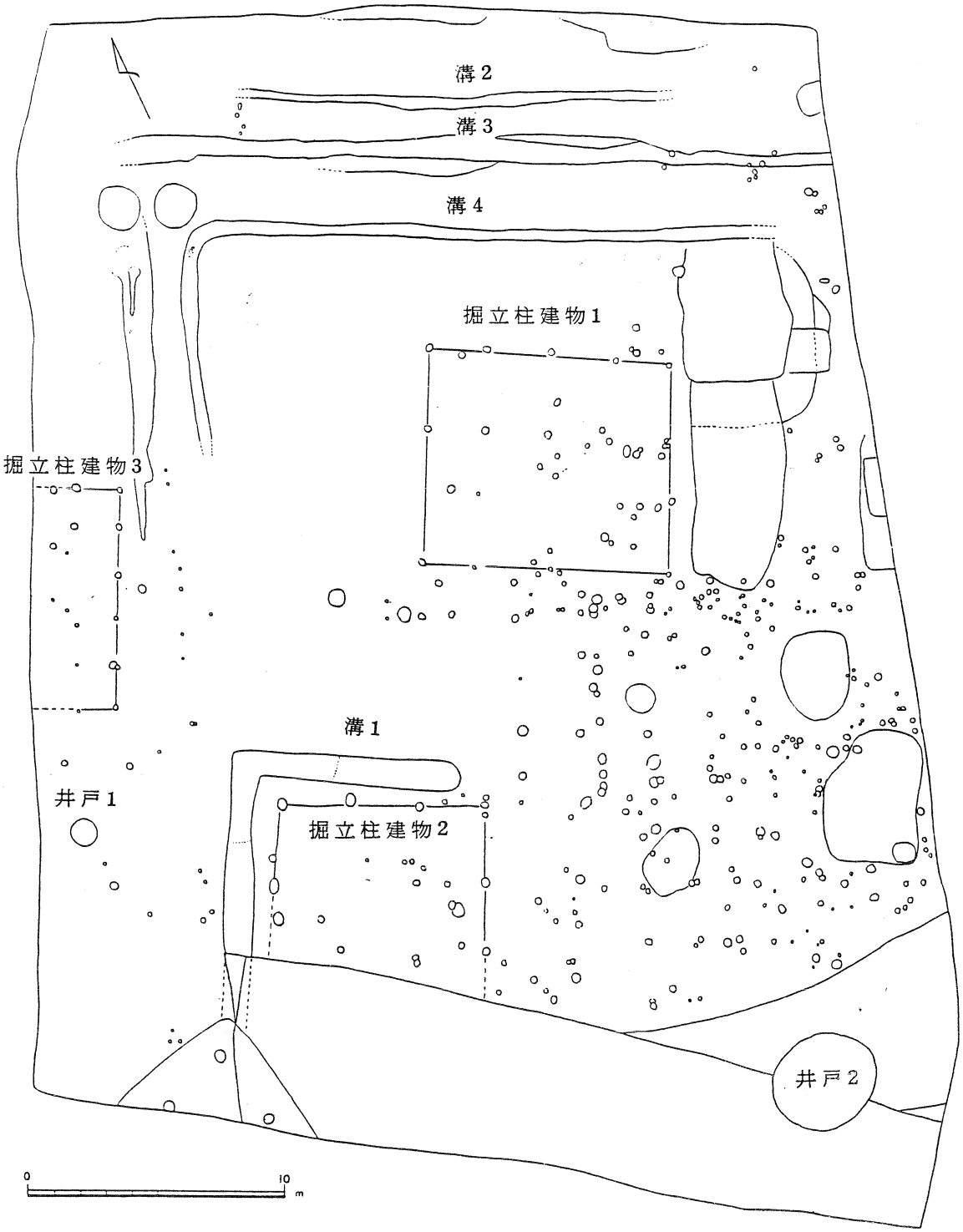
L字形の溝に囲まれた東西3間（7.9 m）南北2間（5.6 m）の総柱建物である。柱穴の一つから漆器椀が出土しました。

掘立柱建物 3

調査区の西端にあり，調査地外に延びているため全形は不明ですが南北5間（8.6 m）の建物です。

溝　1

建物2を囲むL字形の溝です。巾1.2 m，深さ約60 cm，曲折部からは10 cm内外の河原石が多量に検出されました。溝底からは土師器堝，須恵器鉢，曲物，漆器椀等の破片や木片が出土しています。



遺　構　配　置　図

溝2，3，4

調査区の北側を溝2，溝3，溝4が東西に平行して検出されました．3本とも幅約50cmで深さ約10cmの浅いものです．溝の周囲には，直径5cm程度の杭が多数発見されています．

井戸1

直径100cm，深さ50cm程の掘方を掘って底に直径35cm，深さ30cmの曲物を据えつけた小型の井戸です．井戸の内からは，須恵器甕，捏鉢，漆器椀の破片や，木片のほか，貝殻，もみ殻等が出土しました．

井戸2

直径3.5m，深さ1.6mの掘方を掘り，径90cmに板材を立てて井戸枠とした井戸です．

井戸枠に使用された板材の大部分は使用後に取りさり，再利用されたと考えられ，現在はその一部だけしか残っていませんでした．

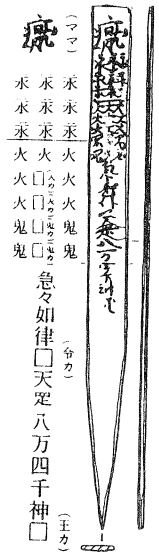
この井戸内からは呪いに使われたと思われる木札が2枚出土したほか，木箱，材木，須恵器片等が出土しました．

B　出土遺物

出土した遺物のうち，土器は比較的少量です．器種としては，須恵器甕，捏鉢，土師器堝，皿等です．

土器類に比して，木製品は多く，箱等の他，建築材や杭等が井戸内から出土しました．また，柱穴の中には，柱痕が多く残っていました．

この他，漆器の椀も出土しています．



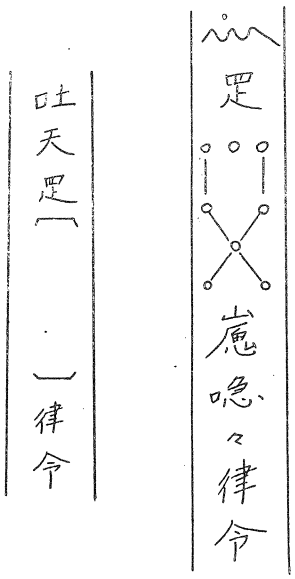
尾道遺跡出土例

5　まとめ

現在までの調査で発見された遺構，遺物は，鎌倉時代後半（１３世紀中頃～１４世紀初め頃）のものです．また，数多くの柱穴や井戸が発見されたことによって，今回の調査地が当時の集落の中心であったことが確認されました．

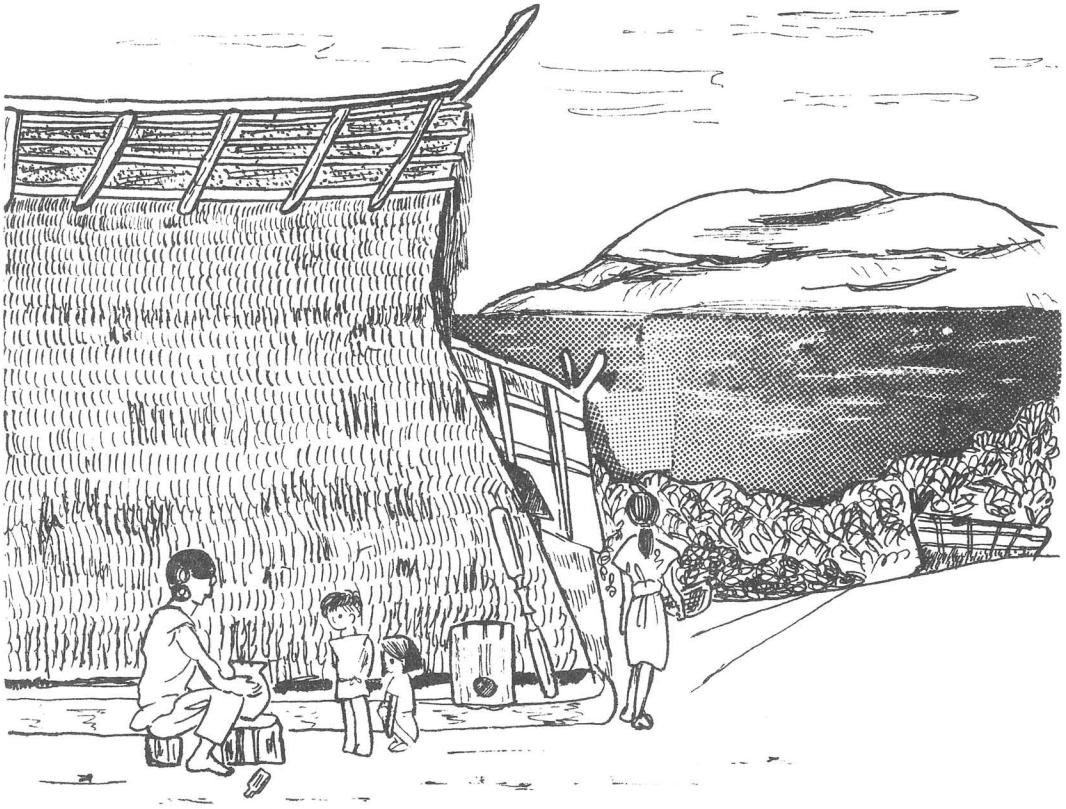
そして，低湿地に位置しているため木製品の遺存が良く，呪いに使用された木札には墨書が残っていました．

今後さらに下に残る古墳時代や弥生時代の調査を実施しますので，新しい発見が期待されます．



木札に書かれた文字

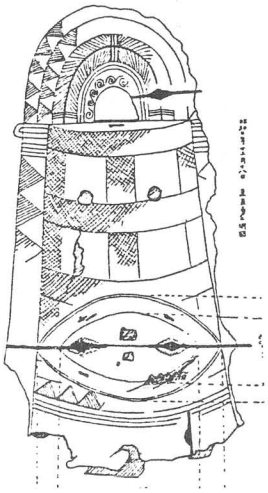
舞子東石ケ谷遺跡現地説明会資料



昭和59年8月11日

神戸市教育委員会

1　はじめに



投上銅鐸

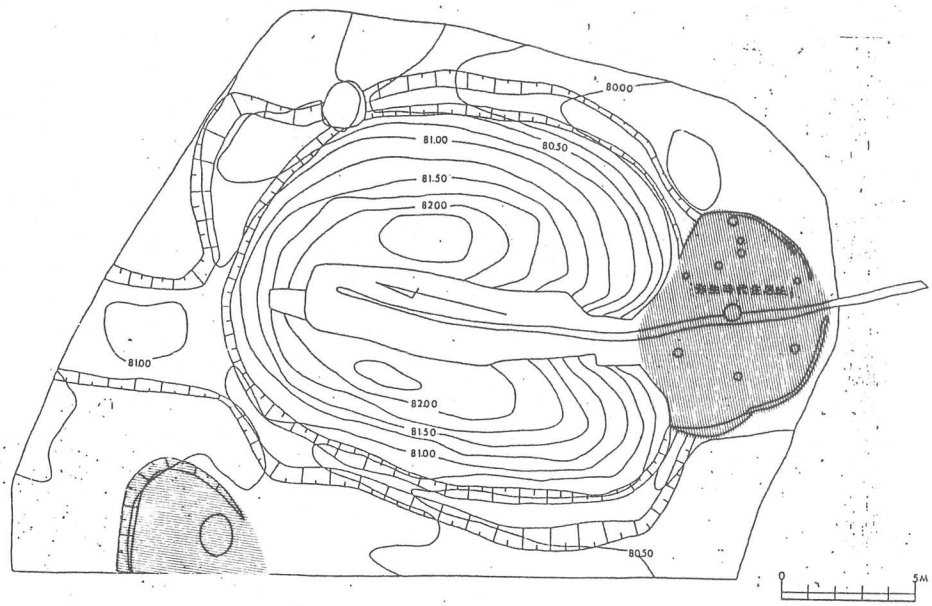
舞子東石ヶ谷遺跡は，景勝地「舞子の浜」から1.5㎞北方の尾根上（標高８２ｍ）に存在する遺跡です．この東石ヶ谷遺跡のある尾根からは，明石海峡と淡路島を眼下に望むことができ，非常に景色のよいところです．この尾根は舞子丘陵の中では比較的高く，しかも尾根頂部が比較的平坦で，遺跡の立地には適しています．

1　東　石　ケ　谷　遺　跡
2　大　歳　山　遺　跡
3　投　上　銅　た　く　出　土　地

2　調査に至る経過

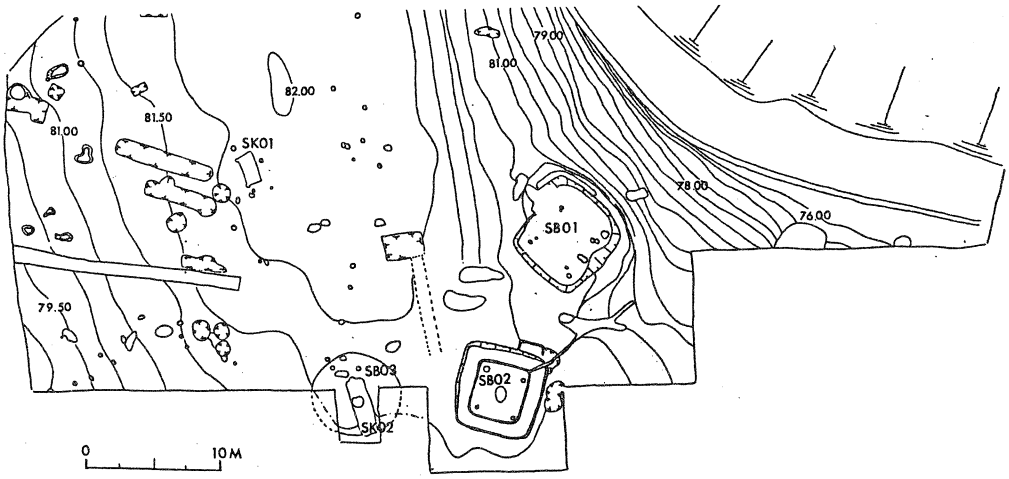
東石ヶ谷遺跡のある尾根上には，古墳時代後期の東石ヶ谷１号，２号の古墳が存在しています．昭和５７年に実施した東石ヶ谷１号墳の調査の際，古墳の下から弥生時代後期の住居址が発見されました．これまで舞子丘陵上からは，石鏃や弥生土器片が採集されていましたが，遺構が検出されたのは，このときが初めてです．

今回の調査は，尾根の北半部について弥生時代の遺構の有無に焦点をあてて実施しました．調査面積は2,３６０m^2です．



昭和57年度調査　弥生時代後期住居址

3　調査概要　　今回の調査で発見された遺構は，竪穴住居址3棟，短辺に突出部のある炭の入った長方形土坑2基，土坑，ピットですが，ここでは主要な遺構について説明します．



(1)　竪穴住居址（ＳＢ０１～０３）

尾根の中央よりも東側でＳＢ０１からＳＢ０３の3棟の住居址が発見されました．いずれも弥生時代後期のものです．

ＳＢ０１

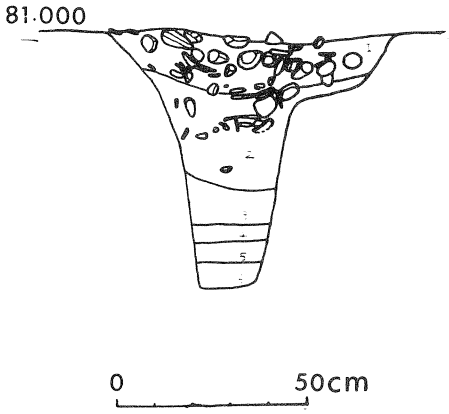
東西6.4ｍ南北6.8ｍの方形の住居址です．4本柱の建物ですが拡張して建て替えが行われています．柱間寸法は建て替え前が東西3.1ｍ南北2.8ｍ，建て替え後が東西3.7ｍ南北3.2ｍです．この住居址は斜面地につくられているため，南側と西側は地面を掘りこみ，谷側に面した東側と北

側の壁は盛土して築いています．住居の北西には入口と思われる突出部が検出されました．

住居址の東側柱通りの中央に壷を据えたピットがありました．住居址の床面からの出土遺物は殆んどありませんでした．

ただし，住居の東壁の外側斜面からは弥生土器片が多数出土しています．

ＳＢ０２



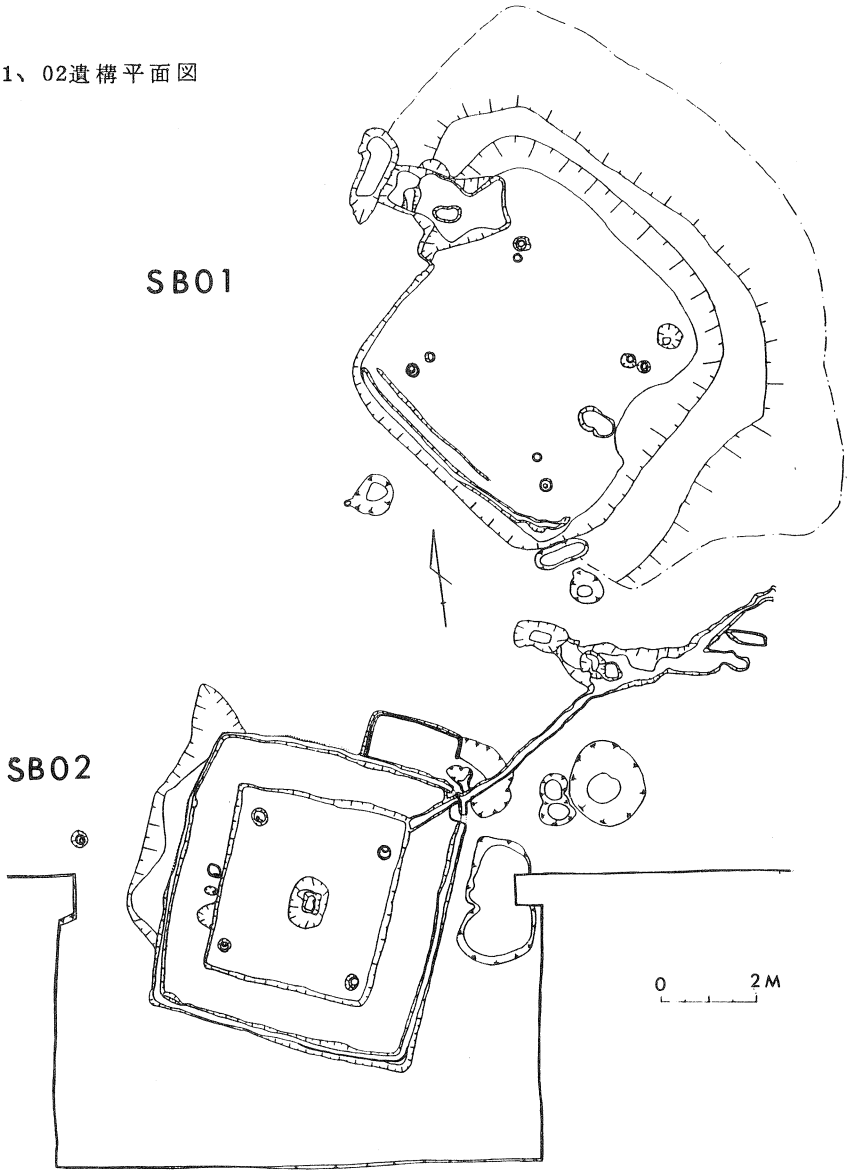
SB02中央土坑断面図

ＳＢ０１より南６ｍのところに位置する東西5.9ｍ南北6.2ｍの方形の住居址です．北壁の東に偏った位置に入口と思われる東西２ｍ南北１ｍの方形の張り出しがあります．この住居址内には周囲に溝がめぐらされており，この溝は住居の北西隅で住居外へのびる排水溝にとりついています．溝幅１５cm，深さ１５cmです．溝の内側にベッド状遺構と呼ばれる幅９０cm，高さ２０cmの床より一段高くなった部分があり，その内側に４本の柱と中央土坑があります．

柱間は東西，南北とも2.8ｍ，中央土坑の大きさは長径1.1ｍ，短径８０cm，深さ８０cmです．中央土坑には炭や灰とともに，土器や礫も多数入っていました．

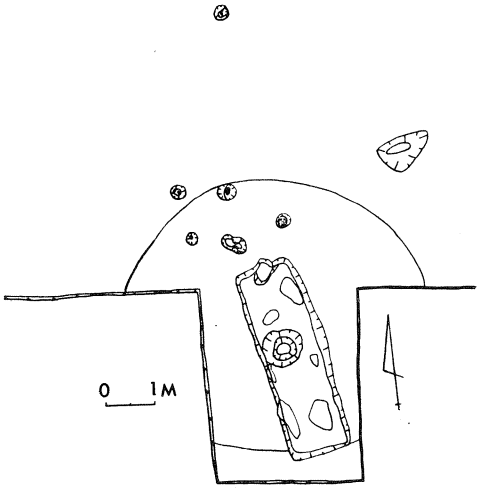
住居址床面付近からは多数の弥生土器片が礫とともに出土しています.

SB01、02遺構平面図



ＳＢ０３

ＳＢ０２から西へ５ｍ距だったところにある直径６ｍの円形の住居址です．この住居址は保存されることになったため，範囲確認を行ったのみで完掘はしていません．ただし，ＳＫ０２に切られたところでＳＢ０３の中央土坑が発見されています．中央土坑は直径９０cm，短径７０cm，深さ５０cmで灰が堆積しており，中から弥生土器が出土しました．柱数は不明です．



SB03、遺構平面図

(2) 短辺に突出部のある炭の入った土坑（ＳＫ０１ ＳＫ０２）

ＳＫ０１

尾根の中央部で検出された長さ2.3ｍ，幅1.1ｍ，深さ3cmの土坑です．短辺の一方に突出部があり，中に炭が詰まっており床は焼けています．炭に混じって弥生土器片が出土しました．

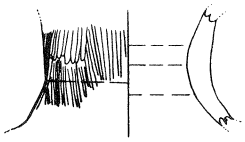
ＳＫ０２

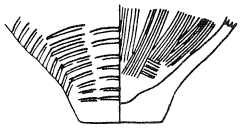
長さ4.1ｍ，幅1.3ｍ，深さ２０cmでＳＫ０１同様，床は焼け，炭が詰まっていました．

炭の中から弥生土器片が出土しています．

4　出土遺物

今回の調査では，弥生土器と若干の石製品が出土しています．





包含層出土

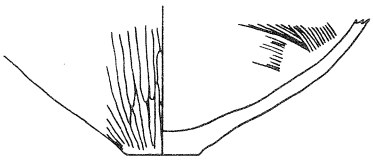
弥生土器は，弥生時代後期のもので，壷，甕，高坏，器台，甑，鉢などの器種がみられます．

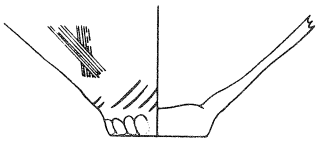
特にＳＢ０２からは，住居内に投棄されたと思われる土器片が多数出土しています．土器片は，1.甕 2.壷　3.高坏の順で多く出土しました．

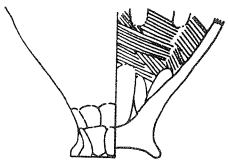
また，ＳＢ０３中央土坑より完形の壷形土器１点と壷の破片数点が出土しています．

一方，石製品は，ＳＢ０１の埋土中から打製石１点，砥石１点，打製石庖丁（？）１点が出土し，ＳＢ０１東側斜面土器溜りより打製石鏃３点，ＳＢ０１表土より叩き石１点が出土しています．

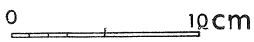
砥石の存在から鉄の使用は明らかですが，今回の調査では，鉄製品は出土していません．



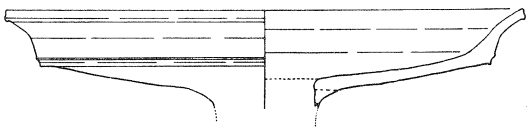


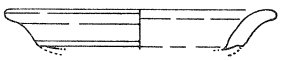


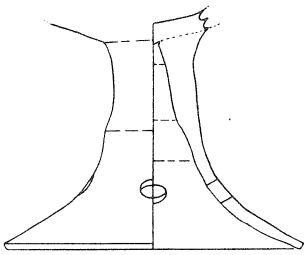
a

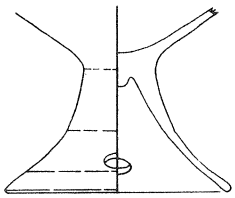


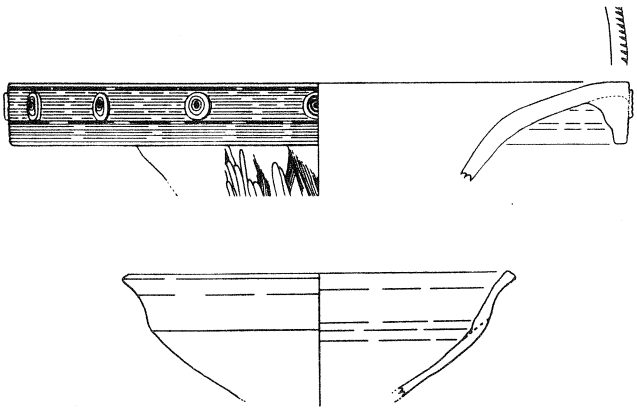
SB01出土遺物実測図



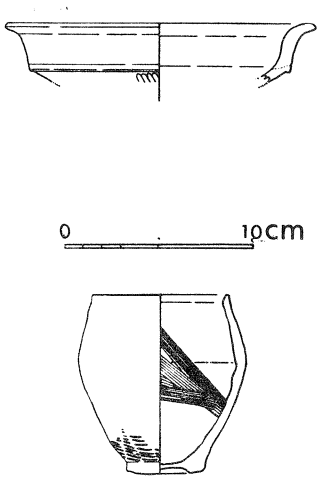




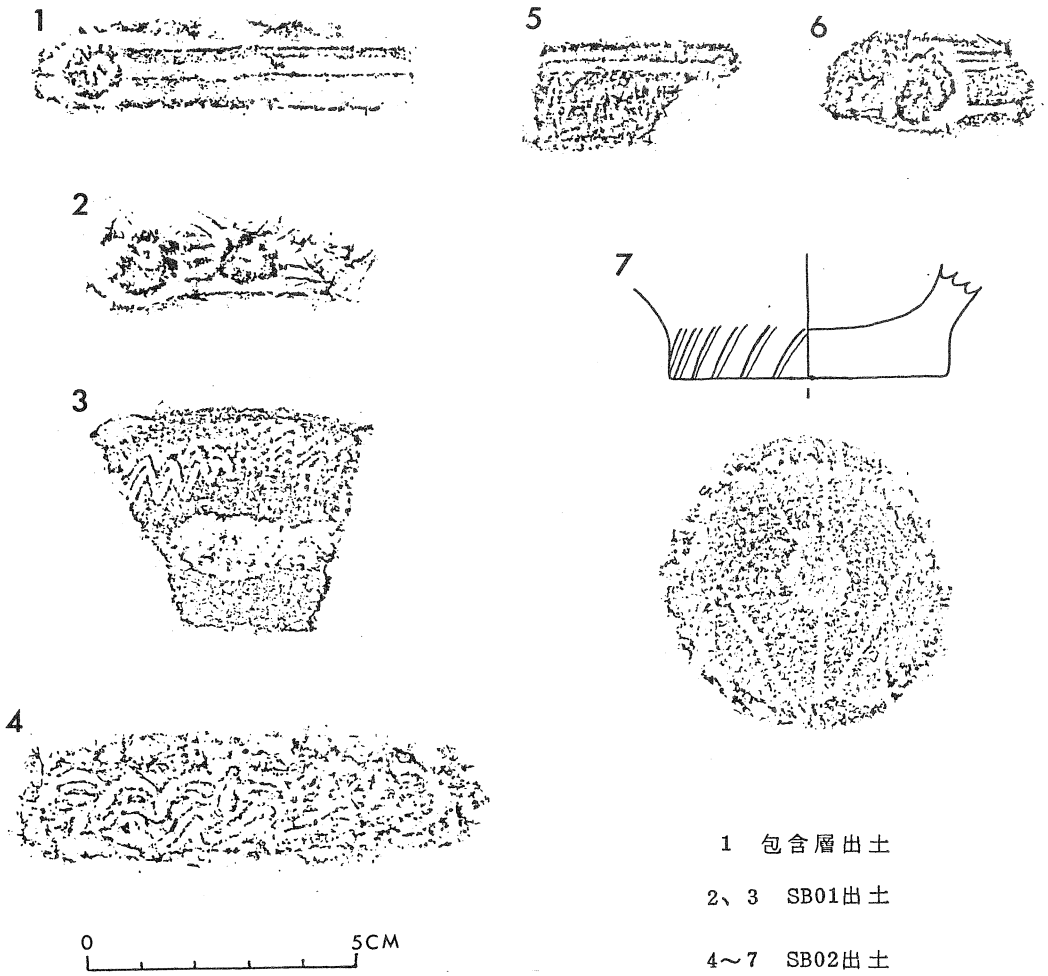




SB02出土遺物実測図



SB03出土遺物実測図



1　包含層出土

2、3　SB01出土

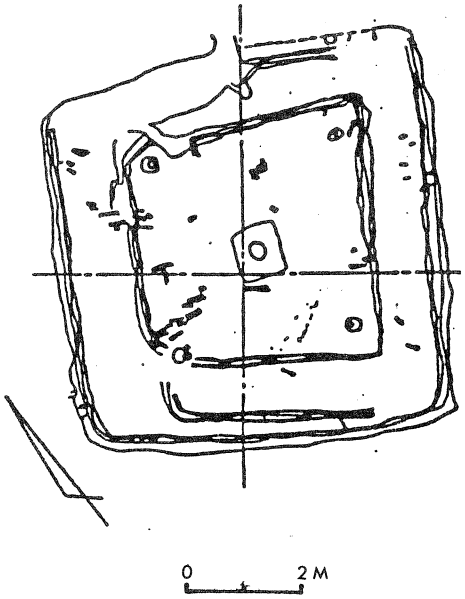
4～7　SB02出土

5　まとめ

東石ケ谷遺跡の位置する尾根は，南北９０ｍ，東西７０ｍ程の大きさですが，今回発見された３棟と昭和５７年度調査の２棟を加え，これまでに５棟の弥生時代後期の住居址が発見されています．未調査部分を考慮すると，この尾根上に存在する住居址の数はさらに増えるものと思われます．

尾根の南側には円形住居址，北側には方形住居址が存在するという傾向がみられます．

特にＳＢ０２は，大歳山遺跡で発見された住居址（復元家屋）と規模やベッドを有する点で形が極めてよく似ています．



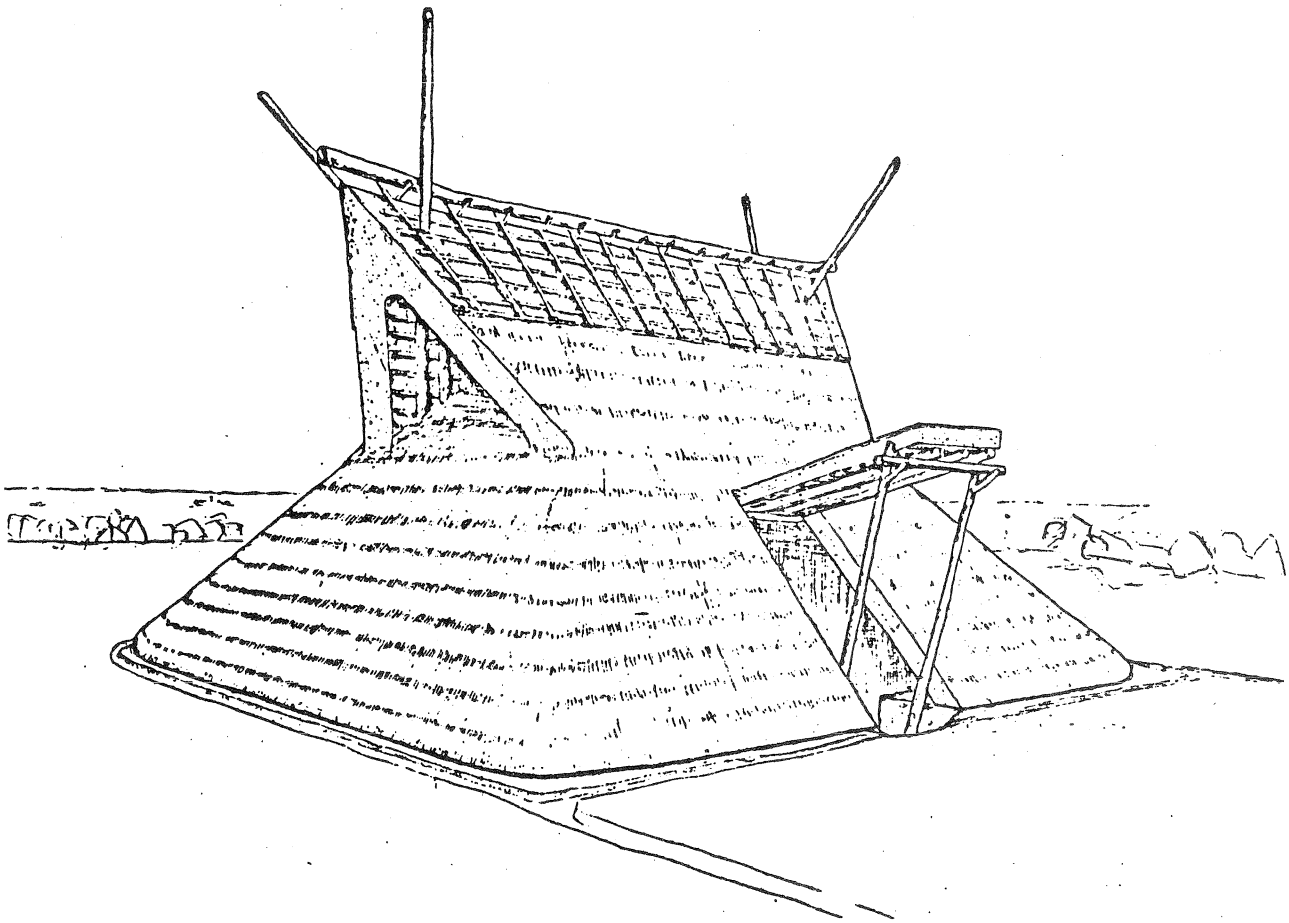
大歳山遺跡弥生住居平面図

この東石ケ谷遺跡の集落を考えるうえで，同じ山田川流域に位置する同時期の大歳山遺跡の集落は重要です．

東石ケ谷遺跡の東３００ｍに位置する舞子古墳群舞子台支群が存在する丘陵上からも弥生時代後期の土器が採集されており，弥生後期の集落が存在するものと思われます．

このように山田川東岸の舞子丘陵上には，弥生時代後期になって新たに集落が形成されますが，石谷との比高が６０ｍもある丘陵上に集落を構えるに至った理由については，今のところよくわかっていま

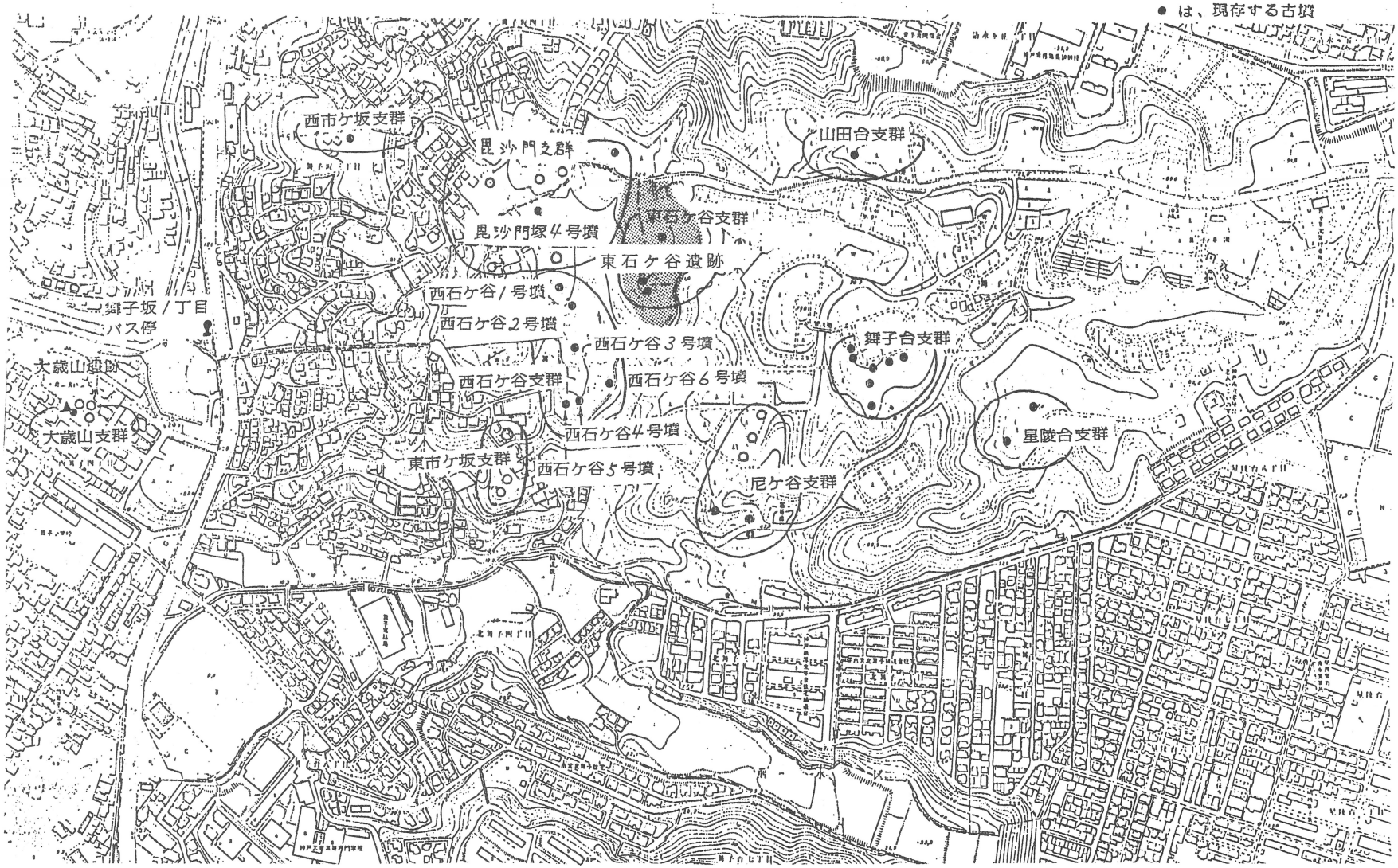
せん．ただし，その理由を山田川流域の弥生遺跡相互の関係に求めるのではなく，広く明石平野の弥生遺跡との関係の中で考察する必要があるものと思われます．



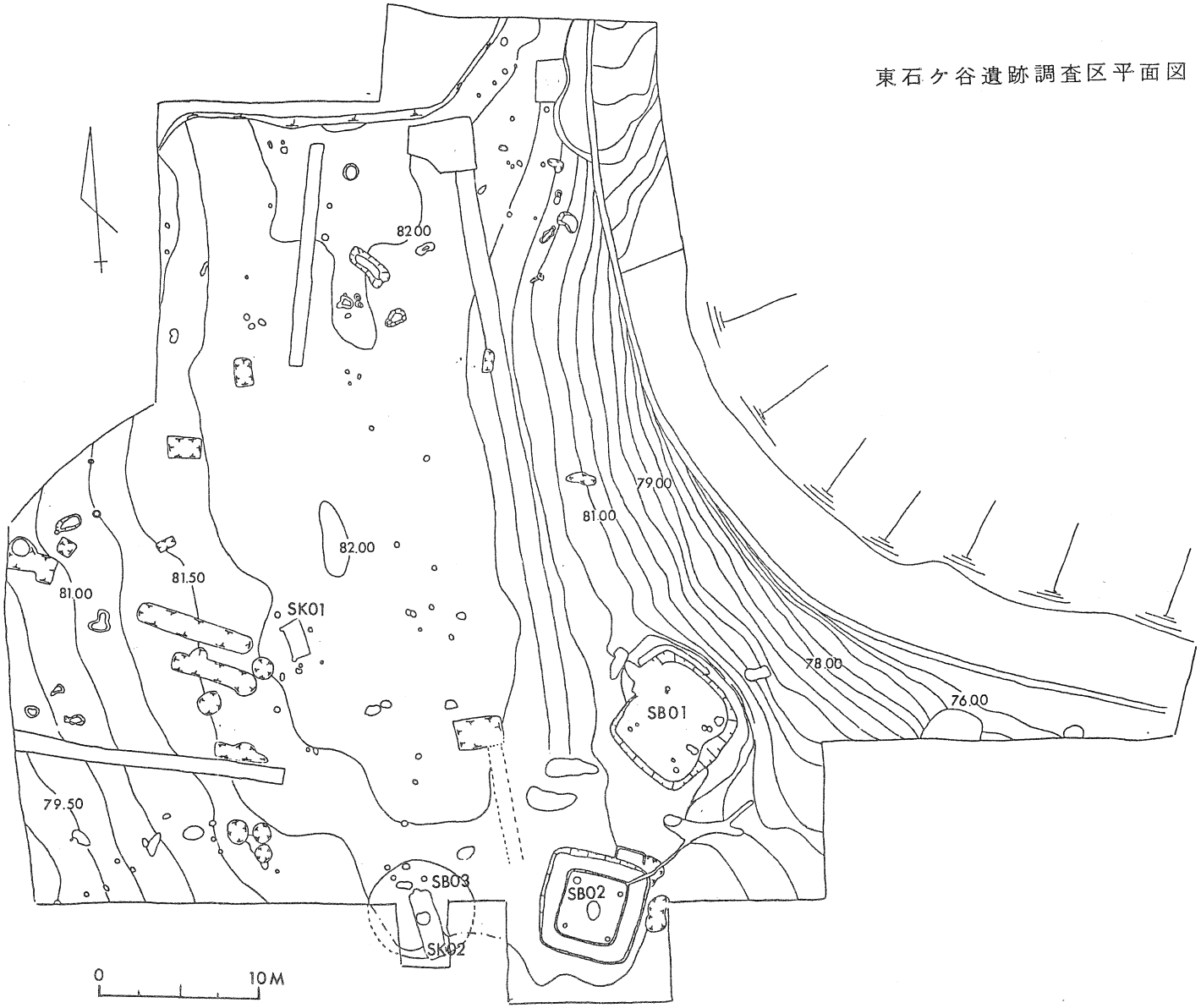
大歳山遺跡復元住居

舞子古墳群と東石ケ谷遺跡

○は、すでに消滅した古墳
●は、現存する古墳



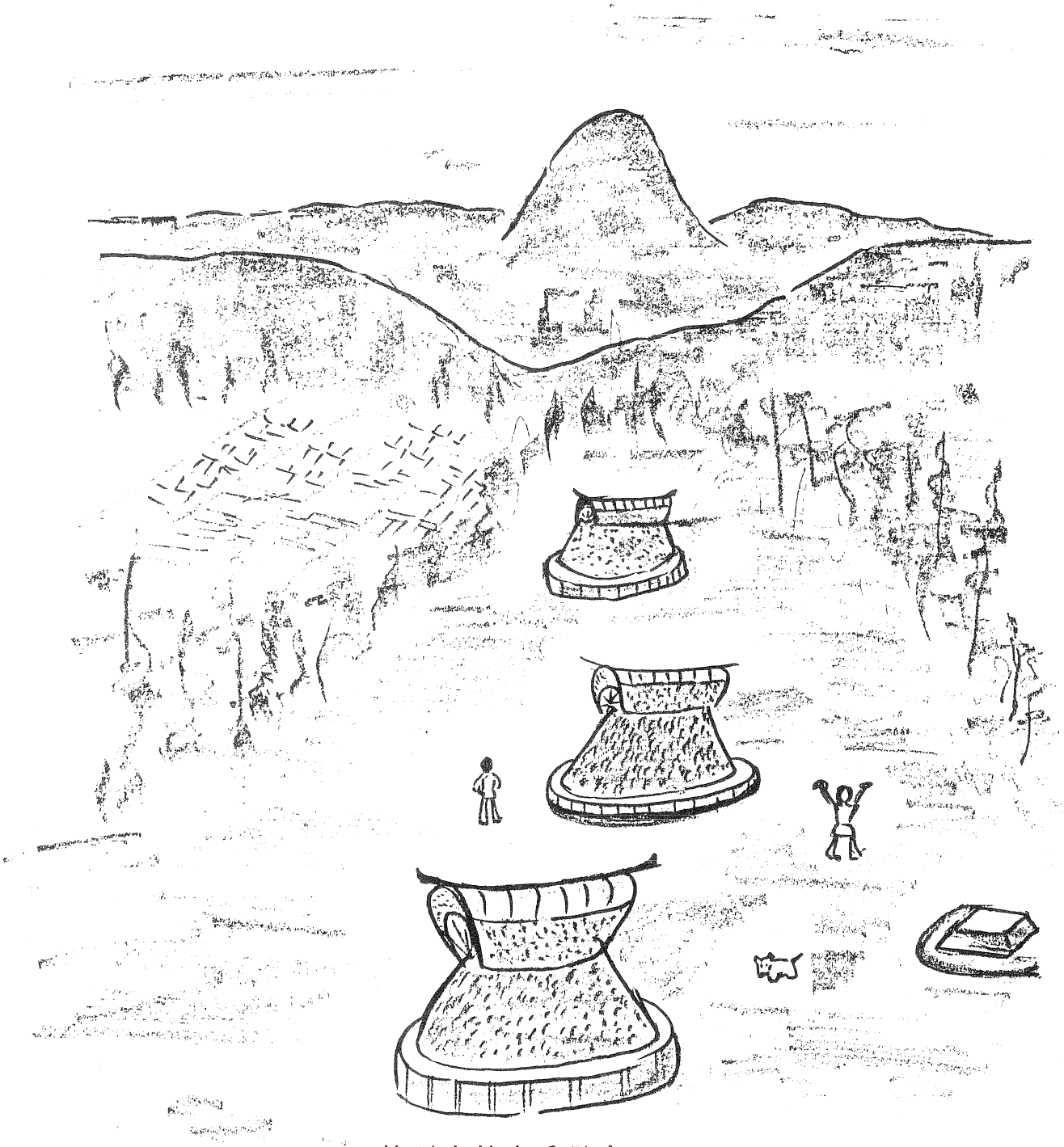
東石ケ谷遺跡調査区平面図



北神第4地点遺跡

現地説明会資料

1984.10.28

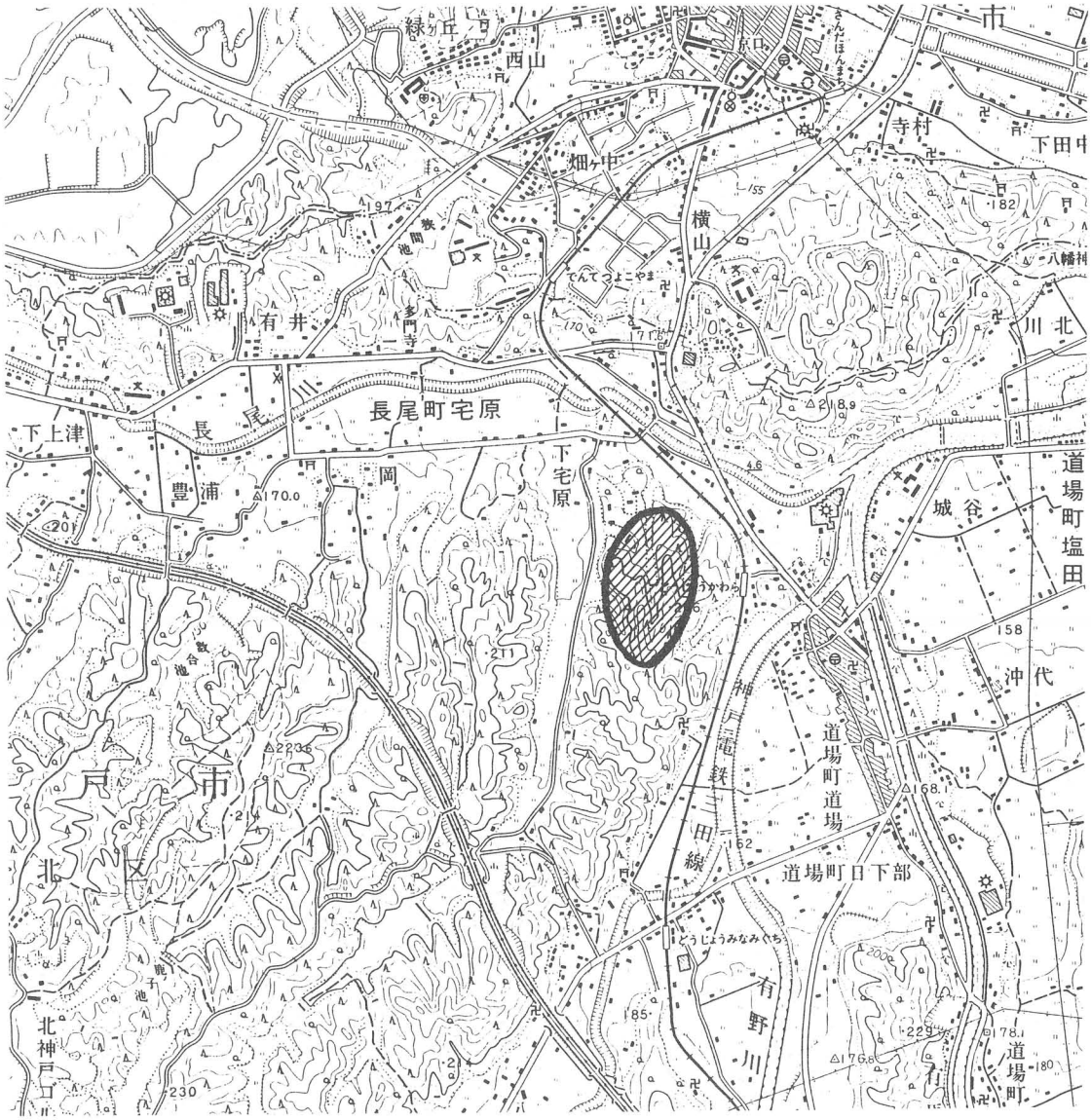


神戸市教育委員会
神戸市健康教育公社

今回の調査にあたっては、住宅・都市整備公団、
神戸市土木局北神開発事務所のお世話になりました。
また、神戸市文化財専門委員の野地脩左、小林行雄、
檀上重光の諸先生方には御指導をいただきました。

1　はじめに

北神三団地の区域内では，昭和５４年１２月から引き続いて発掘調査を行っています．これまでに，古墳時代後期の竪穴式石室（第２０地点）・横穴式石室（第１３地点）や室町時代の火葬址（第４６・４７地点）などの多くの遺跡が明らかになってきました．

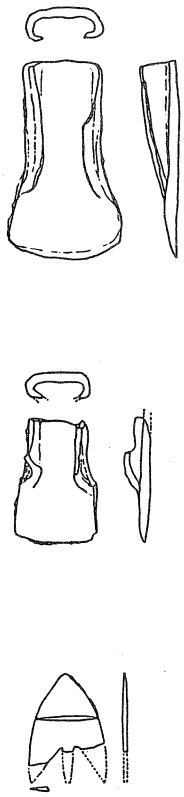


また，長尾町，道場町一帯では近年土地改良事業に伴って行われている発掘調査によって数多くの遺跡が発見されています．特に，昨年度調査を行った長尾町宅原の下宅原遺跡では，弥生時代後期～鎌倉時代の集落址が発見され，大きな成果をあげることができました．

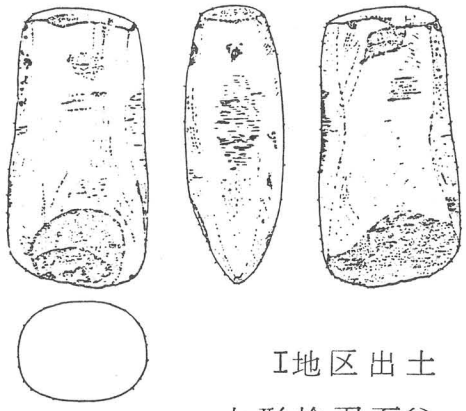
2　調査の経過

北神第4地点遺跡は，昨年度北神戸第1地区の造成工事に先立って試掘調査を行いました．その結果，南から北へ延びる2つの尾根上にまたがって，約2.5 *ha*の区域に弥生時代中期～後期の大集落址の存在が確認されました．この調査対象区域のうち，西側に延びる尾根をⅠ地区，東側に延びる尾根をⅡ地区と呼んでいます。

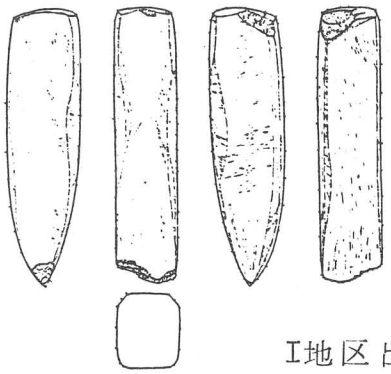
さて，今年度は造成工事で削り取られるⅠ地区の一部分をまず調査しました．続いて，今後工事が予定されているⅡ地区の尾根先端区域と試掘調査で奈良時代の遺物が出土した区域について発掘調査を行いました．



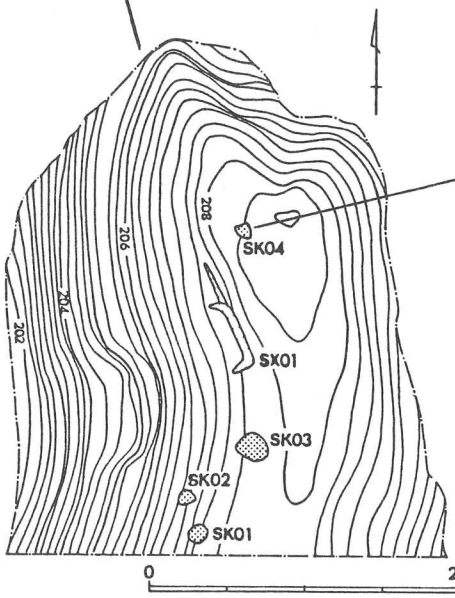
Ⅱ地区出土
鉄斧・鉄鏃
S＝1：4



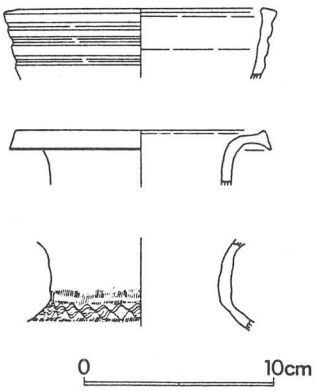
I地区出土
S＝1：4　太形蛤刃石斧



I地区出土
S＝1：4　方柱状片刃石斧



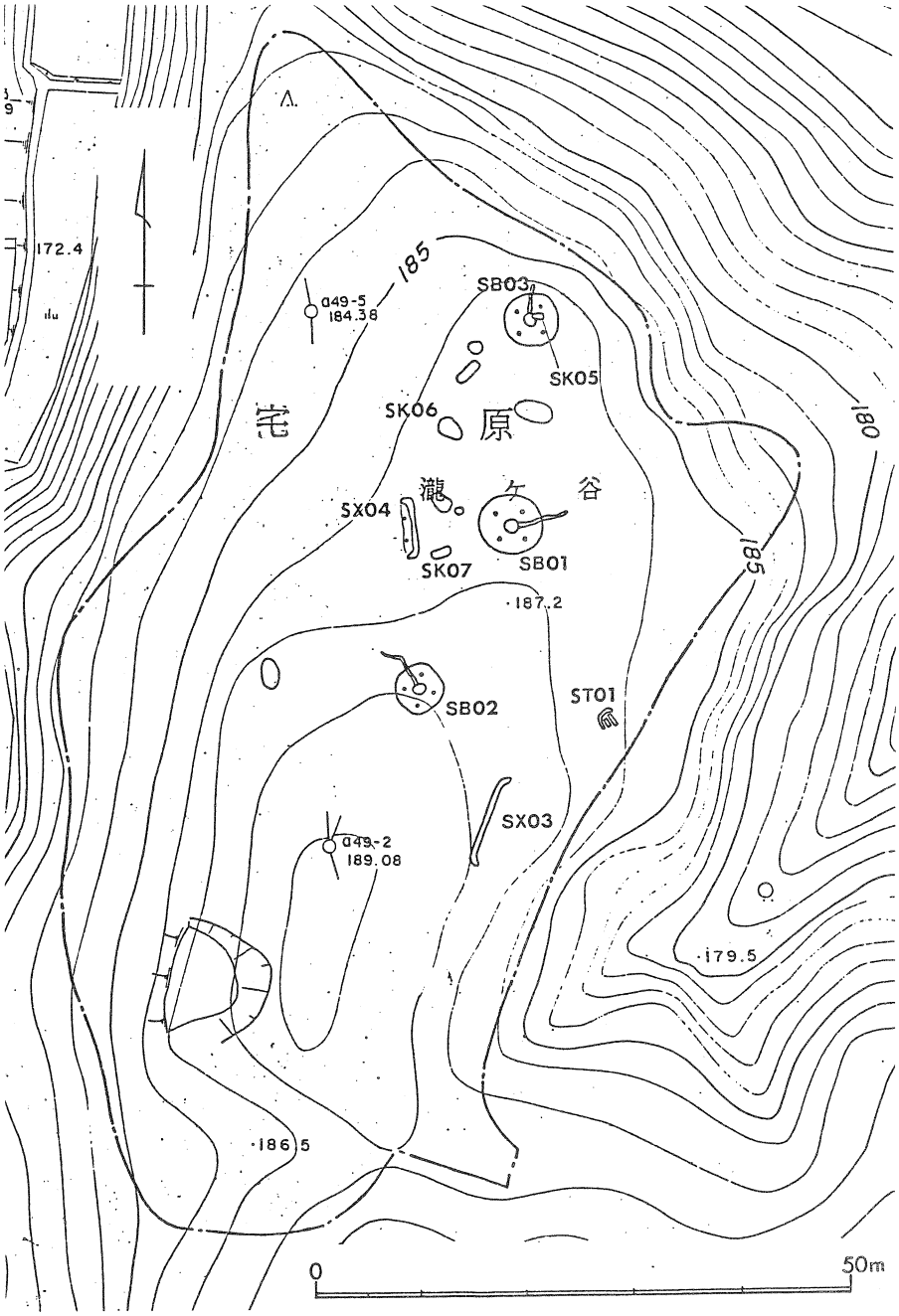
I地区遺構配置図



SK04出土弥生土器

3　調査の概要

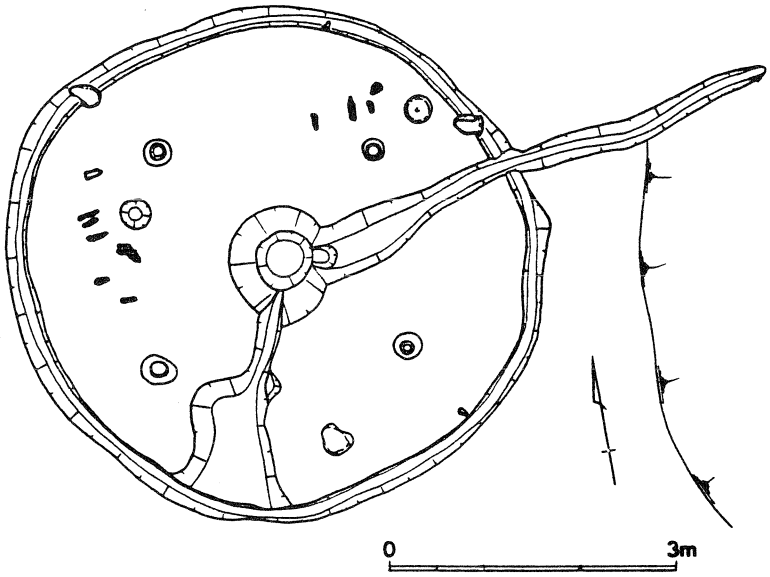
今回の説明会会場であるⅡ地区では，竪穴住居址3棟，箱式石棺2基，溝状遺構2条，土壙9基が発見されました。その他，Ⅰ地区では，溝状遺構1条，土壙4基，蔵骨器1基が発見されました。



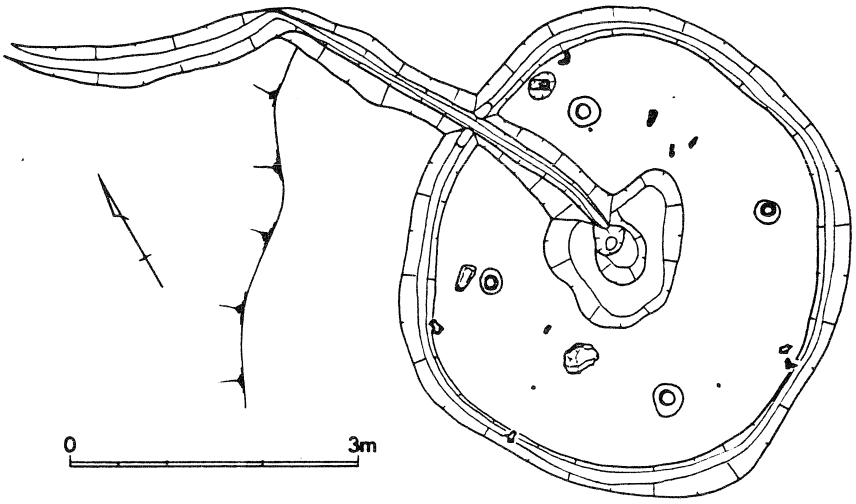
Ⅱ地区遺構配置図

(1) 竪穴住居址
（SB01～SB03）

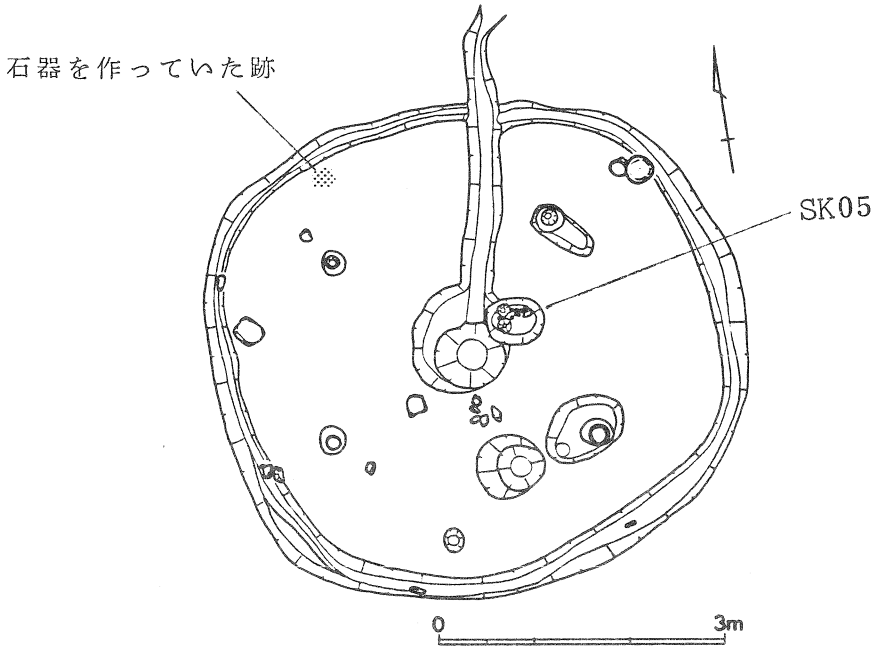
尾根の頂上部にほぼ等間隔に並んでいます．いずれも弥生時代中期末～後期初め（AD 2世紀ごろ、約1800年前）のものです．



SB01平面図



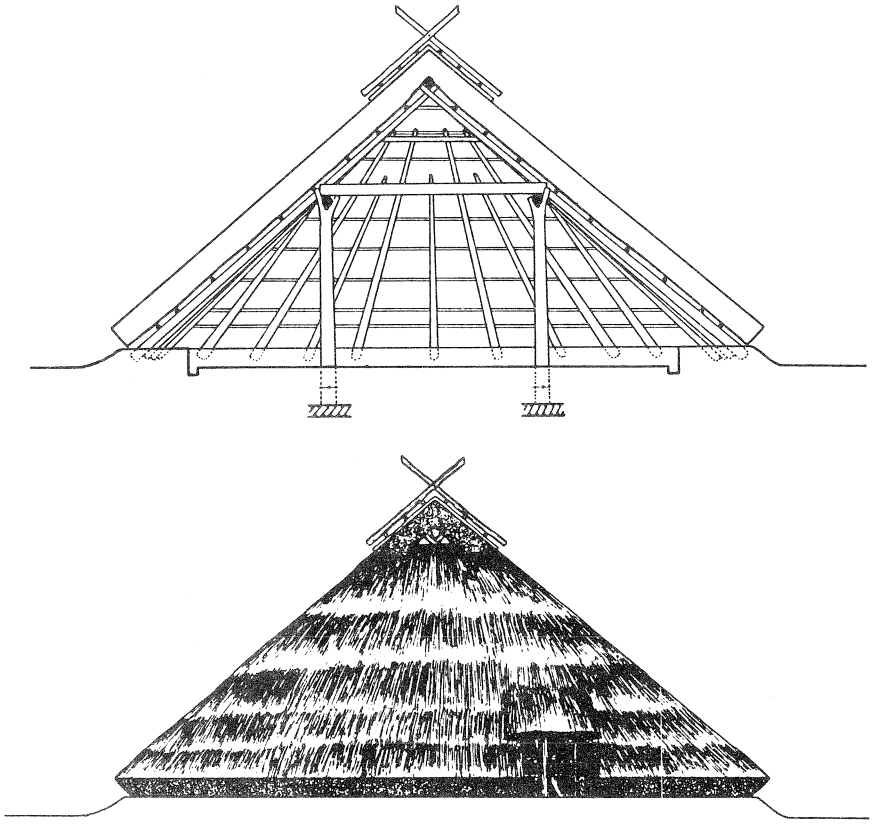
SB02平面図



SB03平面図

	平面形態	直径 (m)	柱数	中央土壙	周壁溝	排水溝	磨り石	床面積 (㎡)
SB01	円形	4.9～5.3	4	○	○	○	○	20.12 (約12畳)
SB02	円形	4.0～4.5	4	○	○	○	○	14.17 (約 8.5畳)
SB03	円形	4.7～5.2	4	○	○	○	○	18.83 (約11.5畳)

平面形態，柱数やその他の施設については3棟ともよく似ていますが，SB02，SB03，SB01の順に大きくなっています．この中でも注目されるのは，SB03で，石器を作っていた跡が検出されたこととガラス玉3個が発見されたことです．



田能遺跡復原住居立面図

(2) 箱式石棺
（ＳＴ０１）

南北に平行する２基の石で組まれた棺を埋葬施設とする墓で、盛土と周溝があります．盛土は最も高い所で約５０cmあり，周溝は斜面の高い方を中心に地山を掘り込んで作られています．幅は約７０～１００cm，深さは約２０cmです．石棺の蓋は，すでに内側に落ち込んだ状態で検出されました．２基の箱式石棺のうち，大きい方を１，小さい方を２と呼んでいます。

箱式石棺1　長さ１６５cm以上，最大幅

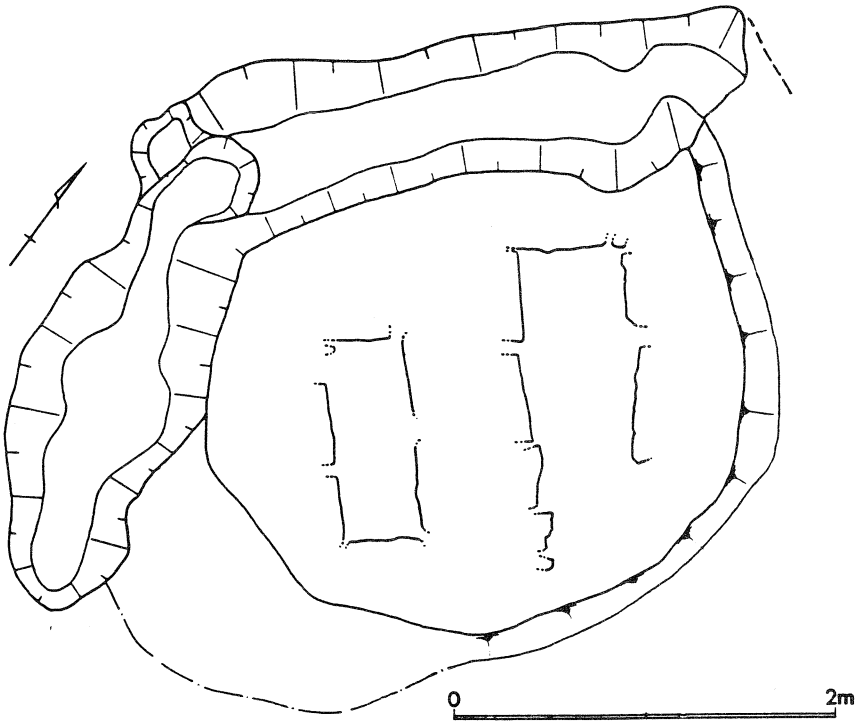
６４cm，高さ３７cm

箱式石棺2　長さ１０５cm，最大幅４３cm，

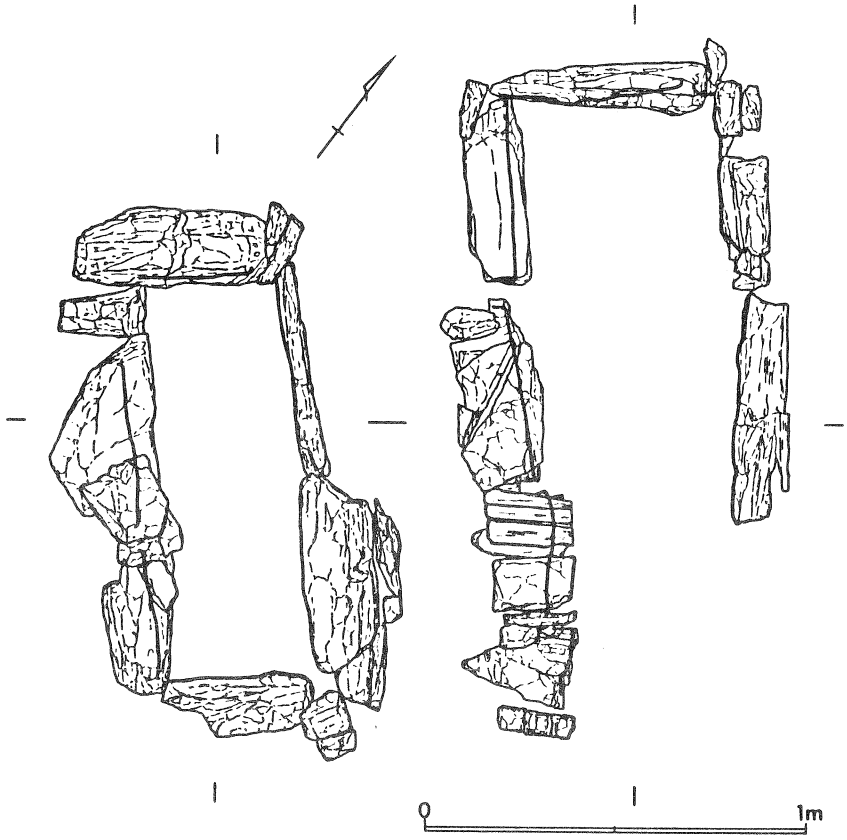
高さ３７cm

１，２の両方とも東長側壁には扁平な石材を建てて使い，西長側壁には石材の平らな面を内側に向けて使っているのが特徴です．

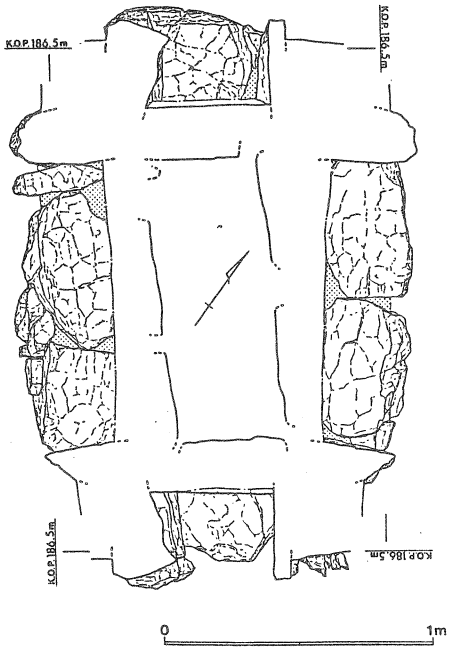
周溝の中から少量の弥生土器片が出土したため，弥生時代に造られた墓だと考えられます．



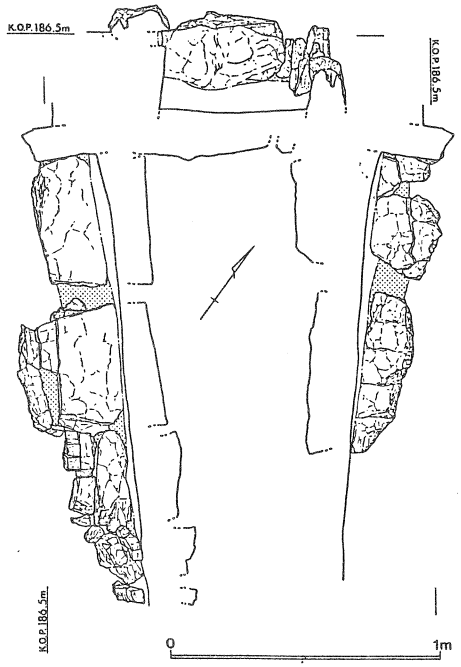
ST01平面図



箱式石棺1・2平面図



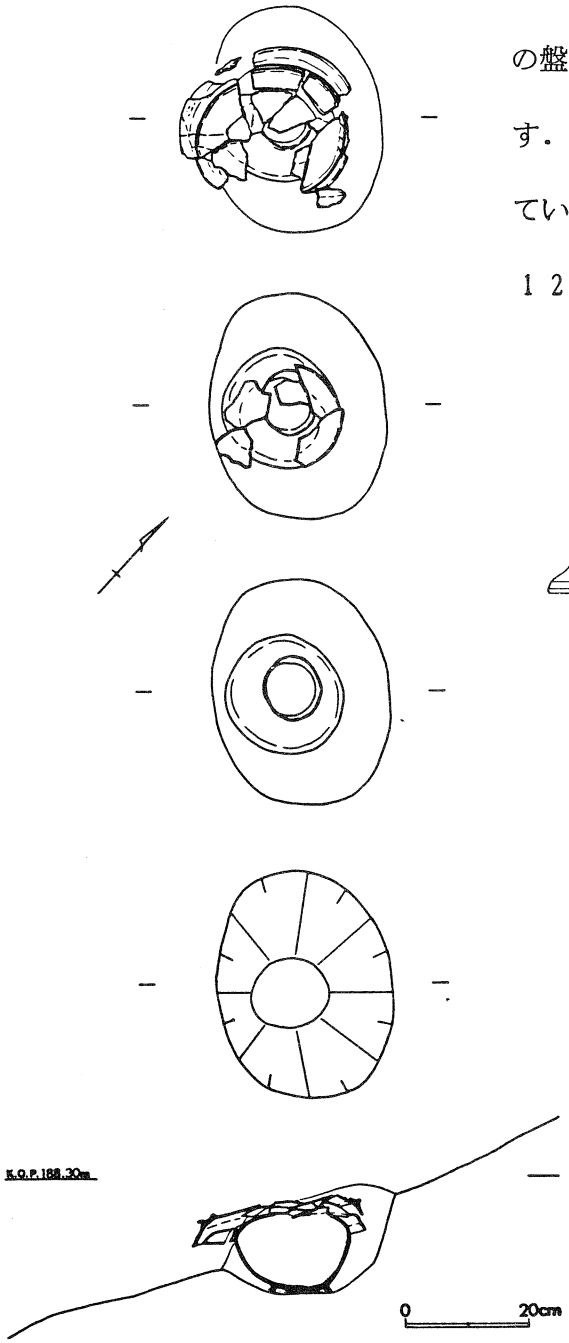
箱式石棺2立面図



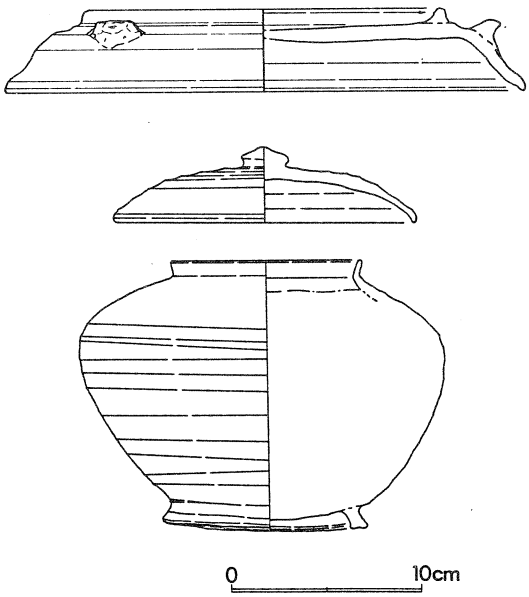
箱式石棺1立面図

(3) 蔵骨器
（ＳＴ０２）

急な斜面地に直径３６cmの土壙を掘り，須恵器の短頸壷を置き，須恵器の坏蓋で蓋をしています．さらに，この上から土師器の盤をさかさにして，二重に蓋をしています．壷の中には骨粉と土がぎっしり詰まっています．奈良時代前半（８世紀前半，約１２５０年前）のものです．

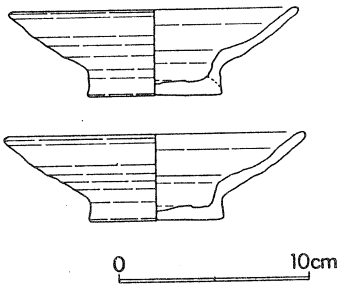


蔵骨器出土状況



蔵骨器

(4) 土壙5
（ＳＫ０５）



SK05出土土師器

ＳＢ０３が廃絶した後に作られた土壙です．直径５０～６０cmの楕円形の穴を掘り，土師器の皿２枚と炭化した木の実多数と一緒に多量の炭を納めています．遺構の性格については不明です．平安時代後半（１２世紀ごろ，約９００年前）のものであると考えられます．

4　出土遺物

弥生時代　各住居址の床面から弥生土器とともにさまざまな遺物が検出されています．また，包含層からも弥生土器・石器が出土しています．

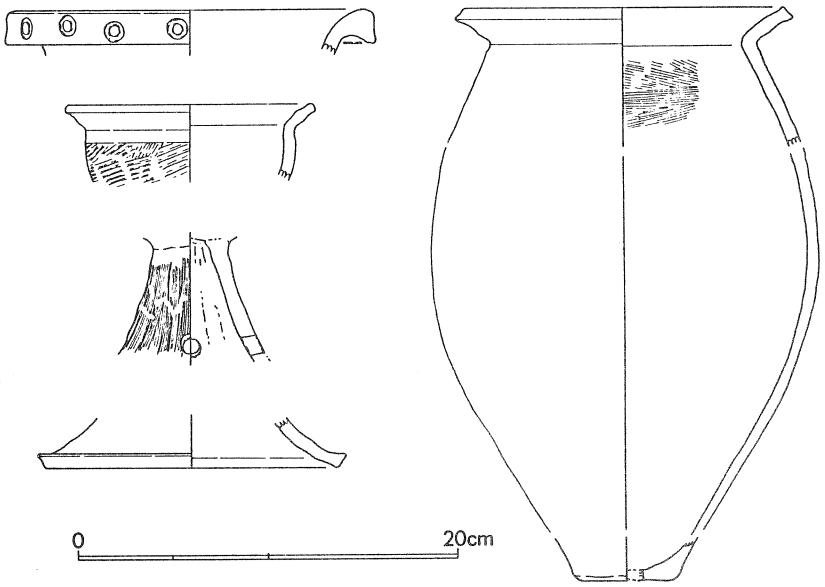
ＳＢ０１　弥生土器（壷・甕・高坏），石庖丁未製品，砥石，打製石鏃

ＳＢ０２　弥生土器（壷・甕），砥石？，打製石鏃

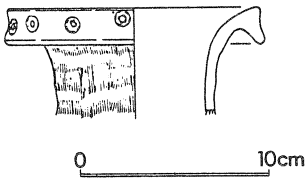
ＳＢ０３　弥生土器（壷・甕・高坏），ガラス玉，砥石，打製石鏃

出土遺物の中でも，弥生土器はこの地域の土器の実態がわかった点で有意義なものです．また，ＳＢ０３の砥石は，仕上げ砥といわれるもので，確実に鉄製品が使用さ

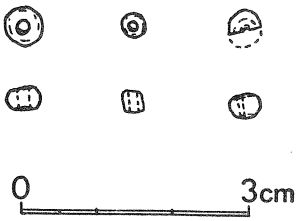
れていたことがわかります。それにもかかわらず，石器を製作していることは今後の研究課題のひとつとしてあげられます。



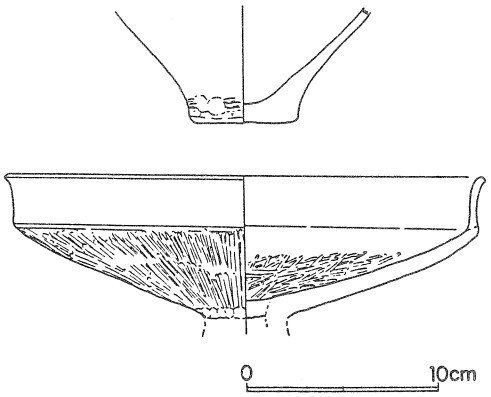
SB01出土弥生土器



SB02出土弥生土器



SB03出土ガラス玉



SB03出土弥生土器

奈良時代

ＳＴ０２　須恵器（台付短頸壷・坏蓋），

土師器（盤）

平安時代

ＳＫ０５　土師器（皿），木の実（柿？）

5　まとめ

北神第４地点遺跡のうち，今回調査した区域についてわかった主なことは，

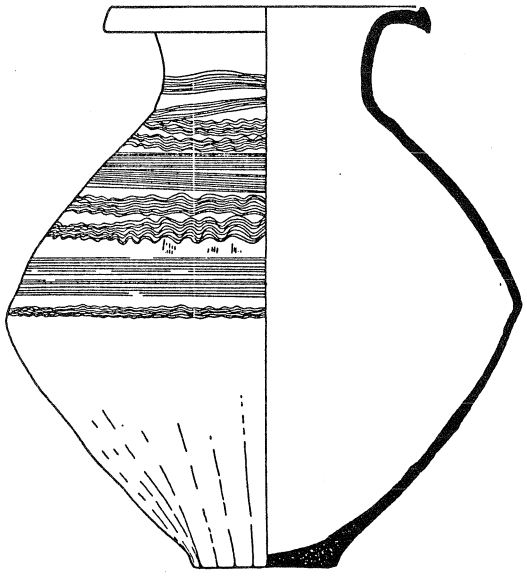
1　弥生時代中期末～後期初めの集落での生活の姿をひとつのまとまりとして明らかにできました。竪穴住居址は，摂津地方のこの時期では一般的なものとして知られていますが，石器製作址やガラス玉を持つ点などは注目されます。

2　箱式石棺は，神戸市内では延命寺古墳（西区伊川谷町），処女塚古墳（東灘区御影塚町）のくびれ部で検出されたのに続いて，３例目の発見となりました。播磨地方や但馬地方ではよく見られる箱式石棺が，この地域でも　使われていることは，盛土と周溝をもつこともあわせて，当時の葬送を知るうえで貴重な資料です。

北神第４地点遺跡は，北には遠く有馬富士を，東には鏑射山（銅剣型磨製石剣出土）を望む，すばらしく眺望のよいところに集落を営んでいます．これほど見晴らしの良い場所に集落を営んでいることは，当時戦いがあったためだという考え方が一般的です．今回の調査では，その一部が明らかになったにすぎませんが，このような時代の北神地域で最大級の集落址の全体像が今後の調査によって浮きぼりになることが期待されます．

西神ニュータウン内６５地点遺跡

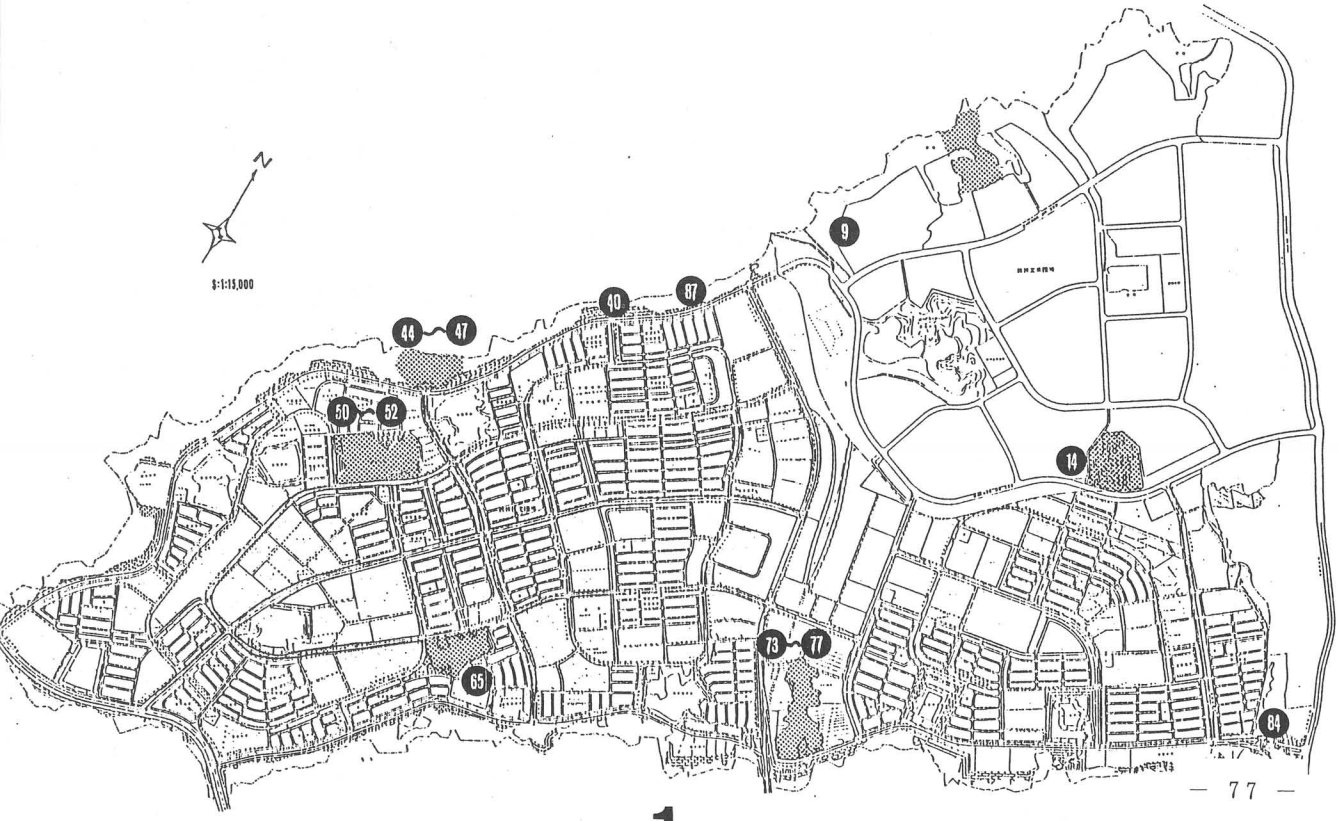
現地説明会資料



昭和６０年 ２月 ３日

神戸市教育委員会
神戸市健康教育公社

図1・2　西神ニュータウン内埋蔵文化財分布地図



1

1　西神ニュータウン内の遺跡

現在，西神ニュータウンの造成地区内では約１００か所の遺跡が確認されています．その大半が弥生時代の集落址や墓址と４世紀から６世紀にかけての古墳です．これらのほかに窯址や城址も見つかっています．

これら遺跡の多くは造成のためすでに消滅していますが，開発局の協力によって保存されている遺跡もあります．

春日台には，５０～５２地点（弥生時代中期の集落址）４４，４５地点（古墳），４７地点（弥生時代の集落址），養田古窯址（鎌倉時代の須恵器・瓦の窯址），西神中央線沿いには73 ～ 77 地点（５基の古墳）そして樫野台にはこの№６５地点などが公園，緑地として保存されることになっています．私たちは，保存された遺跡をよりよい形で次代に伝えていかなければなりません．

６５地点

この丘陵の頂部は標高約１０６ｍで，平野部（枦谷町栃木）との比高差は約７０ｍです．頂部からは明石平野と明石海峡が一望でき，淡路島の西海岸がすぐ間近に見えます．しかし，今回の調査区は，枦谷川から見て反対斜面になるため，頂部ほど見晴しはよくありません．

2

図3　周辺遺跡分布地図

3

2　弥生時代の明石川流域

今からおよそ2,300年前に稲作の技術をもった人々が明石川河口に到着し，農耕をはじめたのが明石川流域の弥生時代の始まりです．この時期の遺跡として，吉田遺跡（玉津町）があります．

やがて彼らは川をさかのぼり，田中，居住（玉津町）西戸田，常本（平野町）に新しいムラをつくっていきました．

弥生時代も中ごろになると，大きなムラがつくられます．新方，田中，南別府，北別府遺跡などがこの時期の遺跡です．また，小さなムラも点在していたようです．

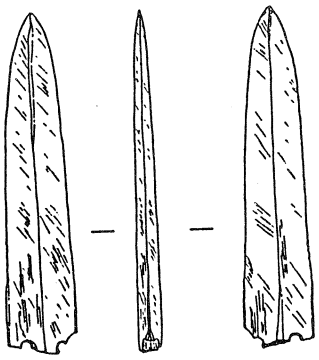


図4　頭高山遺跡出土石剣

さて，弥生時代の中ごろから終りにかけて，平野だけでなく，山の上にもムラができました．明石川流域では頭高山遺跡（伊川谷町），青谷遺跡（玉津町），養田中の池遺跡（西神工業団地内），西神50地点遺跡，65地点遺跡（今回調査中）などが有名です．

なぜこのように不便な山の上で人々が生活しなければならなかったのかは，よくわかっていません．しかし，これらの遺跡に共通する点は，平野を見下ろせる見とおしのよい場所に立地していることです．

弥生時代の終りになると，人々は山の上からおりて，平野で生活していたようです．この時期の代表的な遺跡として養田遺跡（押部谷町）・吉田南遺跡（玉津町）があります．

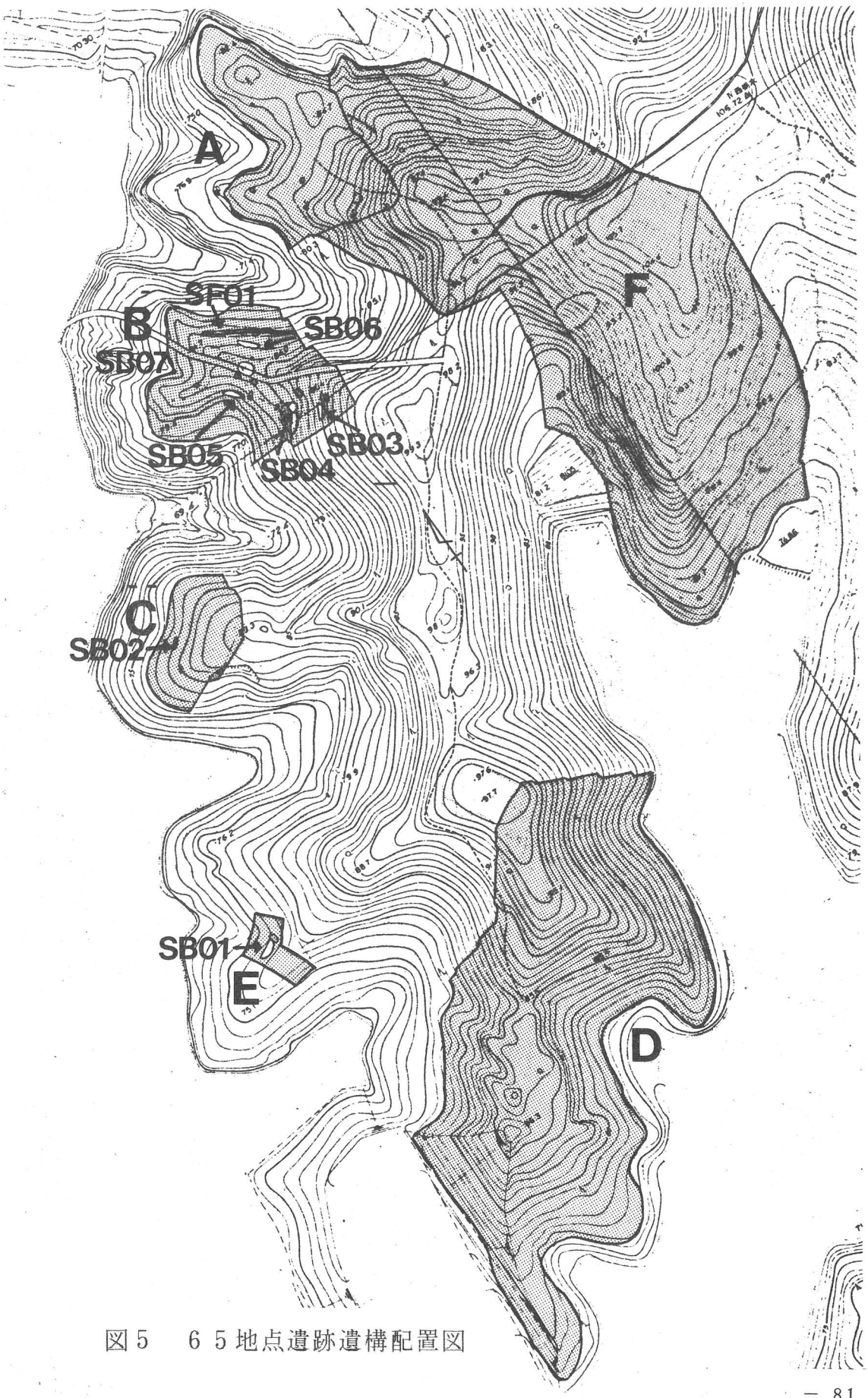


図５　６５地点遺跡遺構配置図

3　調査の概要

第1次試掘調査　昭和49年度に試掘調査を実施した結果，焼土壙や竪穴住居址が確認され，弥生時代の集落がこの丘陵にあることがわかりました．開発局の協力によって約29,000㎡を保存することに決定しました．

第2　試掘調査　昨年の8月～9月に保存区域以外に対して試掘調査を行いました．このトレンチ調査によってA～F地区すべてに包含層があり，16か所の住居址と推定される遺構が確認されました．

59年度調査　59年度開発工事によって削平される予定であるA・B・C・E地区（6,000㎡）について全面調査を行いました．昭和59年9月末から調査を開始し，60年2月初めに完了する予定です．

遺構　竪穴式住居址7か所，地山整形遺構5か所，土壙7か所，ピット若干を検出しました．

A地区　1辺約50cmの炭のつまった焼土壙1か所，水の湧く土壙1か所，火をたいたところを1か所検出しました．水の湧く土壙は，井戸の役割を果したと考えられます．火をたいた所は，烽場であったかもしれません．

B地区　竪穴式住居址5か所，地山整形遺構5か所，土壙5か所，ピット若干を検出しました．

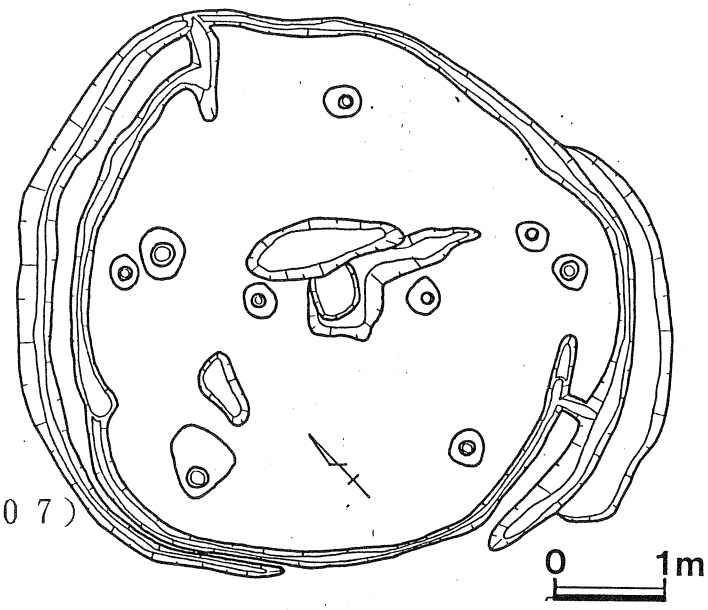


図6　尾根の上の住居址（ＳＢ０７）

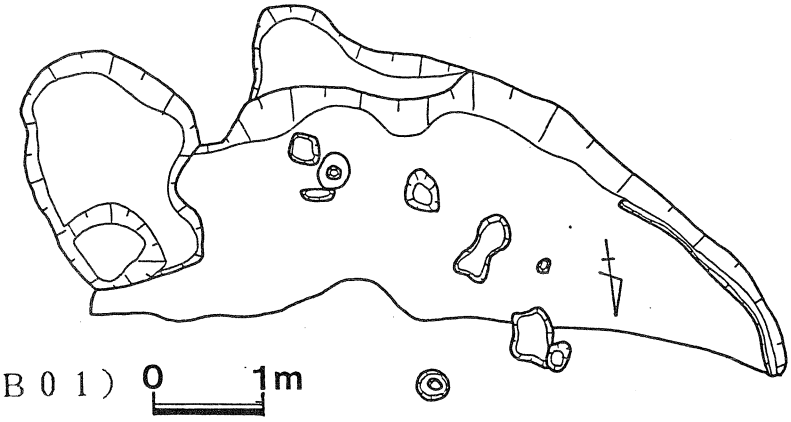


図7　斜面の住居址（ＳＢ０１）

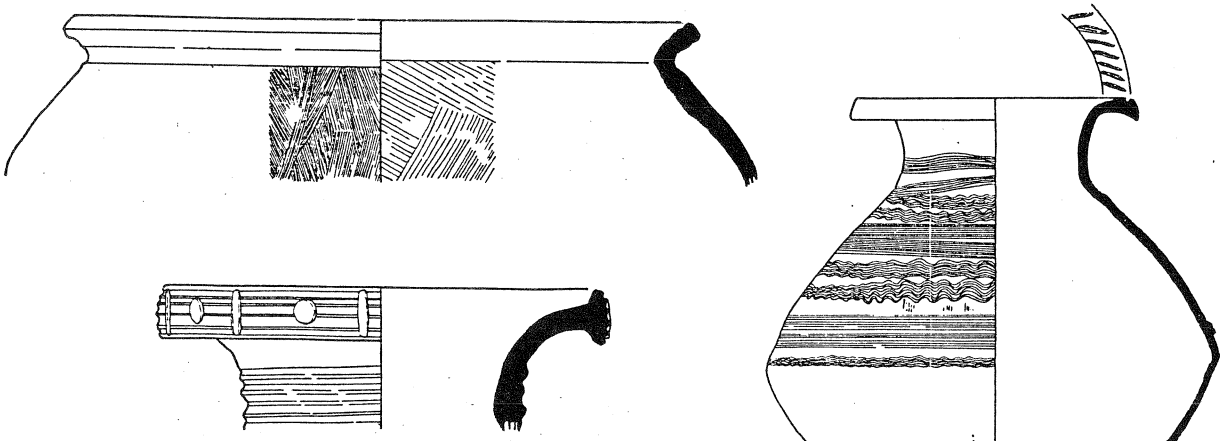


図8　住居址内および周辺出土遺物

7

竪穴住居址
ＳＢ０３　南北約3.7ｍ，東西約6.5ｍの平坦面が残っています．斜面を切りくずして，その土で盛土をして平坦部をつくっています．床面では，たくさんのサヌカイトの破片が出土しました．おそらくここで石器をつくっていたと考えられます．

ＳＢ０４　直径約4.0ｍの少しいびつな円形をしています．ほかの竪穴住居址に比べて小さく，柱穴の数も少なめです．炭化した木材の痕跡があり，火事によって焼け落ちたものと考えられます．サヌカイトは余り出土しませんでした．

ＳＢ０５　ＳＢ０４とほぼ同じ高さにあります．南北約8.0ｍ，東西約3.3ｍの平坦面をつくっています．ＳＢ０３と同じく，地山を切り込んだ部分と盛土をした部分があります．遺物も柱穴も少なめです．

ＳＢ０６　流失してしまっており，床面はほとんど残っていませんでした．南北約6.4ｍ，東西約2.9ｍに亙って斜面が切り込まれています．

ＳＢ０７　尾根の上につくられた円形に近い隅丸方形の形をしています．南北約6.0ｍ，東西約6.0ｍですが，周りの溝が二重になっていることから，建てた後に東へ少し拡張しているかもしれません．五角形に柱を立てて，中心に２本の柱を立てています．上層を床面からたくさんのサヌカイトの製品（石鏃・石錘）と破片が出土しました．

図９　６５地点遺跡からの眺望図

道　SF01　斜面を切り込んで，幅約60cmの平坦部をつくりだしています．長さ約30 mを確認しましたが，さらに調査区外へ伸びています．

C地区　SB02　竪穴住居址1か所と流路1条を検出しました．南西約2.0 m，東西約5.0 mの範囲の斜面を切り込んで平坦面をつくっています．床面には焼けた痕跡があり，一面に炭がひろがっていました．西側の斜面には，捨てられた土器が，かたまって出土しました．

E地区　SB01　竪穴住居址1か所と土壙1か所を検出しました．斜面を切り込んで，南北約6.4 m，東西約2.7 mの平坦面をつくっています．床面と，そこから流れ出た土からたくさんのサヌカイトの石鏃や石錘，破片が出土しました．

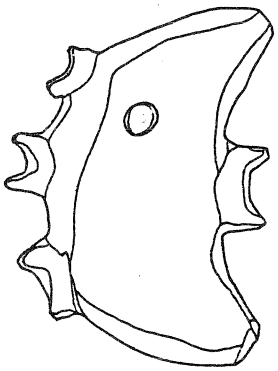
4　まとめ

今回の調査によって65地点遺跡の一部の様子を知ることができました．それは，約2,000年前にこの地に入り，木を切り倒し，切株を起し，山を削って家を建て，生活を営んだ人々の残した足跡と言えるでしょう．

明石海峡をみおろすこの山で，当時の人々がどんな生活をしていたか疑問は尽きません．私たちは，この人々の生活の足跡（文化財）を活用しながら，大切に後世に伝えなければなりません．

郡　家　遺　跡

城ノ前地区　第７次調査現地説明会資料



昭和60年３月３日

神戸市教育委員会

神戸市健康教育公社

郡家遺跡の調査については、神戸市文化財専門委員　野地脩左、小林行雄
檀上重光の三先生の御指導を得ました。また、神戸市都市計画局の協力を得ました。

所在地　　神戸市東灘区御影町郡家、御影字城ノ前
時　代　　弥生時代後期～鎌倉時代
種　類　　住居址、墓址など

A．位置と環境

郡家遺跡は神戸市東灘区御影町郡家、御影を中心に東は住吉川、西は石屋川、北は阪急電車神戸線、南は国道２号線まで広がるであろうと考えられる遺跡です。今回の調査対象となった地点は、御影町御影字城ノ前1427番地に所在し、明治22年頃は石屋川と住吉川による広大な複合扇状地が広がる水田地帯であった地域です。以後、市外化が進み近年区画整理事業の一環として、都市計画道路山手幹線・弓場線が、東西、南北に予定されたのを機に、昭和58年度より道路予定地内について発掘調査を実施しています。

B．郡家遺跡の今までの調査

昭和54年に発掘調査を実施した郡家大蔵地区で、奈良時代の掘立柱建物址が発見されてから、周辺を現在までに19回調査を行っています。最近では、都市計画道路山手幹線・弓場線建設に伴って、城ノ前地区を中心に調査を行っています。この城ノ前地区では、弥生時代後期～古墳時代初頭の遺構、遺物が発見され、さらに古墳時代、平安時代、鎌倉時代の集落址が発見されています。郡家遺跡は弥生時代から鎌倉時代におよぶ複合遺跡です。

調査地の位置図　1／5000

1，郡家大蔵地区第1次調査

2，郡家中町地区第1次調査

3，天神川改修工事に伴う第1次調査

4，城の前地区第4次調査

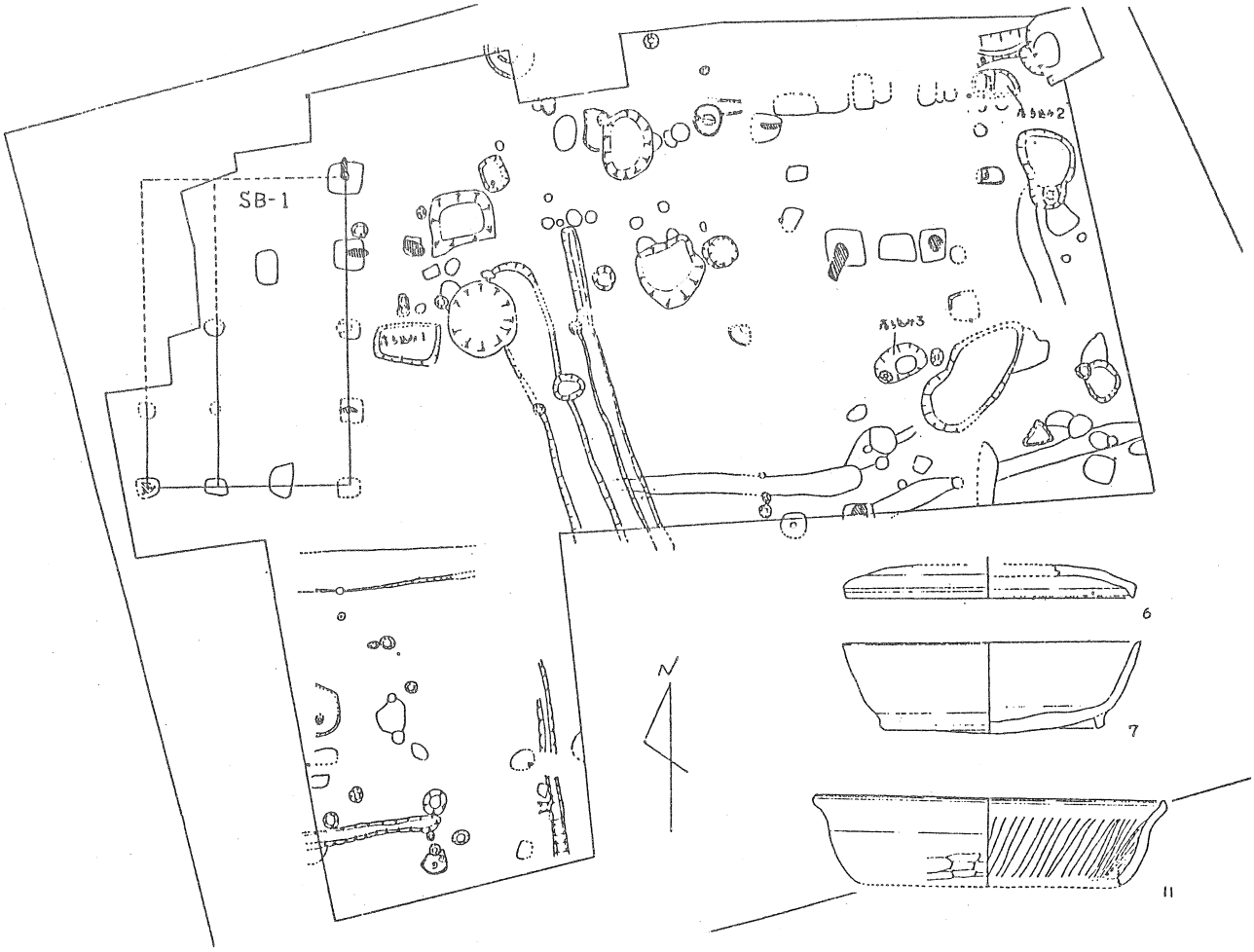
5，城の前地区第6次調査

6，城の前地区第7次調査

（１）郡家大蔵地区
第１次調査
（昭和54年度）

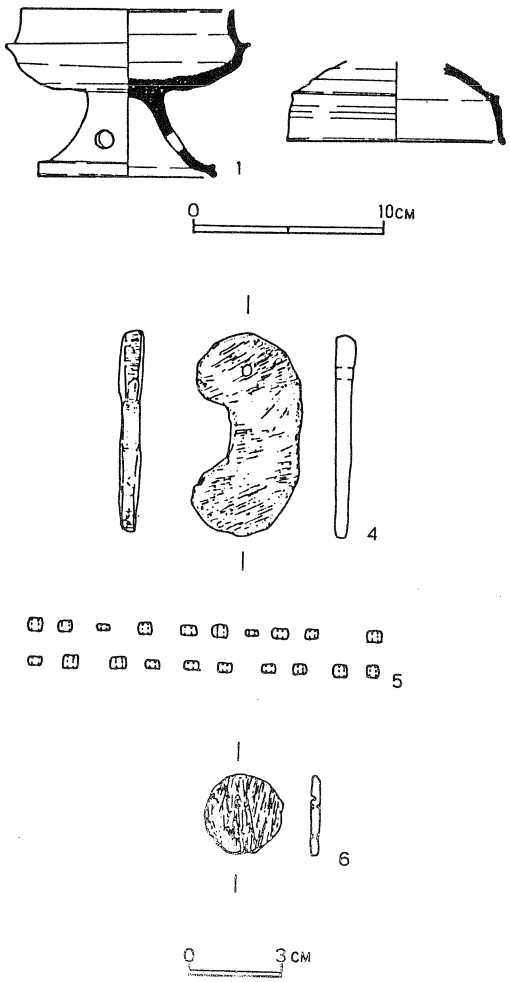
中世のころのものと考えられる暗渠や落込み、奈良時代から平安時代の掘立柱建物址、弥生時代中期後半から後期にかけての遺構が検出されました。奈良時代から平安時代の遺構は、郡家大蔵の地名から、菟原郡衙跡と推定しています。

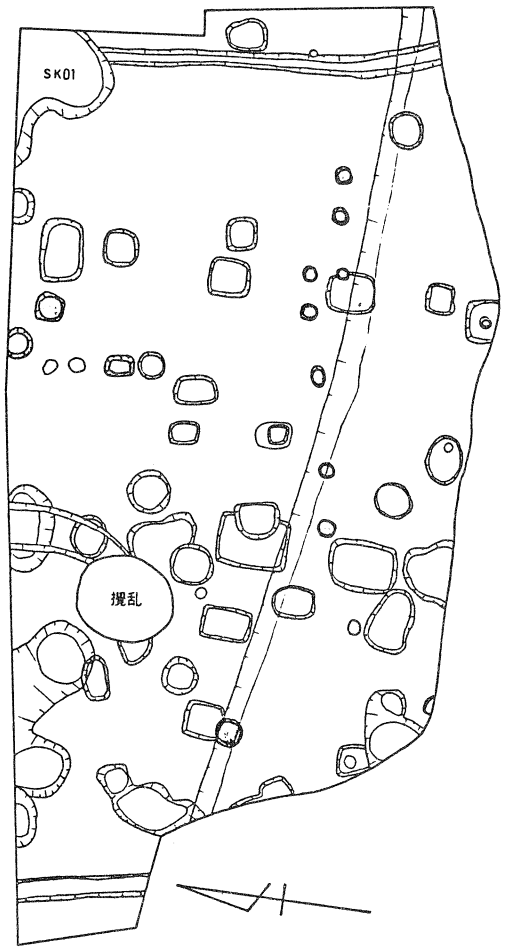
郡家遺跡大蔵地区検出遺構・遺物



（２）郡家中町地区
第１次調査
（昭和56年度）

鎌倉時代の水田址と柱穴、溝、奈良時代から平安時代の柱穴群、古墳時代後期（６世紀後半）の柱穴群と祭祀に関係していたと思われる土壙、（ここから出土した須恵器坏身には、臼玉が20個入っていました）古墳時代後期（５世紀後半）の土壙が検出されました。
奈良・平安時代の遺物として緑釉片が出土しており、ここが郡衙跡であった可能性が極めて高いと考えられます。

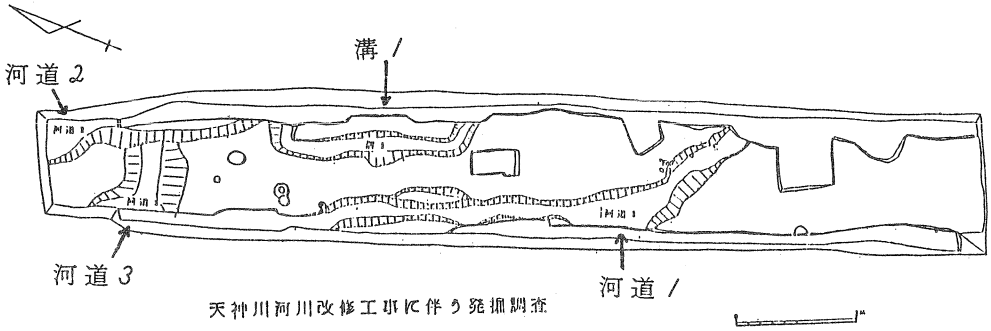




遺構全体図（▨は奈良時代、他は古墳時代）

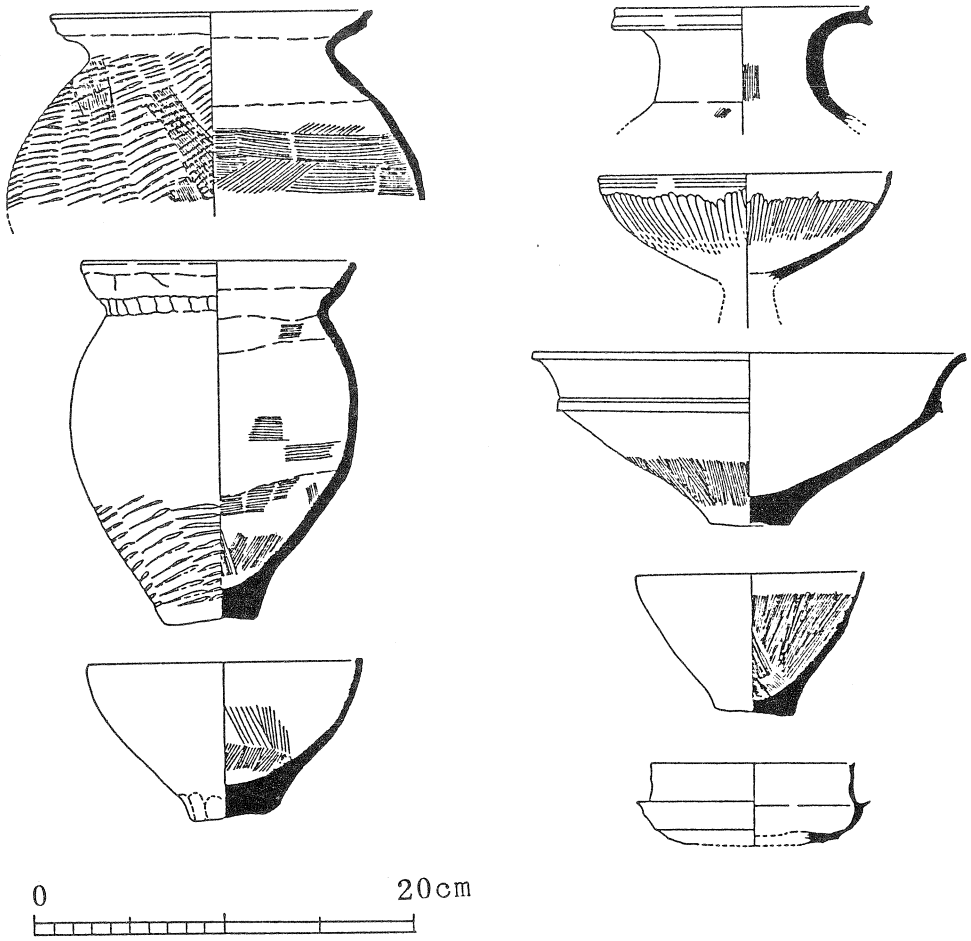
(3)天神川改修工事に伴う第1次調査(昭和57年度)

調査地の多くは自然河道でしたが、鎌倉時代(土壙)、古墳時代後期、弥生時代後期末(方形周溝状遺構)の遺構・遺物が発見されました。



天神川河川改修工事に伴う発掘調査

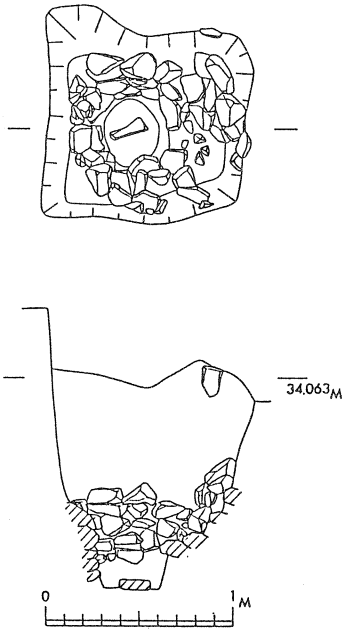
遺構平面図



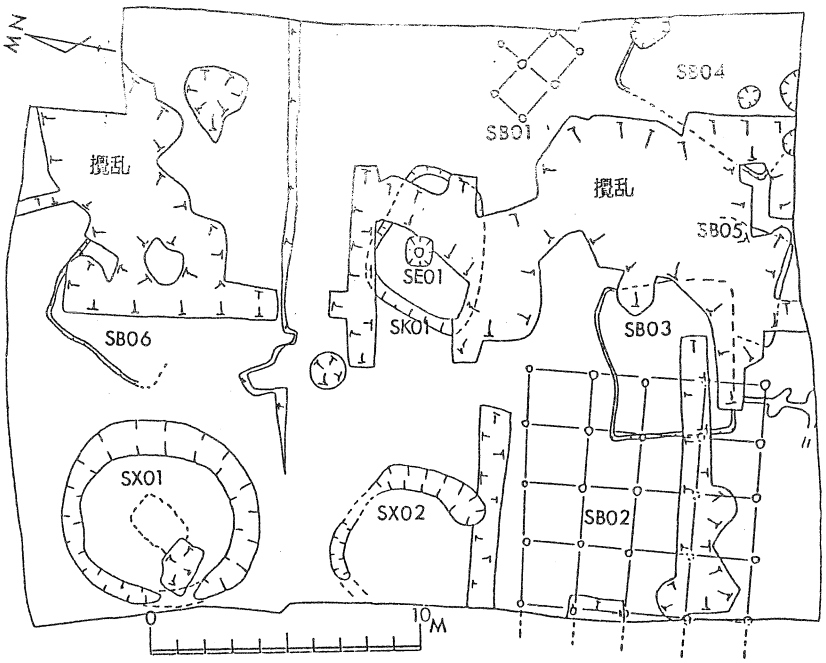
天神川河川改修工事に伴う発掘調査 出土遺物

（４）城ノ前地区
第４次調査
（昭和58年度）

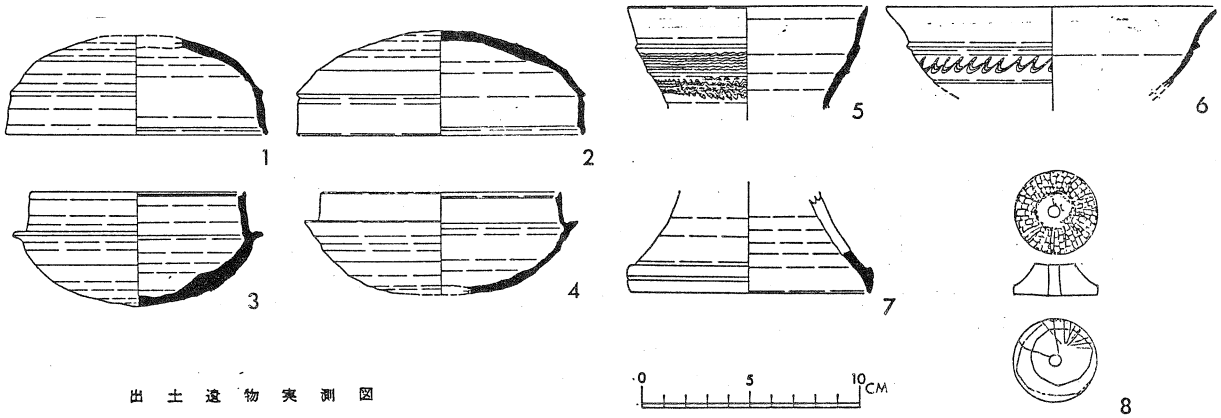
鎌倉時代中期（12世紀後半～13世紀前半）の掘立柱建物址・井戸・土壙、平安時代後期（11世紀前半）の掘立柱建物址、古墳時代後期（６世紀初頭）の竪穴住居址（これらの中には滑石製紡錘車や滑石の原石が出土したものがあります）弥生時代後期の円形周溝墓・土壙が発見されました。



井　戸　SE01



平　面　図

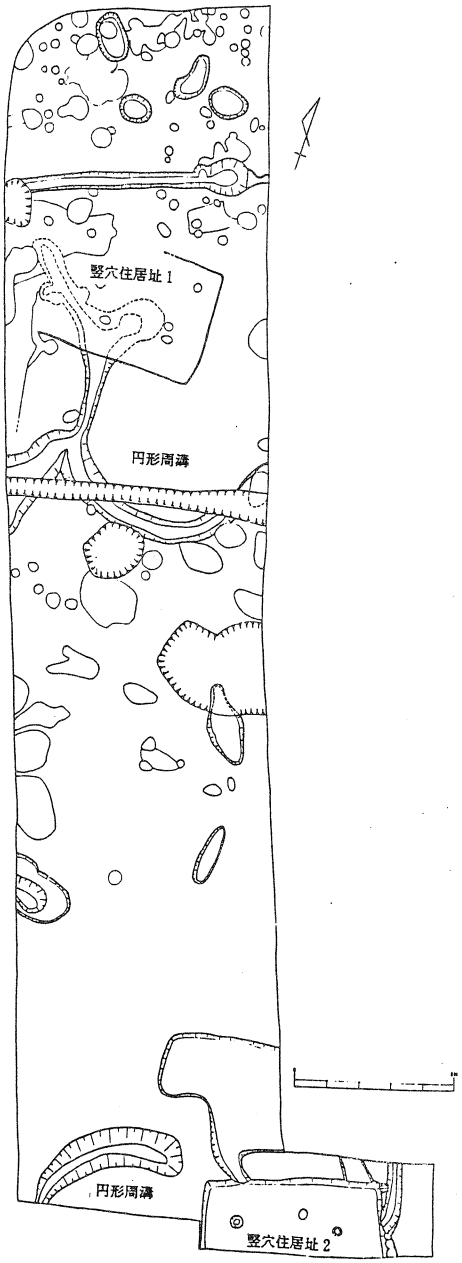


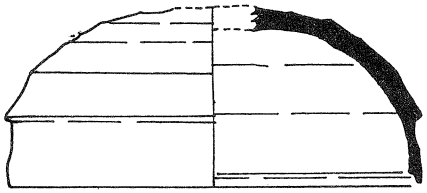
出土遺物実測図

1～4、6　SB04出土　　5、7、8　SB03出土

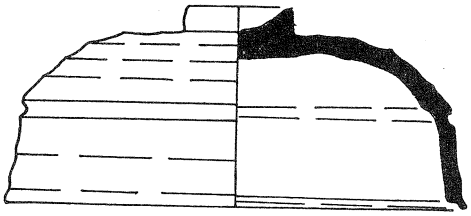
（５）城ノ前地区
第６次調査
（昭和59年度）

平安時代の土壙（北宋銭「宋通元寶」の出土したものがあります）・柱穴群・溝、古墳時代後期の竪穴住居址（５世紀後半）・溝（有孔円板の出土したものがあります）・土壙・柱穴、弥生時代後期の円形周溝・土壙が検出されました。





9



10

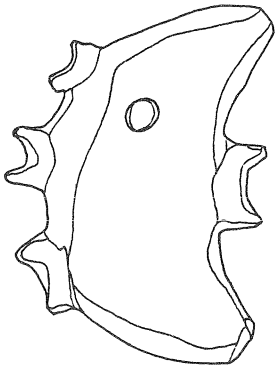
９，城の前地区第６次調査ＳＢ０１床面

１０，城の前地区第６次調査ＳＢ０１

（６）城ノ前地区

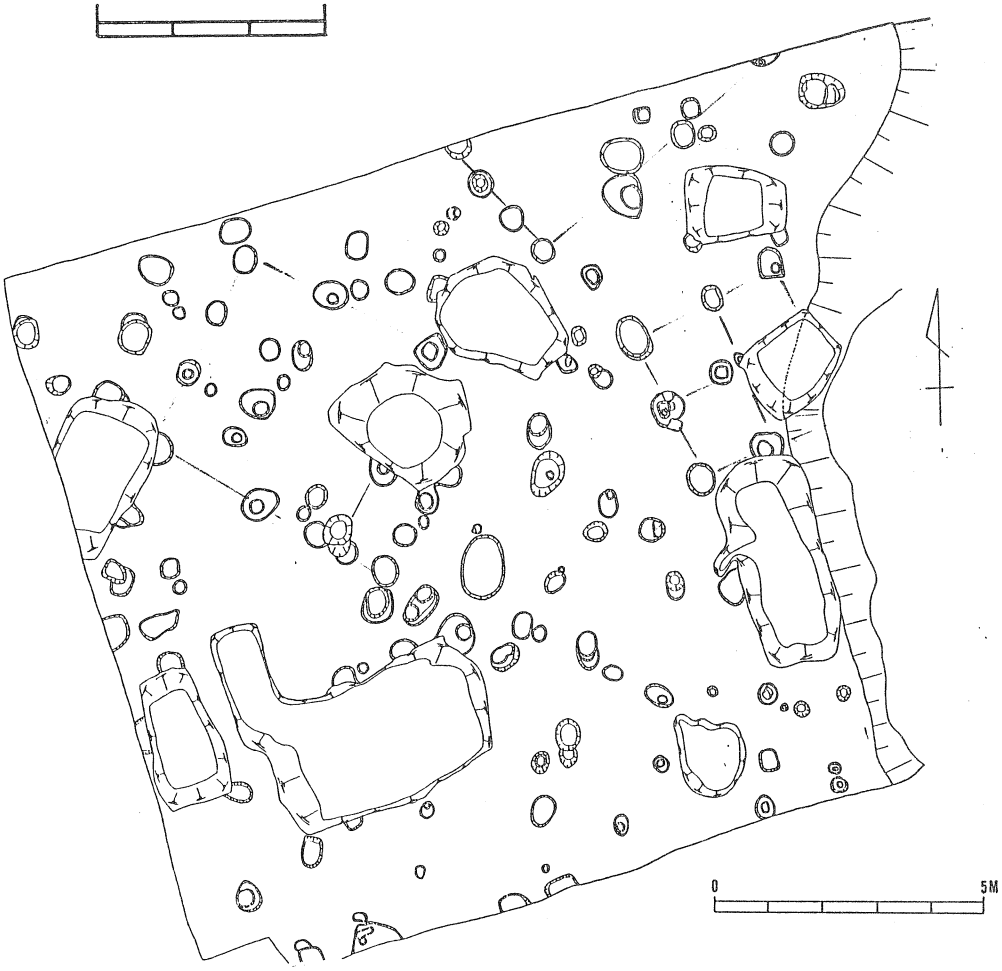
第７次調査

子持勾玉

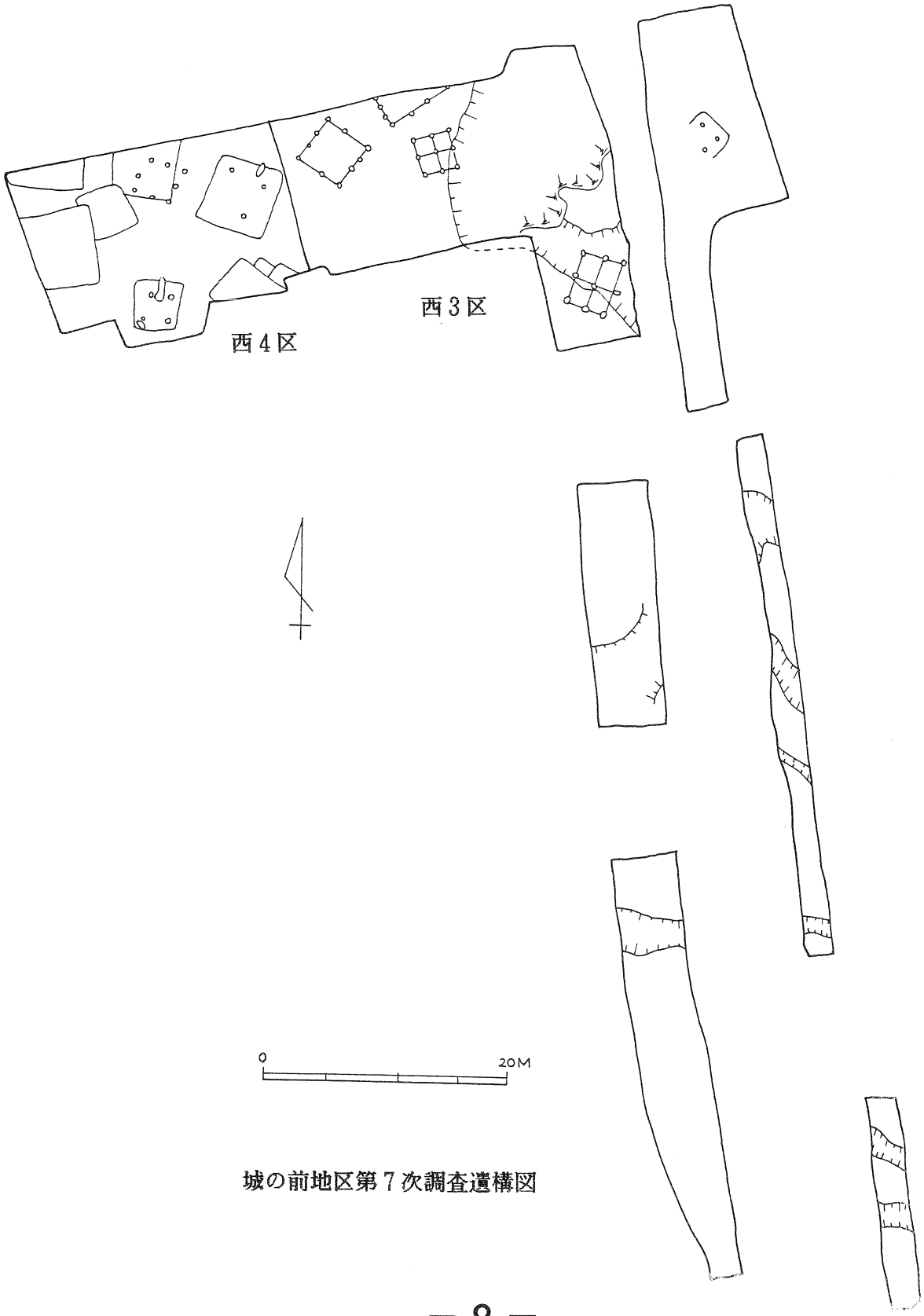


0　3CM

山手幹線と弓場線の交差点部分を７つの地区に分けて調査しました。今回の調査区はその最後の地区に当ります。現在までに出土した遺物はコンテナ100箱以上にのぼります。調査地の南の部分は自然河道で、弥生時代後期の土器が多量に出土しています。今回の調査区の東側に隣接した地区では、古墳時代後期（６世紀後半）の掘立柱建物址４棟、柱列１列が検出されました。また、自然河道中からは子持勾玉が出土しています。さらに東側の地区では、古墳時代後期（６世紀）の竪穴住居址１棟が発見されました。



城の前地区第７次調査（西３区）遺構平面図



城の前地区第7次調査遺構図

C．調査概要

今回、発掘調査した面積は約300m²で、発見された遺構は、古墳時代中期～後期(５世紀後半～６世紀中頃)のものと、古墳時代後期のものです。

①古墳時代中期～後期の遺構
(５世紀後半～６世紀中頃)

竪穴住居址10棟と土壙７基がみつかりました。

竪穴住居址１

調査中央部東端でみつかった住居址で、1/3は後世の攪乱によって失われています。

東西5.6m、南北5.2mの方形の住居址で、北辺中央に煙出しをもつカマドがつくりつけられています。また、住居址内には周壁溝が掘られており、幅は10～20cmです。

竪穴住居址２

東西4.0m以上、南北4.3mの方形の住居址です。南側は大きく攪乱を受けているうえに調査地区外へ広がっているため正確な規模は不明です。住居址床面は、下層の遺物包含層となっており、今のところ柱跡をみつけることはできていません。

竪穴住居址３．４

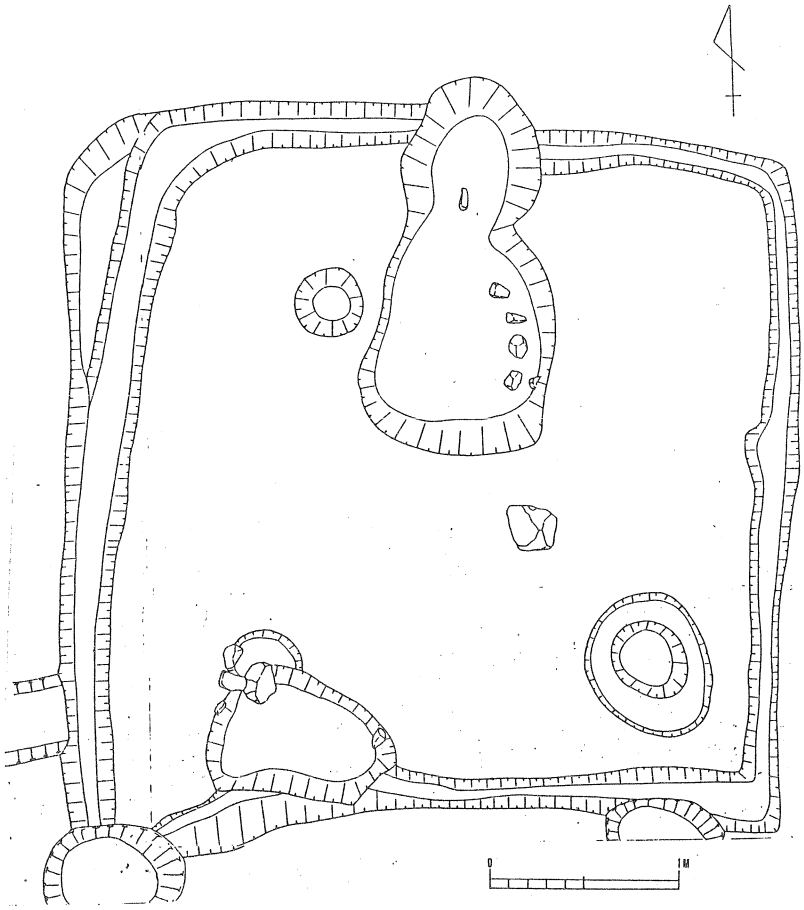
南西部を竪穴住居址２に切られている住居址で、竪穴住居址４は周壁溝が巡ります。

竪穴住居址５

調査地中央南端に位置し、南西コーナー部を竪穴住居址10によって切られています。

東西3.7m、南北3.9mのほぼ正方形の住居址です。中央北辺にカマドがつくりつけられています。カマドの煙出しの幅40cm、焚口幅1.0m、残存長2.0mあり、焚口が住居址中央にある大きなものです。

竪穴の内側には周壁溝が巡り、柱跡は３ヶ所確認されています。



竪穴住居址 5

竪穴住居址 6

調査地中央北端に位置し南西コーナー部を竪穴住居址７によって切られています。

東西4.6m、南北3.5m以上あり、北部は攪乱のため失われています。

周壁溝がめぐり、４ケ所の柱掘型が発見されました。柱の間隔は東西2.5m、南北2.6mです。

竪穴住居址 7

調査地中央よりやや西で検出しました。西辺は竪穴住居址８によって切られています。

東西4.1m、南北4.0mのほぼ正方形の竪穴住居址で４ケ所の柱跡が発見されました。柱の間隔は東西2.5m、南北1.7mあります。

竪穴住居址の北辺中央にカマドをつくりつけています。

竪穴住居址８

調査地西端で検出しました。

東西5.0m以上、南北6.9mの方形の竪穴住居址です。北辺にカマドつくりつけられ、カマド内には土師器の甕が倒れた形で出土しています。

竪穴住居址９

調査地西北端で検出しました。

東西4.6m、南北3.5m以上の方形の竪穴住居址です。床面で、須恵器高坏、土師器甕が、散乱した状態で出土しました。また、周壁溝が巡らせています。

竪穴住居址10

調査地西南端で北辺だけが検出されました。

東西5.6m以上、南北1.6m以上の住居址で北辺にカマドをつくりつけています。

②古墳時代後期の遺構（６世紀後半）

掘立柱建物址１棟が発見されました。

掘立柱建物址１（ＳＢ18）、竪穴住居址６が埋没したあとたてられた建物址です。

東西２間、南北２間で束柱はありません。東西は1.5m間隔、南北は1.5m間隔に柱掘型を掘っています。

土壙

長方形、長楕円形の土壙を６ケ所確認しました。なかでも、竪穴住居址５の埋土上層を掘り込んだ土壙１は40cm×30cmの長方形土壙で上部に石組みが検出された。石組みの間からフイゴの羽口が出土しました。埋土は炭・灰を含んでいました。これらのことから炉址と推定されます。

他の土壙には石組みはみられませんでしたが、炭・灰層がたまりほぼ規模も同一であるところから鍛冶に関係する遺構と考えられます。

D。主要出土遺物

今回の発掘調査区域からは、コンテナ40箱分の遺物が出土しています。

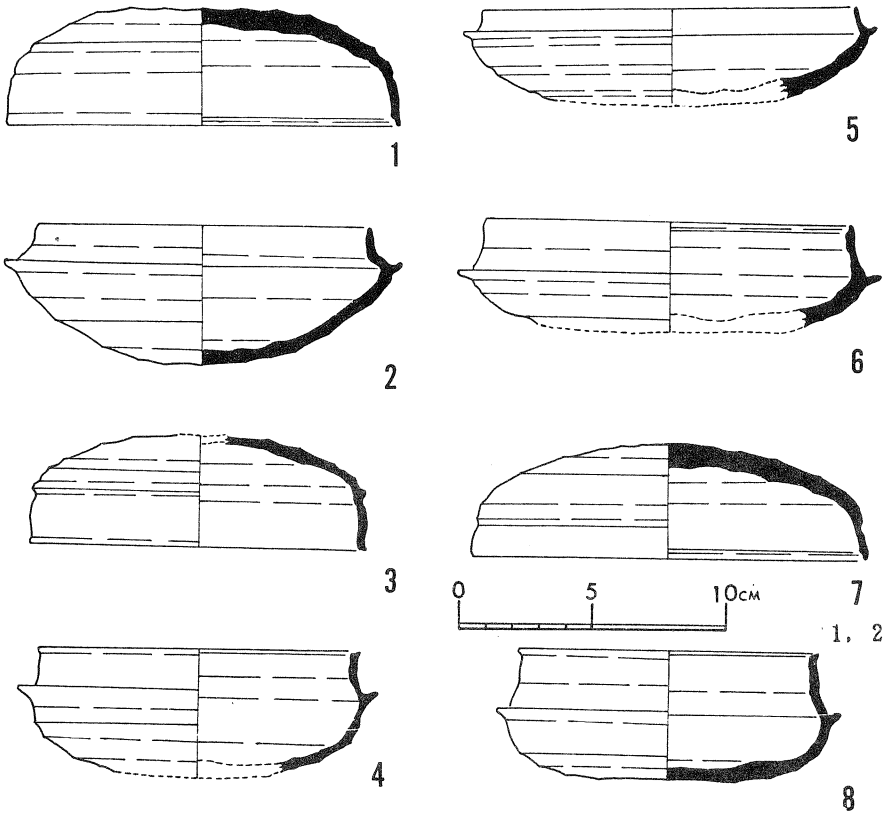
遺　　構	時　　代	出土遺物
掘立柱建物柱穴	古墳時代	須恵器片 土師器片 鉄器(鉄刀片)
竪穴住居址1 (床面)	6世紀前半	須恵器(坏蓋)
竪穴住居址5 (カマド内)	5世紀後半	須恵器 (甕、坏身)
竪穴住居址6 (床面)	5世紀後半	須恵器(坏蓋) 土師器(高坏)
竪穴住居址7 (床面)	5世紀末～ 6世紀初頭	須恵器 (坏身、坏蓋)
竪穴住居址8 (カマド内) (周 溝 内)	6世紀前半	土師器(甕) 須恵器(坏蓋)
竪穴住居址9 (床面)	5世紀末	土師器(甕) 土製支脚 須恵器(高坏)
土　壙　1	古墳時代	フイゴの羽口 須恵器(坏身)

遺物包含層内

弥生土器(後期)

古墳時代須恵器(5世紀後半～6世紀後半)

中世須恵質土器　鎌倉時代



1，2，7，竪穴住居址1床面
4，竪穴住居址カマド内
3，竪穴住居址埋土
5，包含層内
6，土壙1埋土
8，西3区河道内

F．まとめ

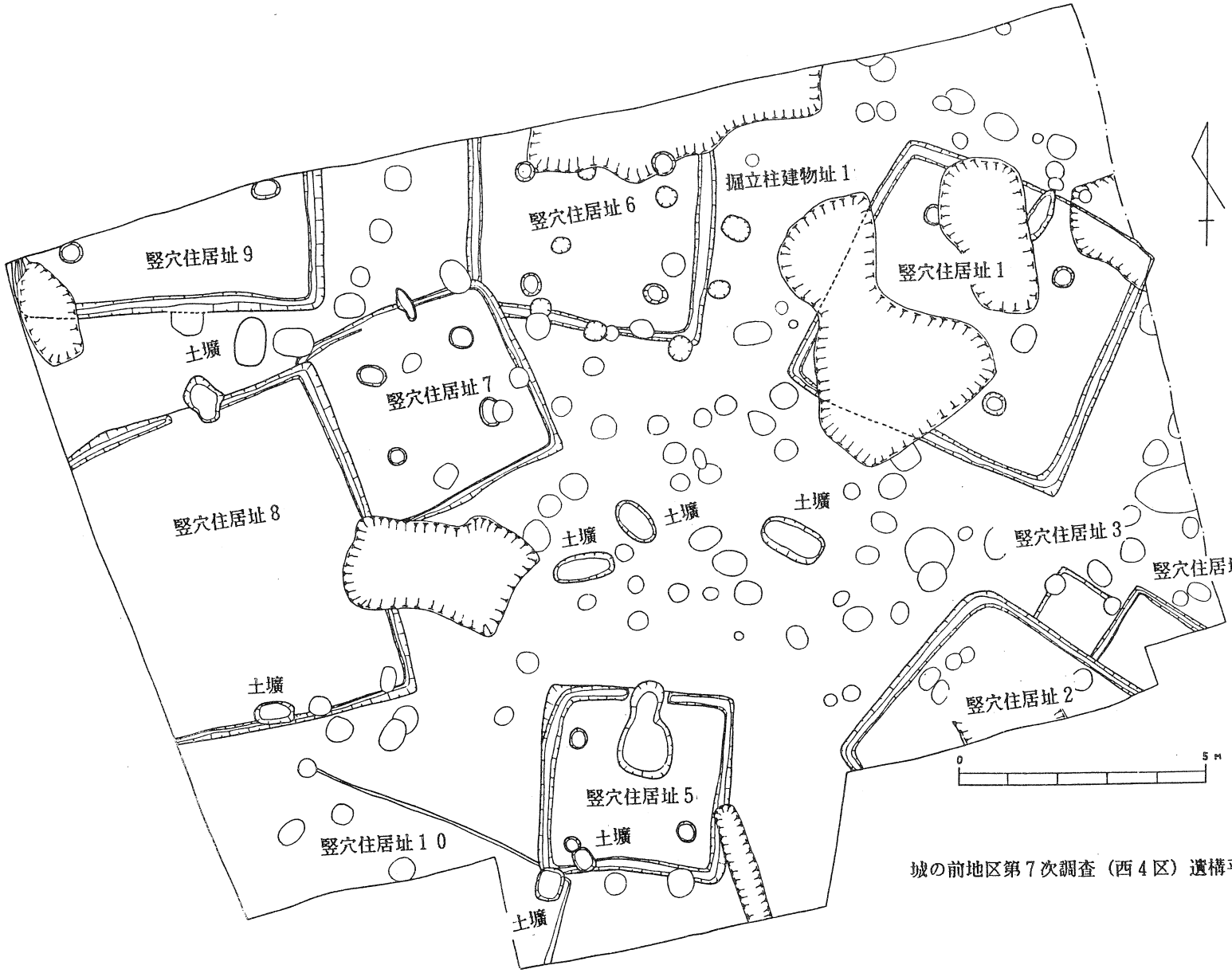
①遺物の出土状況および遺構の重複状況から

5世紀後半	5世紀末	6世紀前半
竪穴住居址5	→	竪穴住居址10
竪穴住居址6 →	竪穴住居址7 →	竪穴住居址8
	竪穴住居址9	
		竪穴住居址1

というように順次、竪穴住居址を営んだと考えられます。

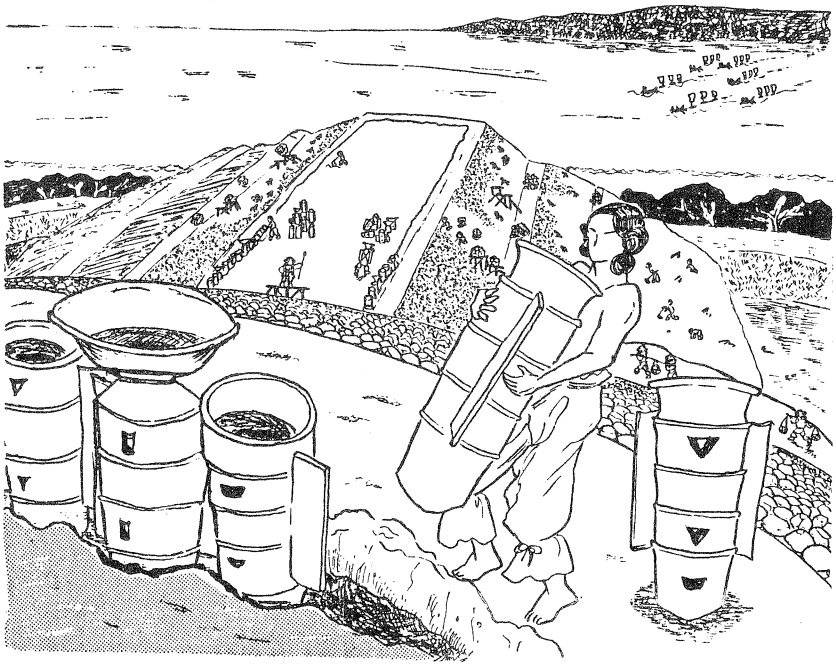
②掘立柱建物の時期をきめる遺物の出土はありませんでしたが、遺物包含層から出土する須恵器によって6世紀中葉～後半のものと考えられます。当調査地東側で検出した4棟の掘立柱建物も同時期と考えられます。

③土壙は、6世紀初頭につくられた露天の炉址と考えられ、古墳時代後期の野鍛冶の形態を考える上で珍しい資料です。



城の前地区第7次調査（西4区）遺構平面図

史跡　五色塚古墳・小壺古墳
現地説明会資料



昭和60年３月10日

神戸市教育委員会

史跡五色塚古墳・小壺古墳
調査期間　　昭和60年1月10日～昭和60年3月31日
調査面積　　1.600m²

今回の調査を実施するにあたっては、文化庁、兵庫県教育委員会の御指導と神戸市文化財専門委員　野地脩左、小林行雄、檀上重光の三先生の御指導を得ました。また、神戸市住宅局の協力を得ました。

史跡五色塚古墳・小壺古墳現地説明会資料

1．はじめに

赤石（明石）に墓を造るのに船を編んで淡路島から石を運んだという記事が日本書紀にのっています。この墓は、神功皇后を討つために香坂王、忍熊王の２人の皇子が兵を集めるといつわって造ったと書かれています。五色塚古墳がこの墓であると言われています。

古代の人々は、周辺に村もなく独立して海を見下す位置に造られた巨大な墓を見て物語を考えたものと思われます。

このようにふるくから五色塚古墳は、人々に知られた古墳です。

大正10年に国の史跡に指定され昭和40年から10年をかけて復元整備を行ないました。

昭和58年３月に五色塚古墳の北側にある市営住宅の建替にともない発掘調査を実施したところ、濠の外側に溝がめぐっていることを確認しました。そのため、今回、国の補助金を得て発掘調査を行ないました。

2．位置及び周辺の歴史的環境

五色塚古墳は、神戸市垂水区五色山４丁目に所在する兵庫県下最大の前方後円墳です。五色塚古墳は、大阪湾から播磨灘へかけての海岸線が最も南へ突出した場所に存在し、垂水丘陵南麓

明石海峡

1　歌敷山東古墳群
2　歌敷山西古墳群
3　舞子浜埴輪円筒棺出土地点
4　舞子古墳群
5　大歳山遺跡
6　狩口台狐塚古墳
7　多聞古墳群

2

の台地突端に、前方部を南に向けて築かれています。

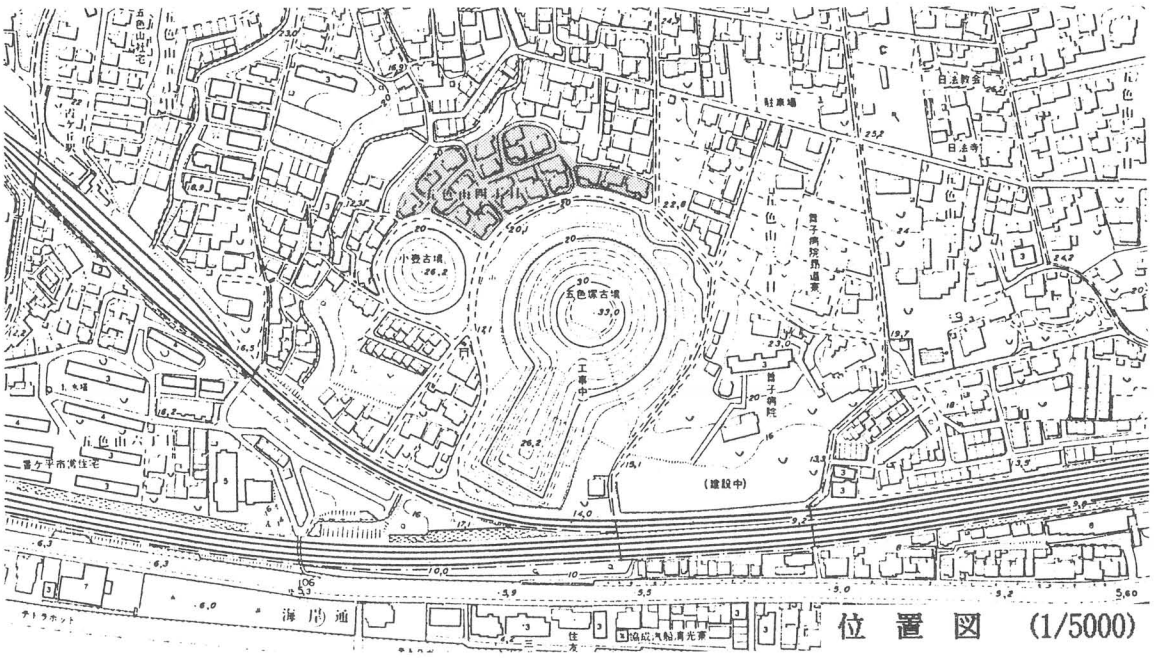
五色塚古墳のある垂水から舞子にかけては、丘陵が海岸まで達しており、平野の発達はみられません。そのためか、これまで集落遺跡の存在は確認されていません。

五色塚古墳と接して西側に小壺古墳がありますが、その西方約500mのところには、かつて歌敷山東古墳、西古墳がありました。いずれも埴輪をもつ、直径20～25m の円墳で、五色塚古墳に後続する時期の古墳と考えられています。さらに西方300mの舞子の浜からは埴輪円筒棺が２基見つかっています。このように五色塚古墳に近い時期は、海岸沿いに存在するという特徴がみられます。一方、北西２kmには、有名な大歳山遺跡があり、前期古墳や６世紀前半の前方後円墳の存在が知られています。その東の舞子丘陵上には、６世紀後半代の古墳が多数存在しています。

３．これまでの調査

五色塚古墳は、古くから埴輪の存在に注目され、千壺古墳という別名でもよく知られていましたが、具体的に発掘調査を着手したのは、史跡環境整備事業が開始した昭和40年からです。その間の調査で多くのことが明らかになりました。

①五色塚古墳は、墳丘長194m、後円部の高さ18m 、前方部の先端の高さ11.5m の前方後円墳であること
②墳丘は３段に築かれ、各段の斜面には石が葺かれ、墳頂と各段の小段には埴輪がたて並べられていること
③墳丘の周囲には空濠がめぐらされていること
④周濠内には、方形のマウンドが２基と通路状遺構１が存在すること
などがわかりました。一方、同時に調査した小壺古墳は、
①直径67m の兵庫県下最大の円墳で、墳丘は２段に築かれていること
②墳丘斜面に葺石はないが、墳頂と小段には埴輪がめぐらされていること
③周囲に空濠をもつということ
が明らかになっています。



位置図 (1/5000)